

骨こつ踊り

向 井 豊 昭

朝は、またの真ん中からくる。鶏のように首をもたげた陰茎を、今朝もまた布団の中の五本の指がにぎりしめていた。

しゅいん（手淫）「する」

yayokoyki (ja-jo-ko-i-kiやよコイキ)

[yay（自分の）+o（陰部）+koyki（いじめる）]

知里真志保の『分類アイヌ語辞典』にはこんな言葉が見られるが、『いじめる』とは、うまく言い当てたものである。

まだ陰茎をいじめる術を知らなかった子どものころ、尻をいじめては楽しんだ。雨戸の節穴か

ら射してくる朝の光を拒みながら、布団をかぶった体はみみずのようにくねりはじめる。パンツをつかんだ右の手は荒々しいサーカスの団長の手であり、それに逆らう左の手はさらわれてきた子どもの手だった。子どもの手は払い飛ばされ、たちまちパンツが引きずり下ろされる。団長の手は鞭になり、むき出しの尻を打ち続けた。打ち続ける快感と、打ち続けられる快感は、螺旋のようからみ合い体の中を走っていくのだ。

「坊や、起きなさい」

ふすま越しに祖母の声がする。仏壇の鐘の音、食卓に並べられる茶碗の音、箸の音——一日のはじまりに追いたてられていくサーカスのはかなさに眉根を寄せ、どんよりとパンツを上げながら、この世をうかがうように首を出していく。

首の先には小さな枕があった。その枕に並んでいるのは一緒に寝た祖母の枕である。

深夜、知らない時刻に帰ってくる母が隣の布団でぐっすりと眠っていたのは、サーカスごっこを覚える前のことだった。母の布団は、もう隣には敷いていない。

夕方近く、オットメに出かける母だった。長屋の小路にただよわせていくお化粧の匂いは、母の着物に咲く花の色をいつそう際立たせたものである。

花の中でも目を惹くのは、紫木蓮だった。着物一杯に散りばめられた花びらの表の濃い紫は、その裏側の白を引き立て、白は紫を引き立てて咲きほこるのだ。

オットメを止め、母が家にいるようになったのは、小学一年になってからだ。母は一日中、布団を独り占めにし、医者が時々たずねてきた。

医者の最後の訪れは知らない。深夜だった。ゆさぶられ、名を呼ばれ、それでも起きない我が子を見つめながら、母は言った。

「かわいそうだわ。もう起こさないで……」

朝、母の顔には白い布があった。手拭ではなく、濡れてもいなかった。額の上ではなく、顔のすべてをおおっているというのに、いつものように熱を冷やしているのだと思えなかった。

「お母ちゃん、まだ眠ってる」

そう言いながらいそいそと着替える姿から目をそらし、祖父も祖母も、母の二人の弟も何も言わなかった。その日は学校の遠足だったのだ。品川的大海寺だという遠足先を考えて、みんなは黙って母への供養を託したという。

みんなの中に父はいない。父は母のオットメ先の客の一人だった。

遠足が終わり、リュックサックは薄くなったが、土産話はふくらんでいた。勝手口のガラス戸を勢いよく開ける。途端に鼻を突く匂いがあった。見知らぬ家のようにかたづけられた空間一杯に、線香の匂いがこもっているのだ。

ゆつくりと板の間を踏み、茶の間へ入った。ふすまは外され、母の眠る奥の間は丸見えだった。

布団の位置が変わっている。白布をかぶって眠り続ける母の枕元には小さな机があった。机の上には仏壇の線香立てが移され、細い煙が立ち上っている。母の体の向こうにある縁側には、簞笥や本棚が運び込まれていた。

「もつと押せ」と指図をしているのは祖父である。簞笥に手をかけ力んでいるのは会社について

いるはずの叔父二人だった。

雑布マムがけをしている祖母が顔を上げた。手を止めて立ち上がる。小走りに近づいてくる祖母の手の雑布からしずくが落ちた。

「坊や、おとなしくするんだよ。お母ちゃんが死んだんだよ」

尻から体が落ち、リュックサックを背負った背中が畳を打った。

「お母ちゃーん！」

言葉が喉をかきむしり、涙が目から突き上がる。大の字になり、両手、両手が畳を叩いた。

「坊や、泣くんじゃないよ。泣けばサーカスにさらわれてしまうからね」

孫をなだめるいつもの言葉だった。

「泣け！ うんと泣け！ もっと泣け！」

祖父の声が鼓膜をふるわせ、鞭のように悲しみをあやしていった。まどろみの中で尻をいじめるようになったのは、それから間もなくのことである。

たくさんものをいじめ、たくさんもののにいじめられてきた。まるでそのことが生の確認であるかのように……

まどろみの中で陰茎をいじめはじめる。指は臆。女の顔はまだ浮かばない。

指の動きに呼ばれながら顔が現われてくる。輪郭はまだない。人魂のようにゆれながら唇が近づいてきた。唇の右上の小さなほくろ。一度だけ寝てしまったあの女だ。あしかけ三十三年の遠い昔のことである。

あっちへいけ。母親の三十三回忌もなかった男が、今更何で、別れた女との三十三回忌をしななければならないのだ。

いないのか？ もっと新しい女は、一人もいないのか？

「いるよ、先生」

ろうそくのように声が灯る。淡い光の中に顔が浮かび上がった。艶のない髪がもつれ合いながら肩の上に広がっている。大きな目がうるみ、涙が頬をつたわっていた。

「かわいそうに、かわいそうに。誰にいじめられたの？」

言葉をかけて抱きしめると齒から笑った。小学三年生のあどけない笑いである。サチコは今日、学校にくるのだろうか？

目覚ましが鳴った。隣室からはテレビの音が聞こえ、流しの水が音をたてていた。隣の布団はとつくに空っぽになり、妻は昨夜の食器を洗っているのだ。共稼ぎの妻の組んだプログラムである。

陰茎をにぎった手をほどき、その手で目覚ましのベルを止めた。土曜日まで、あと三日なのだ。土曜の夜は妻の体を相手にしなければならない。それもまた妻の組んだプログラムではあったが、その夜のために体の力を蓄えておこう。

まどろみをさえぎるように眼鏡をかけた。眼鏡をかけて見えるこの世も、まどろみなしには生き難い。だが、なぜか人は顔を洗い、齒を磨き、櫛を使って、覚めたふりをしなければならないのだ。

起こしたばかりの上半身を布団に向かって引っぱろうとする力がある。

ゴキッ！

骨の外れるような痛みを残して、自分が二つに割れていく。振り返ると、眼鏡を外したもう一人の自分が枕に頭をのせていた。

「サチコと、やりたい」

枕の上の顔がささやいている。手をのばし、二人目の自分のパジャマのすそを引っばるのだ。手を払い、膝をのばして立ち上がった。ふすまを開ける。三日後のプログラムに囚われた二人目の手である。三日後どこるか、とりあえずこなさなければならないのは三十五分間の朝のプログラムだった。

「おはよう」

妻に言いながら、後ろ手でふすまを開めた。プログラムの邪魔をする寢床の中の一人目は、閉じ込めてしまわなければならない。

寢室に面したベランダの日の光がさえぎられ、今は蛍光灯の光だけになった。

「暗いわ」と、妻は台所で背中を向けたまま言った。三本の蛍光管の内、光っているのは二本だけだ。

蛍光灯の紐をカチャカチャ引くと、三本全部の光がきた。

「節約してたのに」と妻は言うが、ふすまも開けず、紐にも手をかけない彼女である。それは、妻の朝のプログラムには入っていない。トイレに入り、便器のふたを持ち上げた。一日のはじ

まりを鼓舞するように小便が便器の水を激しく打つ。硬い陰茎がしばんでいった。一日のはじまりは、そんなふうに物悲しい。

電話台のかたわらの椅子の上にパジャマを脱ぎ捨てる。下に隠れるのは、昨夜脱ぎ捨てたズボンとシャツ、背広に靴下である。パジャマの下から一つずつ引き抜いて仕度をはじめ。

「靴下とシャツ、取り替えて」と、妻は食パンにジャムを塗りながら言った。

「これでいいよ」

「たまにネクタイぐらいしてつたらいいのに」

「今日は体育朝会だから、この方がいいんだ。上着を脱ぐだけで格好つくだろう」

襟の汚れたチェックのシャツのボタンをはめ、ズボンのベルトを締める。汚れでこわばった靴下の底は、天地の見分けがすぐについてはきやすい。いくら何でも、背広は顔を洗ってからだ。

ドアの裏側の新聞受けから朝刊を取り出す。ソファーに座り、膝の向こうの食卓からジャムの塗られた食パンを取った。

食パン一切れをのせていた皿には、栄養剤が三粒残っている。色と大きさの違う粒だ。コップには牛乳。殻から外れた卵を入れて小鉢が一つ——これが二十数年、一品も変わらずに繰り返されてきた朝食のすべてなのだ。妻の手抜きが悪いではない。夫の胃袋に合わせると、これより他に方法はなかった。世の仕組みに合わせてしまった夫のストレスは、とつくの昔に胃袋にきている。食卓の隅におかれた薬袋の中味は、就寝前に飲む胃潰瘍の薬だった。

左の手で食パンを持ち、右の手で新聞をめくる。拾い読むのは見出しだけだ。老眼の進んだ目

に、かけている近眼境は役にたたない。役にたっても、見出し以外に目を通す時間のゆとりなどありはしなかった。

テレビが鳴り続けている。画像の隅の白い数字は「…」になっていた。栄養剤を牛乳で流し込み食事が終わる。予定通りだ。**プログラムは後十八分で消化である。**

灰皿のまわりに目をやる。マイルドセブンの袋はなかった。食卓の下に押し込んだ鞆のチャックを開けてみると、手つかずの袋が一つ入っていた。封を切り、口にくわえた一本に、百円ライターの炎を近づける。

ゆっくりと吸い、ゆっくりと吐く。無念無想。煙は深山の霧となり、火は遠い漁火となる——そうあって欲しいのだが、時間に追われる人間には、その吸い方がどうしてもできない。吸っては吐き、吐いては吸い、ただガツガツと飲み続ける。

灰皿に煙草をこすりつける手が乱れ、食卓の上に火が散った。気にも留めず、ズボンのポケットから取り出したのはティッシュの袋だ。昨日の夕方、駅の外でもらったものである。サラ金の広告入りの袋だが、今のところ世話にならずに生きている。

¥16743813

二年前、これだけの金が自分の預金に入ってしまった。二十五年働き続けた北海道では家一軒が楽に建つ。だが、この東京では、家を持つには一桁足りない額なのだ。仕方がないから月に¥160000の家賃を払い、3LDKのマンションに住んでいる。

小学校のセンセイを五十三歳で辞めてしまった男の退職金は場所を変えると値打ちも変わって

しまうが、それでもここはこの世である。金はあるに越したことはなかった。癪なことだが、預金通帳は心の支えなのだ。

小学校のセンセイをまたやってしまったのも癪の一つだ。テレビ映画のエキストラを三日やり、大井競馬場のガードマンを一日やり、新聞屋の事務を六カ月やった果てである。郷愁にかられて応募した産休代替教員の名簿登録がすんだその翌日に、今の学校から電話があった。一年勤め、産休のセンセイが出てくるころ、同じ学校の違うセンセイが産休に入り、二年目の勤めになったのだ……

涙をかみ、屑籠にほうり込む。鼻汁程度を抜いただけで体は軽くなってくれない。重い体で洗面所に向かい、歯を磨いた。

入れ歯をしている妻ほどではないが、歯のほとんどに神経はない。金属がつめ込まれたり、模造の歯をくつつけたり of 年齢相応の口の中だ。この間、北海道では六つの小学校に勤め、そのたびに引越しをし、医者を代えなければならなかった。六人の歯医者 of 苦心の合作で今の歯は出来上がったのだ。

七人目は、東京の歯医者だった。新聞屋で働いていたころ、その近くのビルにあった歯医者を利用したのだ。口を開けるなり、「ワー、ひどい歯だなア。どこで治療したんですか？」と言われ

てしまう。

「北海道です」

「ウーン、北海道方式かア。このやり方はひどい。泥縄ですよ」

北海道を飛び出してきた人間なのに、その時ばかりは、北海道をなじる男が憎らしくてならなかった。

大東京の歯医者センセイは、その日、歯もいじらずに、ドイツ製の歯ブラシのケースの封を切って言った。

「今日は、ブラッシングの勉強をします」

まずは歯ブラシで磨かされる。次に錠剤を噛み砕き、口の中に舌で広げる。うがいをして手鏡に映すと歯は真っ赤に染まっていた。染まるのは歯垢がついているからで磨き方が不十分なのだという。懇々と説諭され、使った歯ブラシを千円払って買わされたのだ。そういう押し売りは北海道方式にはなかった。

予防医学か。百まで生きて、硬く真っ白な自分の歯でバリバリ何を噛むというのだ。噛まなければならぬのは、押し売り、押しつけのこの世の中ではないだろうか……

千円の歯ブラシを水ですすぎ、コップに立てる。歯医者が満足するような磨き方など、やれる時間は元々ない。

洗面台にタオルをほうり込み、今度は顔を拭く番だ。洗うのではない。拭き面である。時間のためというよりも、これは少年時代の育ちが作った習癖なのだ。

浅い水にタオルをひたして軽くしぼる。きつくしぼるほどの水は含んでいない。渇水期ならば水道局の表彰ものだ。

拭いた顔を電気力ミソリでこすり、櫛を数回髪に入れると、洗面所に出る。再びトイレだ。今

度は尻をむき出して便器に座る。肛門につたわるウンコの力は細く、すぐにとぎれて終わってしまった。まだ体内に残るウンコの重みが肛門の内側をなでている。カんでみたが応えはなかった。

尻を拭き、思いきりよく立ち上がる。水の中に沈むウンコは小指ほどの太さだった。けばだちを見せ、至るところでくびれている。辛うじて一本につながるそのウンコは、今にもバラバラに崩れそうだった。

ハンドルを動かすと、水は渦巻き、ウンコを飲んで落ちていく。例えそれが、太く、艶やかなウンコであっても、所詮は砕かれ、処理をされてしまうのだ。ウンコの姿そのまま、化石を残すことはもうできない。

ウンコ石と出会ったのは五年前、娘が専門学校に入るために上京し、息子が中学二年になった春だった。胃潰瘍の注射をしてもらうために毎日学校を早引きし、バスに乗って町に出かけていた時だ。勤める学校は変わったばかりだった。そのための気苦労ばかりか、息子が登校拒否をするという出来事も重なり、慢性の胃潰瘍を悪化させてしまったのだ。だが、その日の気分は爽快だった。息子の問題は二日前に解決したのだ。

病院を出ると、軽い足取りで本屋に寄る。立ち読みの本を選ぼうと、まずは雑誌のコーナーに立った。

真っ先に目についたのは『再現！ 古代人の智慧と生活』という文字だった。真っ先だったのは田舎町の本屋のせいである。本の数が少なかった。二カ月間、病院の帰り、バスの時間を待つために寄り続けた人間には、どこに何があるのか頭の中に入っている。頭の棚とは違っている新

しい本はすぐに目につくはずだった。

はじめのページを開くとカラー写真がのっていた。牛の面のような形をしているが、それは膝の塗りが残っている櫛だった。

ページをめくるとカラー写真は続き、土の中から掘り出された日常がどんどん現われてくる。

狩猟の弓、石斧の柄、土の器、木の皿、丸木舟――

『化石』という文字と一緒に写真もあった。体を縦に貫いて産み落される人間の分身、ウンコの形と色そのものだ。矢尻のように尖ったもの、眠りのように円やかなもの、祈りのように屈折したものなど、たくさん化石が並んでいる。説明の文字は白抜きで小さく、読みにくかった。

眼鏡を額に押し上げ、目を文字に近づける。『糞の化石（鳥浜貝塚）。縄文人の食生活や周囲の環境が再現できる貴重な出土品』

眼鏡を鼻に戻しウンコ石を見直すと、はじめて眼鏡をかけた日のようにあざやかだった。裏表紙の値段を確かめると千円である。その十倍の値段でも、おそらく買っていただろう。雑誌をつかみ、まっすぐにレジへ向かった。

ドアを押して外へ出ると、一方通行の自動車が目の前を走っていく。だが、どうしたことだろう。耳には一つの音もなく、あたりはひっそりと静まり返っているのだ。子どもたちの自転車が通り抜け、買い物袋を下げた人たちのサンダルがすれ違い、スーパリーの店先では掌でメガホンを作っている店員がいるのに、すべての音は遠のき、人や車や建物も音と一緒に小さくなっていった。

心がふくらみ、体がふくらみ、ふくらみの中でウンコ石が輝くのだ。時間の境も、空間の境もな

い。境に苦しめられたこの二カ月が嘘のようだった。N町とS町という二つの町の境のために、息子の問題はもつれたのだ。

N町の小学校には六年勤めた。六年勤めた者は転勤をしなければならないというきまりのために隣のS町の小学校に転勤させられたのだが、それは息子の転校を意味するものでもあった。教員住宅は、それぞれの町の所有である。S町のセンセイになったということは、N町の教員住宅を出なければならぬということなのだ。便利な所に自分の家を建て、自家用車で通勤するセンセイもいたが、そういう時代の流れにのっってしまう変わり身の早さは持ち合わせていなかった。

転校した息子の登校拒否は、始業式の次の日から始まった。下痢という形だった。くる日もくる日も下痢が続き、嘔吐も加わった。バスで通わせるから元の中学校に戻してもらいたいと、妻は転校先の校長に掛け合いにいった。

「奥さん、それは息子さんのわがままというもんではないでしょうか。わがままですよ。そういうわがままを許しては、息子さんの将来のためにならないと思いますよ。御主人も見識のある先生でしょう？ もう一度よく息子さんに言い聞かせてやってください。そうすべきですよ。甘やかしてはなりません」

校長は腕を組みながら妻に言った。

元の中学の校長、そして二つの町教育長と、妻は足を運び続け、ようやく区域外就学の許可をもらったのだ。息子は二カ月ぶりにN中学へ通いはじめている。

本屋を出た足は、いつの間にか国道の二つの町の境に向かって歩きはじめていた。

バスの停留所に立ち止まり、N町いきの時刻表を眺めてみる。時間はまだまだ先だった。一日にたった十三本のバスである。勤め先からそこまで出てくるには、もつと少ない十一本のバスだった。そのバスを乗り継ぎ、息子は二年間も通い続けてくれるのだろうか。そんなことを思うと、道のまわりから家々がのしかかってくるのだ。

バスをあきらめ、歩き続けた。停留所が三つ過ぎる。家並みが切れ、海が左手に現われてきた。右手前方は丘になって盛り上がる。

白い標識が見えてきた。標識の青い文字が大きくなってくる。『N町』という町名が読みとれた。標識の足元には小川があり、小川は暗渠となつて道の下を横切っていた。境はこれなのだ。

車が風を残して通り過ぎていく。風を避けて草むらに体を入れた。フキの匂いが鼻に染みる。暗渠の入り口へ向かつて足を下げながら、ヨモギをつかんで体を支えた。ヨモギの汁が掌を染める。

砂浜へ飛び下り、暗渠の中をのぞいてみる。汚れたコンクリートを支えて、鉄骨が錆びた姿をむき出していた。水の流れはひどく細い。

流れのまわりの石を踏みながら、暗渠の中へもぐり込んだ。車の音が体を潰すように響く。耳をふさいで通り抜け、丘の下に体が出た。

丘は二つに分かれている。二つに割つて丘の間を流れる小川には、コンクリートの水門が架けられていた。ここ数年、大雨のたびに何度も崩れ、国道をふさいでしまう丘である。『治山激甚対

策特別緊急事業』という文字が水門にはめ込まれたプレートに記されていた。崩れてくる丘が境を埋めないように、コンクリートの水門は両手を突っ張って支えているのだ。

丘は緑の芝草でおおわれている。潮風になびき、芝草はやわらかに音楽を奏でていた。

登りはじめた足が滑り、あわてて両手で芝草をつかむ。つかんだ芝草の間から見えるものがあった。太い金網である。足を滑らせたものは、その金網だったのだ。

丘の斜面に這いつくばり、四方の芝草をつかんでみる。どこをつかんでも、下から現われてくるのは金網だった。金網が丘一面を押さえ込み、水門と同じように境を守っているのである。そのトリックを緑の芝草で隠しながら……

ウンコの重みが相変わらず肛門の内側にたまっている。もう一度、便器に座ってみた。ウンコの動きはない。あきらめて立ち上がり、出した尻を隠そうとした。

ゴキッ！

痛みが走り、自分が一人、また外れていった。

便器に座り続けているのは、寝床に一人目を外してきた二人目の自分である。ウンコをあきらめて立ち上がった三人目の腰に、後ろから手をまわして離さないのだ。

まわした手を払うように両ひじを張る。ズボン、ステテコ、ブリーフの三つを一気に引き上げた。あおりを食らってひっくり返る二人目を置き放して、トイレのドアを肩で閉める。

ズボンの腰を押さえ、居間に戻った。チャックを上げ、ベルトを締め直し、背広を着ると、出勤前のプログラムは終わりである。

テレビの数字は「…」だ。ぴったりの時間である。鞆を持って、出がけの挨拶をつぶやいた。「アア、朝から疲れてるよ」

「いつてらっしゃい」

レンジであたためた昨夜の飯を弁当箱につめながら、妻は笑った。妻の弁当だ。夫には給食がある。一時間後に妻はその弁当と共に会社に出かけ、その三十分後には娘が起きてくるのだ。減食中の娘は朝食もとらず、昼食のおにぎり一つをバッグに入れて会社に出かける。レンジで化けた飯に妻はもうおにぎりの形を与え、サランラップにくるんだ姿で置いてある。

息子が起きてくるのは、昼過ぎのはずだ。定時制高校に出かける夕方まで、家の中で一人で時をつぶしている。

玄関のスイッチをつけた。脱ぎ捨てた靴やサンダルが狭い面積を占めている。足の裏で引きずり寄せ、爪先を突っ込んだ。靴の後ろを指で引っ張り、足にはめ込む。

スイッチを消し、分厚い鉄のドアを押した。

ゴキッ！

ドアに背をつけ立ちはだかっているのは、トイレに二人目を外してきた三人目の自分である。体をあずけて彼を押すのは、外れたばかりの四人目だった。

外に向かってドアが開き、三人目が尻餅をつく。鞆を奪い取ろうとする手が下からのびてきた。勢いよくドアを閉めると、潰れた指の音が背後でした。

足の下には土の色が続いている。色だけ真似たりノリウムの廊下である。蛍光灯の光を受けて、

廊下は水を打ったように輝いていた。

エレベーターの扉のかたわらの数字に目をやる。ランプをつけて動かないのは一番上の数字、11だった。下から二番目の場所から、わざわざ呼んではいられない。

階段を下りる。ガラスのドアの外には森があった。丘の上だ。鳥がさえずり、木々の間からは川の流れが細く光る。はるか昔の風景である。森はビル。鳥のさえずりに代わるものは、けたたましい車の響きだった。坂の下への見通しはなく、川はコンクリートに閉じ込められ下水道になっているのだ。尾根づたいの春日通りを気ぜわしく歩いているのは、出勤途上の東京人だ。

テンポの遅れた足がある。皮靴の先が後ろからぶつかり、つんのめった足は、めずらしいことに下駄をはいていた。

脱げた下駄が宙に飛び、膝と手を突き体が倒れる。目もくれず、靴底が音をたてて通り過ぎた。着流しの着物の汚れを手が払う。血の色はなく、ドーランを総身に塗った舞踏のように不気味な白色を見せていた。そびえた顔も白く浮き、頭には、何とチョン髷がのっている。

白い顔は、一つではなかった。顔の上の頭髮は、丸髷もあれば、ザンバラ髪もある。藁草履をばくばく白い足もあれば、はだしのままの白い足も歩いている。獣の皮をまとった白い体、長いともからのぞく白い手——あらゆる時代の亡者たちが、舞踏のようにゆれているのだ。

歩道をのさばる東京人にぶつけられ、一人の亡者がまた倒れる。この世とあの世は重なっているのに、二つの動きは合わないのだ。

合わせて歩く。亡者をいたわり、ゆっくりと歩く。森の緑がよみがえり、赤子のようにはだか

になりたい。

靴を捨て、靴を脱ぐ。何もかも脱ぎ捨てて、草の上を転げまわる。転げまわってしゃがんでみる。しゃがんだ尻を草がくすぐり、尻が力んで草に応える。生きる匂いをたち込めながら、尻の下でウンコが渦を巻く。

緑が点滅した。森の緑ではない。信号の緑だ。この世のしきたりに目をしばたたき、足が動きを速めようとする。

ゴキッ！

玄関に三人目を外してきた四人目の自分の手が、外れたばかりの五人目の足首にしがみつく。後ろに足を蹴り上げてやった。靴底が鼻を打ち、手が離れる。倒れた自分を背中で見捨てて、横断歩道を渡りきった。

坂を下っていくと、いつもの場所で、いつもの出会いがある。右の肩を疲れたように下げて歩く白髪の男とすれ違うのは、平成湯の前だ。ついこの間まで昭和湯というのれんを下げていた銭湯は、しばらくの休業の後、平成湯と名を変え、広告塔を店の前におっ立てた。遠赤外線サウナ、ジェットバス、天然岩風呂、マイクロバイブラ、電気風呂——文字を並べたてた広告塔の下を、男は相変わらずの肩で通り過ぎる。

胸を張り、靴音を響かせ、脂ぎった額を見せて別な男がすれ違うのは、このごろ建ったオフィスビルの前である。首一つ高い男の威圧にねたましい横目を送ると、坂の下の大塚駅は近い。

人の姿が増え、いつもの夫婦の背中が見えた。妻の右の足首は内側に曲がり、右手の杖が足首

を助けながらゆつくりと動く。妻に合わせて並んでいく夫との間に、せせらぎのような会話が今日も聞こえた。せせらぎには目もくれず、人は二人を追い越していく。

駅前広場が目には広がる。都電の窓が朝の光を反射しながら横切っていた。その向こうの高架線の電車の窓がこだまのように光をはじく。ビルの窓も光のこだまだ。路上に落ちるビルの長い影の重なりは、幾重にも陰影を作りながら、降り注ぐ光を際立たせていく。光の中の人の影は、魚影のようにあざやかに路上を泳いでいた。

思わず足を止め、あたりを見まわす。雲一つない空だった。空につながるビルの間から、のけるほどの力を込めて太陽が目をつ。太陽は、差別をしない。どんな土地の、どんなものにも、分けへだてなく光を注いでくれる。

それがどうした。あの日の、あの太陽は何だったのだ――

数ヵ月前の冬の休日、たしから慥柄將監^{＊將}の墓をたずねた。『東京都の歴史散歩』という本を拾い読みして、たまたま知った墓の存在である。

慥柄將監^{＊將}は江戸幕府の船頭を務めた人間であり、伊勢の慥柄という村に祖先が関わっていた。自分と同じ姓の歴史上の人物がいたことを知ったのは、十年ほど前、自分の家系を調べはじめてからのことであつたが、自分の姓と同じ土地があることを知っていたのは子どもころからである。

母が死んだ翌年、一緒に住んでいた叔父の一人も母と同じ結核で死に、その二年後には祖父が胃から血を吐いて死んだ。そして同じ年に、もう一人の叔父が、これも結核で死んでしまい、祖

母と二人きりになってしまふ。仏壇の引き出しにしまわれていた家系図は、慥柄家の歴史をテテナシゴに教えてくれたのだ。

家系図は、慥柄喜兵衛からはじまる。『生国勢州慥柄 朋連院生譽乗蓮居士 寛延三庚午年八月二十七日 行年七十二才 墓提菩提所浄土宗大畑宝国寺二葬ル』という文字が記されているが、大畑というのは、下北半島の大畑町のことだ。その長男は喜兵衛の名を継ぎ、二代目喜兵衛の跡を継ぐのは、その孫の池田伝蔵である。二代目喜兵衛の娘、サンが、池田新三郎という男との間に産んだ子どもだった。サンには五人の兄弟がいたが、長兄は出家をし、他の四人は早逝をしてしまったのだ。

慥柄家の養子になった伝蔵の長男は伝蔵の名を継ぐが、ここでやってきたのが明治維新である。木材の積み出しでにぎわっていた下北半島の森林のほとんどは、明治新政府の創る大日本帝国国有林となり、自由な伐採ができなくなってしまうのだ。宝国寺の檀家の一人であった笹沢魯羊の『大畑町史』には『北海道へ移住する者があり、離村者続出して耕地は荒廃し、方々に空家が出たが購う者がなく腐朽するに任して、毀ちて薪に焚いた時代である』と、そのころのことが書かれてある。二人目の伝蔵も、こうして北海道へ移住するのである。

長男の泰蔵は、北海道へはいかなかった。いったのは、新帝都東京である。独学で数学を学んでいた泰蔵は、中村敬宇の同人社のセンセイとなるのだ。明治のベストセラー『西国立志編』の訳者が開いた塾である。

立志、立志で都を目指した泰蔵が東京にいた時間は短かった。官学出身という箔もない泰蔵で

ある。京都、鳥取、鹿児島、栃木と中学校の職員室を渡り歩き、最後の土地、栃木で天寿を全うしてしまうのである。

泰蔵には、妻はいたが、子どもはいなかった。養子になったのは、妹のキチの息子、永太郎である。十一歳の永太郎は網走の祖父母、伝蔵夫妻から離れて、鹿児島造士館中学のセンセイをしていた泰蔵のもとに引き取られたのだ。

永太郎が母のキチと暮らした期間は短い。新政府に追われて下北に移住した会津藩士とのあやまちで産んだ永太郎を預けて、キチは他家に嫁いってしまったからだ。

造士館中学を卒業した永太郎は、養父泰蔵の立志の夢を引き継いで東京に出る。あこがれの官学、第一高等学校に入学したのだ。

一年たち、泰蔵は病のために造士館を退職した。網走の漁業店の支配人をしていた泰蔵の弟は代わって学費を出そうとするが、その申し出を断わって永太郎は北海道へ舞い戻ってしまう。文学に取りつかれはじめたころだ。根室、函館、札幌と居を変えて働くうちに、夫となり、父となった永太郎だが、立志の夢は滅びなかった。上京し、退職金で二つの詩集を出版。反響はなく、残りの人生はただの燃え滓となってしまうた。

その長男は三比古。結核のため、姉を追って死んだ一人である。三比古に代わって慥柄家の当主に納まっているのが、姉の産んだテテナシゴというわけである。万世一系という言葉があるが、そんなにうまくいくものかどうか。わずか八代の歴史の中に、他家のタネが三人もまじっているのだ。

家系図のはじめの男、喜兵衛の父母と祖父母を記した紙もある。

『運誉見心信士 俗名慥柄治左衛門 江戸ノ産 元禄十三辰七月二十二日卒』と書かれているのは、喜兵衛の父である。

祖父のことは、こうである。

『伝誉法山信士 俗名慥柄六右衛門 万治二亥四月十八日 勢州慥柄浦ノ産 江戸ニテ卒』
立志の帆をはためかせ、田舎を捨てた人間が、ここにも一人いたわけだ。

同じ慥柄浦に祖先を持つ船出頭が開基したという寺は、隅田川の下流近くにあった。コンクリートの本堂を、コンクリートの塀が囲み、墓地は表から見る事ができない。

白い陶板の表札が塀の表に光っていた。『慥柄』という文字である。賃貸マンションのドアのかたわらに差し込んだマジック書きの『慥柄』とは、品性の違う文字だった。

思いきって門から入る。足の動きは忍び足だ。忍び足にさせてしまうコンクリートの警護である。

本堂に庫裏がつながり、二つの間に、地下へ掘り下げた通路がある。通路もまたトンネルのようにコンクリートで固められていた。

忍び足に、早足が加わる。二度曲がると、突き当たりにたくさんの手桶が見えた。右手から日の光がなだれ込み、墓石のつらなりが呼んでいる。階段をはね上がり、墓地を見まわした。

トンネルの中から、追手のような足音がする。下駄の音だ。墨染めの衣をまとった坊さんの顔が、眉間に皺を寄せている。

「何か？」と、坊さんの言葉はひどい節約だ。

「あつ、アノー、こちらに槌柄将監のお墓があるっていうんで、きてみたんです」と答えながら、手はコートのポケットを探っていた。歴史散歩の小さな本を、そこに突っ込んできたのである。刑事には、証拠の品を見せなければならない。「この本に書いてあったんです」と、歴史散歩をつかんで示した。

「そこ、そこ」と、坊さんは墓地の隅を指で教えた。蠅を払うような手の動きである。

目をやると、背の高い石が建っている。刻んだ文字は磨り減り、読みとれる距離ではなかった。下駄の音が遠ざかっていく。何か？　そこ、そこ。何か？　そこ、そこ——坊さんの投げつけた言葉が頭の中を打ち続け、墓石に近づくことを拒んでいた。

墓地の土を強く踏み、コンクリートの通路に飛び込む。靴の底を叩きつけ、大きなまたで引き返した。坊さんの背中が近づく。振り返った坊さんをにらみつけ、門を出ると、そのままの勢いで歩き続けた。

何か？　そこ、そこ。何か？　そこ、そこ——足の運びは、言葉にピッタリだ。東京人の忙しい動きである。

小さな公園があった。ベンチに座り、煙草を吸って自分をなだめる。足元の土の上から、小さな光が反射していた。見まわすと、あたり一面に、宝石をばらまいたように光が散らばっていた。ベンチから尻を離し、目を近づけた。ガラスの破片である。地面をまぶしたガラスの破片は、傍若無人に日の光をむさぼっているのだ。

休日だというのに、ブランコはたれ下がり、人はいない。たとえ遊びにきたとしても、はだしで遊ぶことを知らない子どもたちにとって、ガラスの破片など気にするものではないのかもしれない。塾へ追いやる親にとつて、無用の公園のガラスなど放っておいていいものだろう。

この世を乗っ取り、誇らしげに光を放つガラスたち——ほしいままに光を与える太陽は、バカだ。アホーだ。

ゴキッ！

駅前広場に立ち止まり、うつとりと朝の光を眺める五人目の自分から、外れていくのは六人目だ。置き去りにされた五人目は、神の啓示に出会ったかのように動かない。立ち止まった時間の遅れを取り戻そうと、六人目は走り出す。

亡者たちの白い顔が、ここでもゆれていた。走り出した右腕が亡者の一人を押し飛ばし、右の腕がもう一人を突き飛ばす。亡者の毛髪一本も目に入らぬ東京人の一人になっていた。

改札口を出入りする人の流れは工場のようなだ。

隅田川のほとりにあるビール工場に、クラスの子どもたちを連れていったのは昨年だった。ベルトコンベヤーで運ばれてくる瓶は、無抵抗に直立していた。一本一本の瓶の中味をじつと座って検査する人間がいる。大きなマスクで顔がおおわれ、光っているのは目だけだった。瓶を追って、白目の中を、右に黒目が走っていく。素早く左に黒目を戻し、右に向かってまた追いかける。ひたすらそれを繰り返す目の動きは、体からも心からも分離したモノの動きのようだった。

改札口の駅員も、ひたすら黒目を動かしている。客の列は瓶の流れだ。

「おはようございます」と、瓶に向かって、一本調子は駅員の言葉が繰り返される。瓶は言葉を持たず、駅員はただのコンピュータである。

人間は、いないのか？

人間は、いる。

階段を昇る女の尻が目の前でゆれていた。白いブラウスの背中で、長い髪もゆれている。ゆれと一緒に降り注いでくる香水の匂いが鼻を引き寄せた。

ホームに立つ女の後ろを通り過ぎる。一メートルほどの距離をとり、女の横顔に目をやった。艶やかな頬は、朝の草花の露である。口紅が彩る二つの花びらは、今にもこぼれ落ちそうなるふくらみを見せていた。

電車が止まり、女が乗る。引きつけられ、女に続くと、ドアが閉まった。いつもの車輛のドアではない。いつもは一輛目の最後のドアから乗り込んでいるのだ。反対側のドアの近くに体を移すと、そのドアは、乗り換え駅の日暮里の階段の前で開く仕掛けになっている。

仕掛けに逆らう。逆らわせる女のスカートにズボンがふれ、ズボンの下のももがふるえる。ふるえは全身につたわり、体は一本の弦だった。

しびれるような音の弾き手に、そっと手をやる。スカートの下のやわらかな肉のぬくもりが指につたわり、指は五弦の楽器になる。

こらえきれない五弦のふるえがスカートをつかんだ。つかんで、はぎ取る。肉をおおう、この世のすべてをはぎ取って、肉の足元に叩きつける。

日暮里駅のホームが窓の外に現われてきた。窓の外にはおかまいなく、裸にむかれた女の乳房を背後からつかむ。肉もこの世、骨もこの世。この世のすべてをはぎ取ろうとする六人目の内部で、肩をゆさぶる七人目がいた。

ゴキッ！

ゆさぶって二つに外れ、ドアの外に一つはこぼれた。

ひしめきを縫い階段の下にたどりつくと、人は更に滝のように落ちてくる。ベッドタウンからやってくる上りの電車を乗り換えて、都心に向かう人たちだ。

下りの電車に乗り換える少数の人間は、滝に逆らい、鯉のように昇っていく。鯉とは思えず雑魚となる一匹の自分は、肩をすばませ、階段の隅をいくのだ。

跨線橋も半分を過ぎると、人はまばらになってくる。常盤線*警のホームに下りる階段は、しばしの休止符を打っていた。のんびりとしてはいられない。三分間隔の上り電車は、階段へ向かってすぐに人を吐き出してしまうのだ。

間隙を縫って階段を駆け下りると、銀色に車体を塗った下りの電車がホームに入ってきた。銀色は南千住では止まってくれない。止まるのは緑色なのだ。

待ち時間を過ごすためにホームを進む。禁煙時間のホーム上に、煙草を吸える秘密の場所が残っているのだ。秘密の場所にふさわしく、頭の上には斜めにかぶさった階段があり、跨線橋の底がある。灰皿はないが、ベンチがあつた。

ベンチに座った三人が煙草を飲んでいる。一人ではないということが心強かった。見慣れた顔

の男が吸殻を踏み潰し、階段へ向かつて歩きはじめる。しばしの解放区からの出撃なのだ。

男の背中に親しげに視線を送りながら火をつける。煙の匂いが鼻を刺激し、吸口をはさんだ唇がすぼむ。煙を受けた喉の縮みと広がりはマグマのような動きとなり、体は噴煙の活火山だ。一吸いごとに、どうやら働く意欲が戻ってくる。

緑色が目の前に着いた。まだ三分の二も残っている煙草の長さは、いつもと同じである。

立ち上がって踏み潰す。煙草を惜しむ自分はいない。いつもの若い女の後ろ姿が開いたドアから入っていくのだ。

連れの男といつも乗り込み、楽しそうに会話をはずませる彼女だった。軽やかな唇の動きが今日も心を和ませ、鼻にずり落ちる銀縁の眼鏡がのどかな気分を与えてくれるだろう。

車内はいつものようにガラ空きだった。いつものように女の前に席を取る。連れの男はなぜかいなかった。女の唇も、銀縁の鼻眼鏡も、うなだれた首のために見えないが、広いおでこがかわいらしくこちらを向く。

ゴキッ！

立ち上がって女に近づくのは、七人目の自分である。目をそむける八人目を尻目にして女の肩を抱く。おでこに唇を軽くふれた。女の首が上がり、マニキュアの指が下がった眼鏡を戻す。眼鏡の中の目がおびえていた。

「あなた、独りぼっちだから、心配してるんですよ。どうして、今日は一人なんです？ いつも、彼氏とお話してるでしょう。そうするとね、ぼくの方も楽しくなってくるんですよ。ねえ、一人

なら、今日はぼくとお話してくれませんか？」

女の目が見る見るうるんでくる。

「ごめんなさい。いやならいいんです。お話はいいから、せめて、こうしてあなたの隣に座らせていてください。座っているだけでいいんです」

眼鏡をおでこに押し上げて、女は二つの手で顔をおおった。

「ごめんなさい。泣かないでください。ぼく、あちの車輦に移りますから」

「あなたの……せいじゃ……ないんです。……あの人が……悪いんです」と、女はとぎれとぎれに言葉を言う。

「あの人がどうしたんですか？」

「結婚しようって……言ったくせに……わたしを……裏切ったんです……ア、アーン、わたし、どうしよう！」

女の体がぶつかってくる。胸の中で泣き叫ぶ女の髪を静になでた。

七人目の手の動きが、チラチラと目をくれる八人目の心の中に遠い思い出を運んでくる。なでてくれるのは妻だった。結婚前のことである。

弘前大学の野辺地分校でセンセイになる勉強をしていた彼女と知り合ったのは、青森市の郊外にあった結核療養所のことだった。病状の軽かった彼女は先に退院をしたが、復学して間もない彼女を野辺地の下宿にたずねていったのだ。療養所を抜け出しての小さな旅である。

二人は公園のある丘へ登った。下北半島の山並みが正面に見える。その下北では、祖母が病院

の付添婦をやりながら一人で暮らしていた。もう八十歳に近かった。

山並みからは海が続き、海から目の下へ野辺地の町が広がっていた。丘の上の公園に吹いてくる海の風は、かすかに髪をゆらすほどだが、間近な雪を告げるように肌に冷たい。

足音の重なりがした。振り返ると、クリーム色のトレパンと、同じ色のシャツをまとった一団が坂を駆け上がってくる。首に巻いた青いタオルが初冬の光を反射していた。

前後左右に足は跳び、軽くにぎった二つの拳は素早いパンチを宙に繰り出す。空気を切るさわやかな音を残して、学生たちは基の方角へ下りていった。

背筋を伸ばし、草の上に立ち上がってみる。首をもたげる弱い心を打ちのめすようにフットワークを真似てみた。フックを打ち、ストレートを打ってみる。

軽いめまいがした。ノックダウンを真似て倒れる。

「大丈夫？」と、彼女の顔がのぞいた。

「駄目だなア、手術しないうちは」

「そうだよ。手術して、早く退院しな」

「退院したら、何すればいいんだべ」

「わたしの秘書をやって」

「秘書？」

「わたし、算盤ができないから、学級費なんか計算するのに困るんだア。だからさ、わたしの秘書になってくれない？」

笑いで頬が崩れてしまう。崩れた頬はたちまち引きつり、言葉を返すことができなかった。笑わせたのは天真爛漫な彼女の言葉であり、引きつらせたのは明日への心の重さである。

「秘書がいやなら、先生になっちゃえばいい」と、彼女の声はやはり明るい。

「なるっていったって、そう簡単になれないべ？」

「通信教育でも免許取れるんだって」

「通信教育？」

「うん、家にいて、レポートを書いて送ってやってね、単位取る試験なんかは、青森だとか、弘前だとかでやるんだって。後は、夏休みにスクーリングというものがあつてね、その時だけ、東京の大学で勉強するんだって」

「へえ、そういうものがあるのかい」

「ねえ、先生になんな。そしたら、わたしたち、おんなじ仕事だもの、いろんなことで助け合えるし、人間相手の仕事ってやりがいがあるよ」

「人間を相手か」

「そうだよ、人間が相手」

「何だか、その気になってきたぞ。先生になって遠くに行こうか」

「遠く？」

「新しい生活なんだもの、新しい場所ではじめたいよ」

「ねえ、北海道にいかない？」

「北海道かア」

「広々としたイメージがあつて、素的*ママでない？」と、彼女の笑顔は思わずうなずかせる。

「うん、いい、いい」

「決めた。わたし、先に北海道へいつて先生をやつてゐるから、必ずおいでよ」

「握手」と、彼女に向かつて手を伸べる。彼女の手も伸びた。

「あつ、とんぼ」と、その時、彼女は声を上げ、出した右手を草の上にやった。

黄ばんだ草にとんぼが一匹止まつている。季節遅れのとんぼの羽は難なく彼女の指に挟まれ、目の前に突き出された。

挟まれなかった片方の羽が思いもかけぬ激しさで上下に動く。朽葉のようにボロボロの羽だった。

「見な、こんなになつても生きてるんだから」と、彼女は目を見張つていった。

とんぼを持つ手を高く上げる。羽をつまんで閉じている彼女の指が花のように開いた。指を離れたとんぼの姿は、青い空に溶けながらゆつくり消えていった。

心の中から噴き出すものがある。とんぼを追つて飛ぼうとする夫への噴き出しだった。とんぼに打ちのめされた地への噴き出しでもあった。噴き出しは脳天を貫き、喉をふるわせる。大の字に倒れた体から思いきりの泣き声が溢れ、涙で空がかすれた。

膝を折った彼女の顔がのぞく。濡れた頬が笑つていた。赤ん坊を寝かせつけるように、目の下の男の髪をゆつくりとなで続ける。……

都営住宅のくすんだコンクリートが窓をふさいだ。電車はスピードを落とし、南千住駅に近づいている。

目の前の席でたわむれ続ける七人目を置き放して、八人目は立ち上がった。思い出がたのよ
うに胸を締めつけ、八人目は一つの手桶だ。手桶の水に、妻より他は映らなかった。

ホームの時計は八時五分を指している。いつもの通りだった。いつもの通り階段の右を下り、
通路の右をいく。改札口へ向かう人の群れから外れて、いつもの通りトイレへ入り、小便をした。
いつも、いつもがつながって、いつもと違う丘の思い出はもう消えていた。

小便はすぐに止まり、残尿感を引いて滴がたれる。力みは無理に与えない。力みは肛門にもつ
たわり、残便感をもあおってしまうからだ。

自分を押し込むようにチャックを上げる。手はどこでも洗わない。縦 ∞ cm・横 9.5 cm の
掌である。隣×隣という大ざっぱな計算をしてしまうと、その面積は 771 cm² だ。右と左を合
わせても 342 cm²——たかがそれだけを清めたからといって、この世の汚れに太刀打ちできる
ものではない。

人のとだえた改札口を遅れて出る。一息ついた駅員は、挨拶を忘れ、黙っていた。

目の前には、タクシーに乗る勤め人の列ができている。離れた所で、ワンカップを片手に、仕
事にあぶれた山谷の男たちがしゃがんでいた。手配師に集められたたくさんの男が電車につめ込
まれていったのは、もっと早い時間だった。

道は四方に分かれている。その一つの道から、大道寺将司は、この駅へ向かって歩いてきた。

土砂降りの朝だった。ワンカップを持つ男たちの姿もなく、代わってそこにたむろしていたのは、公安の刑事たちと、情報を嗅ぎつけた一人の新聞記者だった。

傘の下の大道寺が近づく。青い背広の刑事が一人、傘もささずに正面から寄っていった。不吉な予感が大道寺をかすめ、青い背広がすれ違う。後ろにまわった二つの目が背中を刺した。タクシーの流れを狭める駐車の数は、ただならぬものである。要所を固めて立っている刑事たちの緊張は、大道寺のさす傘の骨にもつたわっていた。

傘の握りが強くなる。左手の紙袋は胸に押しつけられていた。紙袋の中には、雷管の作り方を解説した『腹腹時計』の第二号が入っていた。

手薄と見られる左の道へ大道寺は走り出した。常磐線のガードは目の先である。ガードの奥の日比谷線の駅の方から、大道寺へ向かって走ってくる者たちがいた。

挟み打ちだった。前後左右を刑事が取り巻き、脇の下から両腕が取られた。逮捕状が早口に読み上げられる。拒む大道寺の両足が浮き、靴の先が雨の流れる舗道を掻いた。新聞記者がたて続けにシャッターを押す。車が次々に急発進をし、柳の枝がゆれた。

その日、都内では七人のゲリラが逮捕された。近くのアパートで逮捕された妻のあや子と大道寺将司は、北海道の釧路の出身だった。逮捕後、毒を飲んで自死した斉藤和は、北海道の室蘭の出身である。大道寺あや子などと共に、日本赤軍によって海外へ連れ出された佐々木規夫は、北海道の小樽の出身だった。

釧路も、室蘭も、小樽も、その地名はアイヌ語から発している。釧路はクツチャロ、喉という

意味で、釧路川の川口近くの沼の出口の呼び名だったらしい。室蘭はモ・ルエラニで、小さい下り道。小樽はオタ・オル・ナイで、砂浜の中の川という意味のようだ。

自然の姿で呼ばれていたかつてのアイヌの土地は、釧路市となり、室蘭市となり、小樽市となり、アイヌは片隅に追いやられてしまった。その北海道の歴史は、東アジア反日武装戦線に集まり、爆弾を炸裂させ続けた彼等の思想を育んだのだ。

爆弾の時代だった。北海道のセンセイだった一人として、アイヌのことは忘れられない。壊さなければならなかった。教育委員会ではしゃべり、テレビではしゃべり、たくさんの機関誌に原稿を書いた。だが、言葉では壊れなかった。爆弾以外に、壊せるものはないようだった。言葉だけの人間をなじるように、次から次と爆破が続いた。

北海道庁が爆破があった次の日、学校に出勤すると、教頭が寄ってきて心配そうに言ったことがある。

「きのうの夜、警察から電話があつてね、慥柄先生、欠勤しなかったかつて聞くんだア。ちゃんと出てきて、授業しましたって言うといいたから」

苦笑だけを教頭に返した。アイヌのことには、もうすっかり疲れていた。……

大道寺が逃げようとした方角に背を向けて歩いていく。まるで大道寺を見捨てようようだ。

見捨てたのはずっと以前、入学式の日だった。朝、職員室で椅子を出してストープにあたっていると、制服を着た警察官が一人入ってきた。入学式には来賓として招かれ、交通安全についての退屈な話をするのがならわしだった。

「ご苦労さまです」と、挨拶の言葉を儀礼的に投げかけ、椅子をすすめ、茶を入れた。職員室には、たまたま一人しかいなかったからだ。

茶を一口すすると、初対面の警察官はいきなり言った。

「ヤー、いつもアイヌの子どもたちのためにがんばっていただき、先生には感謝しているんですよ」

警察に感謝されるいわれはない。顔がひきつった。警察官は身を乗り出し、声を落とす。

「アイヌモシリを乗っ取る道庁を爆破とか何とか、わけの分からないことを言つて、先生のように真面目にアイヌのことに取り組んでおられる方には、まったく迷惑な話ですよ。一体、どんな人間が、ああいうことをするんでしょうか？」

警察官の後ろの掲示板の情報提供を呼びかけるポスターが大きく目に入ってくる。押し戻すように、声が飛び出した。

「何ですか、あなた！ そんなこと、知るわけないでしょう！ あなた、ぼくを犯人だと思ってるんですか！」

尻が椅子を蹴り、足が床を強く踏んだ。職員室から廊下へ出る。後ろ手で閉めた戸の音と一緒に、心で響く言葉があった。

——犯人だと思ってるんですか！

犯人、と呼んでしまったのだ。犯人、と呼ぶことで境を作ってしまったのだ。あちらは爆破、こちらは緑。金網におおわれたみせかけの緑は、心の内にもあったのだ。……

白い手がゆれている。白い肩には血糊がこわばり、肩の上の首はなかった。首どころか、胴から上を持たない亡者たちが裸足の指で地べたを探り、さ迷つてもいるのだ。斬首の刑にあった上、試し斬りにされてしまった者たちである。小塚原刑場は、コツ通りと呼ばれているこのあたり一帯にあったのだ。ガードの先には山谷がある。

はやりのコンクリートで身を固めた回向院の駐車場の壁には、解体新書の扉を真似た銅板がはめ込まれ、それに並んだ御影石にはこんな文字が刻まれている。

蘭学を生んだ解体の記念に

一七七一年・明和八年三月四日に杉田玄白・前野良沢・中川淳庵等がここへ腑分を見に来た。それまでも解体を見た人はあったが、玄白等はオランダ語の解剖書ターヘル・アナトミアを持って来て、その図を実物とひきくらべ、その正確なおどろいた。

その帰りみち三人は発憤してこの本を日本の医者のために訳そうと決心し、さつそくあくる日からとりかかった。そして苦心のすえ、ついに一七七四年・安永三年八月に「解体新書」五巻をつくりあげた。

これが西洋の学術書の本格的な翻訳のはじめでこれから蘭学がさかんになり、日本の近代文化がめばえるきつかけとなった。

さき一九二二年奨進医学会が観臓記念碑を本堂裏に建てたが、一九四五年二月二十五日、戦災をうけたので、解体新書の絵とびらをかたどった浮彫青銅板だけをここへ移してあらたに建てなおした。

一九五九年 昭和三十四年三月四日

第十五回日本医学会総会の機会に

日本 医 史 学 会

日本 医 学 会

日本 医 師 会

信号は赤だ。足を止める。首なし亡者がまた一人近づいてきた。胸も腹も切り開かれている。胃も腸もスッポリと抜け、骨盤が丸見えだ。肋骨もむき出しだった。その下には心臓も肺もなく、肋骨は空を抱いていた。着衣はなく、しなびたまたの割れ目をおおう陰毛は、白いものをまじえながら言葉のようにゆれている。

「青茶婆ア！」と、思わず呼びかける。

ゴキッ！

八人目が二つに外れ、九人目の自分がたしなめる。

「青茶婆アはないだろう」

一夜の間、灰汁につけて蒸す、下等の茶の青茶である。

「じゃあ、何て言えばいいんだ？」と、たしなめられた八人目の口がとがる。とがった口をまた開いて、今度は目の前の亡者にたずねた。

「ねえ、お婆さんの名前、本当は何て言うの？」

陰毛はゆれ続けるが、陰毛の言葉を聞き取るのは、オランダ語より難しそうだ。

杉田玄白が『蘭学事始』の中で、『其日の刑屍は、五十歳ばかりの老婦にて、大罪を犯せし者のよし、もと京都生れにて、あだ名を青茶婆と呼れしものとぞ』と書いているお婆さん——後世の医者たちが御影石に刻ませた文の中で、『ターヘル・アナトミアを持って来て、その図を実物とひきくらべ、その正確なお婆さんにおどろいた』と、『実物』の二文字でかたづけられているお婆さん——
大道寺は見捨てたのに、二百年前のお婆さんは見捨てられない。こたわる八人目を置き放して、信号の変わった道を渡りはじめる。**善人面でしたしなめたはずの九人目は、お婆さんを見捨てるのか？**

「虎松のお爺さんは、どうしてるんだろう？」

渡りはじめた善人面に、ふさわしい問いが生まれる。

虎松といへるもの此事に功者のよしにて、兼て約し置しよし、此日も其者に力を下さすべしと定めたるに。その日、其者俄に病気のよしにて、其祖父なりという老屠、齢九十歳なりといへる者代りとし出たり。**健なる老者なりき。彼奴は、若きより腑分は度々手にかけて、数人を解たりと語りぬ。**

これも『蘭学事始』だ。玄白も、良沢も、淳庵も、腑分けのために、自分の手は汚していない。手は辞書をめくるためにあり、解体新書の執筆のためにあった。牛馬の皮をはぎ、刑死人の腑を分ける最下層の身分であった虎松の祖父は、どんな気持ちで腑分けにのぞんだのだろう。彼にとって青茶婆は、ただの『実物』だったのだろうか？

ゴキッ！

九人目が二つに外れる。虎松の祖父をたずねてきびすを返す自分を背中に感じながら、十人目の自分は横断歩道を渡りきった。

まだシャッターの開かない酒屋の表には、自動販売機が並んでいる。山谷の男たちは、そこでもワンカップを手にして寄り合っていた。尻を突き、背をかがめ、亡者に空間をゆずるように体を縮めて座っているのだ。

まくり上げた作業ズボンから、すねを出した一人がいる。すねの真ん中に、あせた藍色の入れ墨があった。ハートを矢が貫いている。ハートも矢も、たどたどしい線だった。男の頭から噴き出る髪には、もう白いものがまじっている。

たどたどしく生きてきた山谷の男に、お面を一本取られたのは前の年だった。社会科の勉強で、子どもたちを連れて近くの商店街にいった時のことだ。

商店街の中央にある公園を集場所にして、子どもたちは鉛筆と画用紙を持って散らばっていた。画用紙には、商店街の略図が印刷されている。何を商っている店なのか、一軒一軒を、そこに書き込んでいくのだ。

二百メートルはたっぷりある長い通りだった。十二時十五分から給食がはじまる。それまでには帰らなければならなかった。二時間目の授業が終わってから公園へ歩き、時計は十時五十分を指していた。十二時には公園を出発したい。一時間そこそこの時間で、調査をしなければならぬのだ。

公園の片隅に五人の子どもが残っている。五人で一つのグループを作らせていた。グループご

とに行動するようになると言っていたのだが、通りの東からはじめるのか、西からはじめるのか、意見がまとまらないのだ。

「オイオイ、いい加減にしないと時間がなくなるぞ」と、そばへいつて追いたてようとする。意見はそれでもまとまらない。しびれを切らし、右手を突きだして右にやった。

「あっち、こっち。あっちからはじめな！」

右手を突き出したのは、右利きだったからに過ぎない。それでも子どもたちは、センセイの右手の気迫に突き動かされて歩きはじめた。

ベンチに座ってワンカップを飲んでいた男たちが笑った。笑わない男が一人いる。コップを持ったまま、男は近づいてきた。

「あんた、センセイかい？」と、男の顔がにらみを利かせる。「どこの学校か知らないけど、急がせるのはよくないよ。急がせちゃあ、いいスケッチはできないよ」

後ずさりをして男から離れる。向きを変え、買物客の流れの中にまぎれ込んだ。男はスケッチと間違っていたが、それは些細な間違いである。現場監督に追いたてられ、手抜き工事の騒音の中で、汗をしばり取られた男なのだろう。センセイは明らかに現場監督と同じだった。……

細い通りを折れると、学校は突き当たりだ。亡者はしつこく、ここにもいる。体まるごとの肉を失って、ゆれているのは骨である。骨から骨が外れ、叫びのように飛び散っていく。人の骨格を失って、骨はバラバラに分かれたまま、宙にゆれて訴える。訴えながら、人の姿に戻ろうとして、骨は悶え、骨は再び組み合うのだ。

子どものころ、下北の芝居小屋で、同じようなあやつり人形を見たことがある。軽快なバックミュージックにのせた骨の動きのおかしさを真似て、次の日の自習時間の教室は大騒ぎになったものだ。ブラブラと手足を振り、首を振り、教壇の上で一人が踊りだすと、我も我もと教壇に押しかける。教壇はたちまち埋まり、まるで陣取り合戦のようになった。見た者も、見ない者も一つになり、押し合いへし合い、出任せの音をがなりたてながら乱舞したものだ。

ゝバラバラバラバラ

おかしさ一色の乱舞は、目の前の骨たちにはなかった。おかしくもあれば、恐ろしくもあり、そしてまた悲しくもある無言の骨の動きなのだ。

バックミュージックどころか、車の音一つしない通りである。音の強いる感情や意味づけから遠ざかり、骨は骨そのものとしてゆれながら、外れては寄っていく。劇用語では、それを骨寄せというらしいが、その言葉は、どうもぴつたりと心にこない。寄せられているのではなく、寄っているのだ。いや、寄るなどという一極集中の調和ではない。おかしく、恐ろしく、そして悲しい、このごった煮のダイナミズムには骨踊りという言葉がいい。

かつて焼場道と呼ばれた通りである。江戸時代から明治のはじめにかけて、道の両側にはたくさんの寺が建ち、それぞれ死者を焼く火屋を持っていた。

今は、一つの寺もここにはない。宗教臭いものといえば、ピアノ教室のポスターを張ったキリスト教会が一つあるだけだ。サンダルを並べた店や、文房具を並べた店などが、永遠の昔から根を張り続けてきたように建っている。

百年前になくなった火葬場の風景が追い払われているからといって、不思議がることはないのだろう。四十年前の戦争で焼け野原になった風景さえ、もうどこにもないのだから……

風景が一つ浮かんできく。しわくちやの新聞紙が乱れ重なり、待合室の床は一面におおわれていた。上野駅だ。はだしの足を引きずりながら、少年が一人、動いている。足の動きと一緒に、床の新聞紙は音をたてて掻き分けられ、その下にも、埃をのせて新聞紙は乱れていた。焼夷弾の炎をくぐり抜けたのはだしの足は膿でふくれ、膿はくずれていた。

はだしの上にはかき裂きだらけのズボンがたれ、少年の動きと一緒に、かき裂きは窓のように開いた。窓からのぞく、少年のすねや、ももや、尻の肉は、助けを求める声も出せない。泥で汚れた黒いズボンの下で、肉もまた泥の鈍さで押し黙っていた。

かき裂きだけではなく、すっぽりと抜けた穴もあった。焦げた匂いが穴のまわりにこびりつき、穴は体の上半分をおおう一枚のシャツを同じようにむしばんでいた。

シャツの裾はズボンの上にたれ下がり、その腰を藁縄が巻いている。黒いへそがおびえるようにのぞいていた。

バリカンを忘れた少年の髪は逆立ち、口はどんよりと開いている。まばたきもない目を足元にやりながら、少年は待合室をさ迷っているのだ。

少年の足は時々止まった。手が伸び、新聞紙を拾い上げる。握り飯を包んでいたものだった。たった一粒残っている乾いた飯粒をつまみ取り、口に運ぶ。丹念に噛み砕きながら、少年はまた一粒をたずねて足を引きずった。

祖母の膝の上で音がした。少年から目をそらす。開いた包みの中に、握り飯などというぜいたく品はない。さつま芋が二本、輪切りになって並んでいた。

少年の足が掻き分ける新聞紙の音が大きくなった。ベンチに座る祖母の前に少年が立つ。にごった匂いが鼻を突いた。少年の喉がふるえる。

「ンーツ」

言葉にならない音を洩らし、少年は右手を突き出した。

「かわいそうに」

祖母はつぶやくと、輪切りの一切れを垢のこびりついた少年の掌にのせた。のせた掌に口を近づけ、少年は一気に頬張った。負けるもんかと、祖母の隣から手を出す。その手に向き合い、少年の手がまた伸びてきた。

祖母は二切れ目を与えると、包みを丸めてさつま芋をくるんだ。その隣でまだ一切れ目を頬張っている口もとに、二切れ目を食べてしまった少年の手が伸びてくる。

あごを引いて、上目使いに少年をにらんだ。光のない少年の目は空の方角に外れていく。空はなく、くすんだ天井が広がっていた。

「リュックサックを背負いなさい。あつちへいつて食べましょう」

祖母のささやきにうながされ、膝のリュックに手をかけた。立ち上がると、同じ背の高さの少年だった。

「いくよ」と、祖母はまたうながした。

少年から目をそむけ、リュックを背負う。歩きだした鼻に、少年のにごった匂いがまつわりついていた。匂いの中から、ぬくもりを持ったウンコの匂いがただよってくる。

足を止めた。思い出が激しく心を打った。

咳一つ許されない天長節の学校だった。身動きもせず立たなければならぬ。首はたれ、目を足元にだけ許される。真っ白な手袋で校長が広げ持つ教育勅語も、校長の背後の壁に祀られる天皇、皇后の写真も、盗み見ることは許されなかった。

勅語を読む校長のおごそかな声に逆らって、しめった音を腹が奏でる。冷や汗が足の先からにもじんできた。

音を押さえようと、腹をへこませる。その途端、尻の穴にかかったのはウンコの圧力だった。穴をすばませ、全身でこらえる。体が火照った。息ができない。

「御名御璽」と、校長の最後の声が響いた時、ニョロニョロとパンツの中に溢れていくウンコを、引いていく血の気と一緒に感じていた。

匂いがたち込め、まわりの顔がゆがんだ。すぐ後ろの子どもの目は、ズボンの裾から現われてくるウンコをすぐに見つけた。見つけた子どもの右の指が右隣を突つき、左の指が左隣を突つく。突つかれた子どもの指がまた動き、子どもたちはゆれた。

教育勅語を巻き戻す校長の手は、ざわめきを受けてふるえていた。首をそろえて並んでいるセンセイの目が、一斉にざわめきをにらむ。にらまれた子どもたちは、匂いと笑いをこらえながら、ざわめきを止めなければならなかった。

校長の式辞がはじまった。涙が流れ、ウンコで汚れた足元の床にたれ落ちた。

式が終わり、みんなの足がまわりを通り過ぎていく。わけを知った担任が、荒い足取りでやってきた。こわばった体で立ちつくす足元の汚れに目をやると、担任は舌打ちをして出ていった。

新聞紙を右手につかみ、水と雑布の入ったバケツを左手に下げて、担任は戻ってくる。

「うちへ帰れッ！」と、彼は体をふるわせながら呶鳴りつけた。……

待合室の少年のくるぶしには、細い、黄色い流れが一本つたわっている。それは足元の新聞紙に小さなしみをたらして終わっていた。一粒の飯粒にふさわしい貧しいウンコであった。芋二切れで逃げられる少年の涙のようなものであった。

「何してんの？」と、祖母がうながす。祖母に追いつき、黙って歩いた。歩く体に匂いがまつわり、黙ることはできなかった。

「あの子、ウンコたれてたよ」

自分と祖母を責めるようなまなざしで言う。

「おばあちゃんがいるだけでも、坊やはしあわせなんだよ」と祖母は言った。

「ねえ」と、不意に現われた思いを言いたくなる。

「なあに？」

「天皇陛下も、ウンコするの？」

「シート、憲兵さんに連れていかれるよ」と、祖母はけわしい顔になった。

祖父母の故郷、下北へ疎開する日のことである。東京との長い別れになったのだが、其の日の

少年とは、まだ別れることができない。……

鉄の枠に、太い鉄線の網を張った学校の塀である。塀は道と校庭を区切っていた。校門に仕込まれているのは思い鉄の扉だった。このいかめしさが分かるのだろう。亡者の影はとだえ、怪獣の口のように開いた校門へ飲まれていくのは子どもたちだった。

チャイムが鳴る。八時十五分だ。このチャイムが鳴ってから、校舎の中に入ることを許されている子どもたちだ。玄関の前にかたまっている集団が崩れ、それぞれの教室に向かって散らばっていく。

子どもたちの流れは追わず、校門の前を通り過ぎる。看護当番の日だった。学校の近くの四つ辻に立ち、登校する子どもたちを見張ることが仕事なのだ。八時十五分からである。センセイの勤務時間は八時三十分がはじまりだから、十五分のサービスである。誰のためのサービスなのかは分からない。

「おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。……」

四つ辻に立ち、子どもたちに声をかける。まるでJ Rの改札係だ。改札係は切符を調べ、定期券を調べる。看護当番が調べるのは子どもの服装であり、挨拶の声である。

帽子は、かぶっているかな？

帽子とは校章を正面に染め抜いた紺色のつば付き帽のことである。なくしたから、家にある野球帽で間に合わせようなどというわけにはいかないのだ。あの帽子はウチの学校の生徒だ！ ウン、あれは何だ？ 道草を食ってるな！ と、遠目にも見張れるための帽子なのだ。

「おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。……」

猫なで声の見張りの結果は日誌に書き、必要があれば職員朝会で注意をうながす。うながし手の一番は、腹の出た生活指導主任である。

「袖がダブダブデー、手が隠れてしまうほー、長い上着を着てる子がいるんですけどー、みつともないですかー、教室デー、注意してください」

「ポケットニー、手をつ込んでる子どもがー、目立つのデー、転ぶと危ないですかー、教室デー、注意してください」

彼の言葉は、テレビと同じだった。街角のインタビューで、やたらに言葉を区切り、語尾を強めてしゃべる東京の若者を眺めながら、何だこりゃと、北海道で思ったものである。その言葉が、何と職員室で使われていたのだ。そうまで強めねばならぬほど、大事な言葉だというのだろうか。そうまでとぎれてしまうほど、言葉に自信はないのだろう。

「おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。おはよう。……」

無帽も、ダブダブも目には入れない。味方のようなフリをして声をかけるが、味方ではない証拠に、挨拶の声がほとんど返ってこなかった。

裏切られた思いが点火し、立て続けに自分が外れる。

ゴキッ！ ゴキッ！ ゴキッ！ ゴキッ！ ゴキッ！ ゴキッ！

十人目から十一人目が外れ、十一人目から十二人目が外れた。十三、十四、十五、十六、十七でようやく終わり、十七人目を一人残して、後の七人は子どもたちに襲いかかっていく。偶然の

七なのか、七人の侍の七なのかは分からない。子どもとはいえ、敵は多勢だ。七人いれば何とかなりそうである。

「こらア、待てエ！ お前、どうして挨拶しねえんだア！ なめるんじゃねえよオ！」

追いつがり、襟をつかむ。つかんで引き倒す。

悲鳴が七人を我にかえした。七人は四方に散って逃げ出してしまふ。その醜態から推し量ると、七人の侍でないのは確かなようである。

腕時計の針は八時二十五分を示していた。そろそろ見張りを終える時間である。八時半の職員朝会までには、職員室にたどり着かなければならない。

一人残った十七人目は四つ辻を離れる。校門の前で立ち止まり、通学路の左右を見た。右にも左にも子どもの姿が小さく見える。八時二十五分まで、校門をくぐらなければならない彼等なのだ。三十五分からは体育朝会が待っている。それに出るためには、体育着に着替えなければならぬ。

遅れを取り戻そうとして走り始める子どもがいた。走る子どもをやり過して、泰然自若と歩いてくる子どももいる。遅れた子どもの学年と組、氏名をメモするように生活指導主任が念を押したのは、もう数週間も前のことだった。お達しは古びている。遅れてくる子どもの姿から目をそらし、校門に入った。

体育着に着替え、もう校庭に出ている子どもたちがいる。目は開け放した教室の窓にいった。四階建ての校舎の上から二つ目、左から三つ目の教室が三年二組だ。去年、そこで担任をやり、

その子どもたちが進級した今年も、同じ教室で新しい子どもたちの担任をやっている。

左端の教室の窓は閉まったままだ。資料室という名の物置である。かつて三クラスずつあったという学年は二クラスずつに減ってしまい、空き教室がガラガラとある学校なのだ。来年の一年生は一クラスという噂もあるが、この春、この区内では、統合された小学校もあり、中学校もある。

三年二組の窓に、まだ着替えもしないで走りまわっている子どもたちの姿が見えた。そこまでいって急ぎ立てる時間は、もうない。

土の校庭の隅をコンクリートの通路が固め、玄関に届いている。玄関への最短距離は校庭を斜めに横切ることだったが、登下校の時は土の上を通ってはならないきまりがある。きまりに従い、コンクリートを歩いていった。きまりを破ってうっかりと横切り、近くで遊んでいる六年生に嫌味を言われたことがあるのだ。

子どもの下駄箱の並ぶピロティを通り、校舎の中に入った。センセイ用の下駄箱の前に立つ。下駄はほとんどこの世にないのに、なぜ下駄箱と呼ぶのだろう。

靴箱と呼ぶセンセイが、この学校にいる。

「靴箱二ー、上靴を入れる時ハー、かかと二ー、学年と組と名前を書いテー、かかとが見えるよう二ー、入れることになってますがー、あまり守られていないようなのデー、教室デー、注意してください」

ある日の職員朝会で太った腹をゆすりながら言ったのは、例の生活指導主任だった。靴箱、と

確かに言った。彼の口調にはすっかり慣れていたが、靴箱は耳慣れない言葉だった。

放課後、職員室の書棚から広辞苑を引き出してみた。下駄箱はのっているが、靴箱はのっていない。

げた・ばこ【下駄箱】下駄などのはきものをに入れておく箱。

などの中に、靴も含まれているのだろう。伝統文化は、まだ健在の風を装っていた。

その日の帰り、大塚駅では下りないで、一つ先の池袋駅で下りた。土曜日だった。土曜日は気の向くまま電車に乗り、遅い昼食をどこかでとるのだ。

地下街に出て、西武デパートのエレベーターに乗った。食堂街にいくつもりだったのだ。混み合うエレベーターの中で見るともなしに売り場案内の文字を眺めていると、『家具』という文字が目飛び込んできた。靴箱へのこだわりが広がりはじめ、五階の家具売り場へ体を押し出す。

日本と思われぬ場所だった。外国映画でしかお目にかかれぬ豪華な応接間やキッチンが、そっくりそのまま作られて、家具はゆったりと横たわっている。アラビア模様のカバーをおおったベットのわきには、同じ模様の布をかぶせた円形のテーブルがあり、ワインの瓶とグラスが光っていた。その隣の邸宅はエメラルド色の柱である。応接間の向こうには山と湖と熱帯樹の遠景が、靴箱にこだわる男を嘲笑うように描き出されていた。

昼食を取るのも忘れ、エレベーターで地下街へ戻る。今度は東武デパートだ。家具は六階である。豪邸のセットはなかったが、広いフロアを占めるのは大きなソファアールばかりである。隅にあるのは和洋いずれも大きな筆筒、そして大きな棚である。

再び地下街へ戻り、階段を昇って地上へ出る。サンシャイン通りへいく途中に、確か家具店があるはずだ。

横断歩道を渡り、少しいくと、『宮田家具』という文字が見えてくる。

店内をのぞいた。いきなり見えるのは、ここでも大きなソファード。客は誰もいない。靴箱の探究には、入り難い店である。

思いきってドアの前に立つ。自動ドアが開いた。中に入ると、「いらっしやいませ」と声が重なる。声をかけてきた事務室には、制服姿の女性にまじって、ネクタイをした恰幅のいい男性がいた。

奥までいくと、エレベーターの前で商品を積み込んでいる作業服の男がいた。

「あつ、今、商品の移動中なので、あちらのエスカレーターを使っただけませんか」と作業服は言う。

男の指し示す方向へ足を進めた。エスカレーターは止まっている。『商品の移動中なので奥のエレベーターをお使いください』という張り紙がしてあった。買物客でもない人間に、このチグハグを怒る権利はない。

あきらめて店を出ようとした時、事務室のネクタイが寄ってきた。

「何か、お探でしょうか？」

「このお店に、下駄箱はありますか？」と、救いの神に甘えてしまう。

「あります。あります」と、ネクタイは言葉を二度重ねた。重ねられるのは困るのだが、もう後

には退けない。

「今、下駄は普通、使いませんよね。……」

質問の言葉は途中だったが、ネクタイは感*マヤがよかった。

「それでも下駄箱と言いますねえ。靴箱とは言いませんねえ」と、さすがプロの反応である。

「でしょう!」と、うれしくなつて声がはずむ。

「下駄箱なら七階にあります。どうぞ、エレベーターをお使いください」と、制服がそばから口をはさんだ。

「いえ、また後できます。どうもすみませんでした」と頭を下げて外へ逃げた。

「なるほど、下駄は使わないのに下駄箱か」と、ネクタイの感心する声が背中でする。

店の外から窓を見上げた。七階は一番上の階だった。西武デパートの五階にもなく、東武デパートの六階にもなかった。そしてここ宮田家具店の最上階の七階に、下駄箱は押しやられているのである。いずれ下駄箱という言葉は死ぬだろう。

サンシャイン通りに足を向ける。看板がせめぎ合い、客を呼んでいた。シェーキーズピザパーラー、クレジットアイフル、シネマサンシャイン、ゲームファンタジア……

「シューズボックス」

呼び水を受けたように言葉が出る。

「そうだ。シューズボックスになるぞ。きつと」

思わず浮かんだ着想に微笑みながら、人の流れにのって進む。

『TB』という看板があった。『~~田中~~田中』という文字が、その下に並んでいる。『AIU』は、もうそれだけだ。それでは分かるはずがない。その先にある緑色の大きな文字は『OKY UHANDS』だ。引越しの挨拶状を刷るためにプリントゴッコを買ったのは、この店である。立ち止まり、店の表の案内板を見た。『収納家具』という文字がある。まだいったことのない三階だった。

エスカレーターから足を外すと『小物収納』と書いた札が、すぐ目の前に下がっている。小さなケースがその下に並んでいた。足を進めると、天井からまた札が下がっている。今度は、『収納用品』だ。文字の緑は、森のように深くて濃い。透き通ったプラスチックの大きなケースが、蛍光灯の光を木漏れ日のようににはじいていた。

幹の色で立つものがある。近づいて目をやった。値札に書いた商品名が目を打ち、思わず声が出る。

「シューズボックス！」

つい先刻の着想は、とつくに先取りされていたのである。

右隣に並んでいるもう一つの商品に目をやる。同じ幹の色だった。何と札には『シューズラック』と書かれている。その右隣の塗りは違い、白樺の幹である。札には『シューズロッカー』と書かれている。その右隣の黒松の幹は、再び『シューズボックス』になっていた。

四つのふたを開いてみた。三つ目までは、どれも棚で仕切られている。四つ目のシューズボックスと呼ばれる商品だけが違う作りで、棚が斜めに傾斜していた。違う作りの一つ目が同じシュ

ーズボックスであり、一つ目と同じ作りの二つ目、三つ目が、それぞれ別名で呼ばれているのはどういうわけだろう。見当のつけようがない。下駄箱が死にかかり、新しい呼び名が生まれはじめている混沌の時代なのだ。

混沌は、腹にも押し寄せていた。もう三時である。……

塗りがはげ、黒ずんだ木の肌を無数の傷がへこませている。下駄箱以外の呼び名など、考えられなかった時代のものだ。

上靴を取り出し、履き替えた。職員室は二階である。

「おはようございます」

言葉と一緒に胸を張り、職員室に体を入れる。体だけでは証拠にならず、赤で書かれた壁の名札に手をやる。ひっくり返し、名前は黒に変わったが、名札だけでは証拠にならない。机の上に鞆を置き、鞆の中から印鑑ケースを取り出す。

「おはようございます」

「おはようございます」

机のまわりから、挨拶がこだまのように響き合う。こだまの言葉は予想できるが、人間の言葉は予想できない。すぐ後の職員朝会で校長に注意されるなどは、思ってもいないことだった。

出勤簿に印鑑を押す。押した跡を数秒眺める。一つずつ、捺印で埋まっていくのが楽しんだ。残った空白を押し切れば、学校からは自由になる。そう信じて一年がたち、情けなくも二年目の出勤簿を押ししているのだ。

チャイムが鳴る。余韻を切り捨て、日直が告げる。

「おはようございます。職員朝会をはじめます。教頭先生、お願いします」

煙草を持ちたい右の手を、左の手がももの上で押さえ込む。会議中は禁煙だったが、会議と言
える中味は今日もないはずだ。

教頭が物柔らかにお達しを述べはじめた。

「おはようございます。今日は体育朝会の日です。午後からは区教研の教科部会があります。これは、是非、都合をつけて参加してください。参加される場合は黒板に紙を張っておきますので、どこに参加されたのか分かるように名前を書き入れていってください。それから、学級の子どもたちはきちんと帰して、先生だけ先に出てしまい、子どもたちが残って騒いでいるということのないようにしてってください。お願いします。以上です」

「他にありませんか？」と、日直は職員室を見まわす。月曜日は全校朝会、水曜日は体育朝会、そして金曜日は児童集会が職員朝会に続いてある。時間の食い込みをおそれて、連絡はなるべく、月水金を外す取り決めになっていた。取り決め通り、声はなかった。（*1）

「それでは、校長先生お願いします」と、日直は締めくくりのお言葉をうながす。

真っ白なトレーナーに包まれた体を立たせ、校長は口を開いた。

「エーッ、保健日誌を読んでみますと、このごろ保健室に三年二組のモトヤマサチコが、腹痛を訴えてよくいくようで、大変不安定な情緒になっているようですので、担任の先生の御指導をよろしく願います」

ゴキッ！

胸の中から飛び出そうとするのは十七人目だ。腕を組んで押さえてみるのは十八人目の自分である。押さえた腕から飛び出して、校長の机を叩きながら呶鳴りはじめる自分がいる。

「あなたから言われなくなたって、サチコがどういう状態か分かってますよ！ サチコことは、毎日毎日、気にかけてます。気にかけすぎて、今朝なんか、ぼくのオナニーの相手になりかかってしまったんですよ！ 大体、こんな形式的な職員朝会で、一方的にそちらがしゃべっただけで、かたづけ問題だと思ってるんですか！？ そんなにサチコのことを心配なら、もっと時間をとって、じっくり話合ふべきじゃないですか！」

「それでは、これで職員朝会を終わります」

平然とした日直の声がする。渡りに舟だ。組んだ腕を解き、十八人目は立ち上がると、背広を脱いで椅子の背もたれに掛けた。体育朝会の服装は、これで出来上がりである。洗いざらしのチエックのシャツに、折れ目の消えたズボン——この日常性こそ、山野を駆けたウンコ石人伝来のものののだ。オリンピックの非日常性に、体育は囚われてしまっている。

抗議を続ける十七人目を置き放して、十八人目は廊下に出た。解いた腕は、いつの間にかまた組んでいる。面と向かって言えなかった十八人目の、せめてもの抗議の姿勢だった。

外履きの運動靴に履き替え、校庭に出た。担当のセンセイが一人、壇のそばで、みんなが職員室から下りてくるのを待っている。職員朝会には参加せず、子どもを並ばせるしきたりなのだ。

三年二組の子どもの頭がゆれている。つい大股になって近づいてしまう。ゆれる頭を注意しな

がら、列の後ろへ進んでしまうのだ。

腕は組んだままだった。抗議の腕は、權威の腕に変わっている。気がついて解いたのは、列の後ろに届いてしまつてからだつた。

列の後ろのサチコの位置に、彼女は今日もいなかった。駅前の食堂で両親が働く彼女である。仕事に出かける山谷の男たちの胃袋のために、早朝四時から両親が出かけてしまえば、残るのは、まだ眠っているサチコ一人であつた。寢坊をすれば、学校を休んでしまう。遅れて出てきても、朝食抜きの彼女なのだ。

「気ヲツケッ！ 体操体形^{*隊形}二開ケッ！」

壇上から号令がする。壇の左右にはトレーナー姿のセンセイたちが並び、校長はひととき目立つ不動の姿勢をとつていた。産休代替教員の抗議などでゆれていては、校長は務まらない。

号令を受けて先頭の子どもたちが左右に散らばり、続いて壇上から笛が鳴る。先頭の子どもを目印に、残る子どもが散らばる番だ。左右の五、六年は前後の間隔をとり、残る学年はその間隔に合わせながら開いた列を整えていく。四十年以上も前に戦争は終わったのに、まだ軍隊の真似事をしている学校なのだ。

音楽が流れ、子どもたちの体が動く。ラジオ体操ではない。この学校のセンセイたちが作り上げた体操なのだ。区の体育研究指定校として、秋には研究会がおこなわれることになっていた。研究会という名前の見世物である。見世物には独創性が必要だったが、どこの体育研究校も自校の体操を作つてしまふと言うパターンには、もはや独創性などというものはない。

体操には加わらず、校門に目をやる。そこに現われるかもしれないサチコを見張るためなのだ。そんなふうにして、彼女の姿を見つけたことがある。姿はすぐに校門の向こうに隠れてしまった。急いで道路へ出てみると、ランドセルを見せて遠ざかっていく。あわてて追いかけて連れ戻した数は、二回だったろうか。三回だったろうか。……

見えた！

バサバサの髪がゆれている。

子どもたちに気づかれぬよう、忍び足で体操から離れた。校庭に溢れる音楽が、足をはずませ、走らせる。

校門の陰に立つサチコの視線は逃げていない。迎えを待つて、彼女はじつと立っていた。

「おはよう。待つてたんだよ」

櫛の入らないサチコの髪をなでながら、整えてやる。

「先生、作文書いてきたよ」

顔が笑い、唇がとがっていた。彼女の唇がとがるのは、大事件のあった時だ。週に一度の作文の宿題を、まだやってきたことのない彼女である。それを書いてきたということは、大事件そのもののなのだ。

「えらいなア、よく書いてきたなア」

「三枚書いたんだよ」と、彼女の唇がまたとがる。

「三枚も？」

「うん。三枚書けば、三年生だもんね」

「そう、立派な三年生だ。すごいなア」

おおきくうなずき、彼女の肩を叩いてやる。三年生だから、作文は三枚以上書かなければならないというのは、子どもたちへの口癖だったのだ。

叩いた手をそのまま肩にかけ、校門に入る。体操は終わりに近づいていた。体調の悪い子どもが数人、校庭のわきに並んで見学している。

「体操が終わるまで、ここで待つてな」

手を離し、三年二組の列の後ろへいく。音楽が終わり、笛が鳴った。列は元の形に閉じ、行進曲が鳴る。足踏みがはじまり、決められた順番に従って列は校庭から消えていく。

チャイムが鳴った。もう一時間目のはじまりである。靴を履き替える子どもたちの姿でピロテイは混み合っていた。混み合いの中に、サチコの顔を確かめ、玄関に向かう。

子どもの流れと一緒に、教室に入った。教卓の前に座り、子どもがそろそろのを待つ。

「先生、着替えるの?！」

体育着を着た子どもの質問がいつものように飛んでくる。もう着替えをはじめている子どももいた。

「自分で考えな!」と返す言葉も、いつもと同じだ。たずねた子どもは、まわりを見まわす。

「着替えても、着替えなくてもいいんだよ」

隣の子どもが言うのと、着替えない方を選んだのか、後ろの子どもとおしゃべりをはじめた。お

しゃべりがおしゃべりを呼び、教室は騒がしくなる。

一斉に着替えさせれば、少しはおしゃべりがなくなるのかもしれない。着替えさせなければ、すぐに朝の会をはじめることが出来るだろう。どだい、こんなところで一斉を止めても、それは芥子粒の自由なのだ。

芥子粒でも、自由はいい。おしゃべりに堪えていると、原稿用紙を躍らせてサチコが教卓にきた。

「ハイ、先生」

突き出した作文の頭には、『きょうりゅうのせかいおよんで』という題が書いてある。

「オー、読ませてもらうぞ」

手に取って、目を注ぐ。文字の鼓動がいきなり届いてきた。文字には血が通い。息が聞こえる。

いろいろなところえいつて、三しゅうかんにもたべていないのかなとおもいます。

でも、いろいろあるいていたので、いろいろわかるとおもいます。

きょうりゅうのかせきわみたことありますが、きょうりゅうのほんとうのかおわみたことないから、みたいとおもいます。もしほんもののかわのついたかおがくぶつかんにおいてあったら、すぐにみにいくとわたしわおもいます。

いま本にげんじつにいきているとかいてありますが、いまいきているんだってみんなにしたら、おおさわぎになるとおもいます。

でもそこにすんでいるんなら、そこがしぜんなんだとおもいます。

わたしもいきたいとおもいます。

いろいろのきょうりゅうとあそんで、いろいろして、きょうりゅうとなかよくしたいとおもいます。

ほらあなにたんけんに行ったのに、いろいろなきょうりゅうがでてきました。

でも一日一日、いろいろのきょうりゅうがしんでいくのでかわいそうとおもいます。でもいまでもいきているんだったら、それでいいとおもいます。

いろいろのかせき、そしてさいごにわぜんぶのかせきがみたいとおもいます。

わたしわいつかしぬかとおもうと、おもいでができたなとおもいます。

きょうりゅうも、いのちわみんなおなじだからとおもいます。

いのちって、すぐにわなくならないとおもいます。

いのちわたいせつにしたい。

きょうりゅうわにんげんがころしてしまうので、ぜつめつしてしまうとおもいます。

わたしわかわいそうとおもいます。

いまげんざいいじめられてるのかなとかんがえると、いつもいつもねむれなくなります。

二枚目をめくった時、サチコはのぞきながら言った。

「ね、三枚でしょ？」

三枚目は、ほんの数行しか埋まっていな。それでも三枚なのだと認めてもらいたい彼女なのだ。

「いいなア。これはいいよ」と、答えはサチコの思惑から外れ、目は文字を終行に向かって追いつけた。

いままでにきょうりゅうがいきっているんだなとおもってたけど、ほんとうにいきいてんだなとおもいます。

いろいろのいのちがたくさんあるんだから、いろいろなとぶきょうりゅうがいたりするんだから、みないきているからうれしいなとおもいます。

「これ、図書館の本だろう？」

作文を読み終わり、サチコにたずねる。

「うん」

教卓に身を乗り出した彼女の返事が耳もとではじけた。

学校にも図書室はあるが、本の数が多いとは言えない。近くの区立図書館から、百冊まとめて借りてきたのは先週のことなのだ。教室の後ろに置き、借りたい子どもには家への持ち帰りを許している。サチコが借りていったのは、コナン・ドイルの原作だった。

「よし、この作文は学級通信にのせるぞ。今日、図工の時間に印刷しとくからな」

「ワイー！」と手を上げ、踊るように、彼女は自分の席に戻っていった。

日直が二人、前へ出て、**チョークをにぎる。黒板に自分の名前を書きはじめた。下駄箱同様に、したたかな黒板である。黒い黒板など、どこの学校にもなく、みんな緑色に替わってしまったのに、呼び名は旧態依然なのだ。教室の正面に権威のようにのさばり、権威の住みに日直の名前を**

書かせている。

「これから朝の会をはじめます」

男女それぞれ一名の日直の声が重なる。椅子の音がおしゃべりを静め、子どもたちが立った。一人一人の子どもの席に目をやる。欠席はなかった。サチコの首が左右を向き、後ろを向いてゆれている。

「サチコちゃん、動かないでください！」と、女子の日直のかん高い声がすかさず飛ぶ。勉強も得意なら、喧嘩も得意なミチヨである。

「動かないでください」

もう一人の日直の声があわてて追いかけるが、迫力はない。クラス一、真ん丸い体のヨシキは、気はやさしくて力持ちだった。

サチコの首は動きを止めない。その後ろから声がした。

「先生、サチコちゃんたらね、作文三枚も書いて学級通信にのるんだって、いばるんだよ！」

「こらっ！ サチコ！」と叱りつける。前を向いて、彼女の首が止まった。

「挨拶だ」と、ミチヨとヨシキを急き立てる。

「おはようございます」

「おはようございます」

急き立てられた二人の声は、ずれて重なる。

「おはようございます」

「おはようございます」

「おはようございます」

みんなの返す挨拶も、ずれて響いた。ずれを気にするセンセイの仕事だが、気にするゆとりはない。一時間目のチャイムは、教室に入る前からなってしまうのだ。一、二時間目は図工室で、図工のセンセイに習う時間になっている。

「時間がないので、きまり係と遊び係だけ連絡してもらいなさい」と、日直への言葉が早口になる。

席に座った子どもたちのおしゃべりが、もうはじまっていた。正面の日直の席で、ミチヨとヨシキもしゃべっている。

「日直！」と声を大きくした。気づいた二人の顔が言葉をうかがう。

「きまり係と遊び係！」と、センセイの言葉は節約されていた。

「きまり係、連絡ありませんか！」

呼吸を合わせて二人は叫ぶが、おしゃべりの渦に巻かれて、ヨシキの低温は聞こえない。響くのはミチヨの声だった。

きまり係の一人が立ってしゃべりはじめた。教卓にひじを突き、耳の後ろに掌をあてがう。騒音の中から辛うじてきまり係の声が聞こえてきた。

「今日のめあては、勉強時間中におしゃべりをしないです」

「それでいいですか！」とミチヨの声がした。役目をほうり出してヨシキは黙っている。ほうり

出しているのはヨシキだけではなかった。

「いいです」と返ってきた声は、みんなの半分の声にもたりない。

「しゃべるな！」と呶鳴りつけると、一瞬、教室は静まった。型にはまった議会主義のつまらない真似事をほうり出す自由は、芥子粒の彼等にはない。

「きのうと同じなんだから、消さなくたっていいじゃないか！」

子どもの声が一つ響いた。勉強も喧嘩も、ミチヨと一、二を争うカズヤである。ミチヨに負けるのは背の高さだけ。学級一のチビちゃんなのだ。

黒板の文字を消しはじめたミチヨの手が止まった。昨日の日直が書いた一日のめあてなのだ。黒板消しは『勉強時間中に』を消してしまい、続く文字だけが残っていた。『おしゃべりをしない』である。

「そうだよ。同じじゃないか！」と、真つ先に同調したのはノツポのハルノブだ。

「消さなくたっていいんだよ！」

「時間の無駄だよ！」と別の声が続く。

「そうだ。時間の無駄だ！」と、センセイまでが子どもに同調すると、ミチヨは黒板消しをチョークに持ち替えた。消した部分に文字を埋めようとする。晴れて黒板に書ける機会を逃したくないミチヨなのだ。

「書かなくてもいいよ。それで分かるから」

無慈悲なセンセイの声はミチヨの手からチョークを離させると、ぼんやりと正面に座ったヨシ

キに向かう。

「次は遊び係だ！」

「遊び係、連絡ありませんか！」と叫んだのは、逸早く正面に戻ってきたミチヨだった。

「今日の二十分休みは、手つなぎ鬼です。鬼は、わたしがやります」

遊び係の唇の動きが止まると、「いいです！」と、一斉にみんなの声がとどろいた。そろそろケリをつけて、図工室にいきたいのだ。センセイの言葉がすかさずつながる。

「さあ、それではすぐに図工の用意をして廊下に並んでください」

終わりの言葉を言いそびれた日直だが、こだわる暇は彼等になかった。教室の後ろの棚に向かって、みんなはもう小走りなのだ。棚の前で体がひしめき、図工の道具を抱える。

ひしめきは廊下に移った。左右の教室に届きやすい、ここでの囁き声は出さない方がいい。

「あつ、ハルノブ君、お行儀がいい」

ひしめきの後ろで直立するノッポを先ずは褒めてみた。褒められたハルノブは、照れた顔で、たこのように体をゆらす。ゆれを真似て隣の一人がたこになった。三十四匹のたこが生まれる前に、子どもたちを歩かせてしまわなければならない。

「前エーッ、進メッ！」

とうとう体育集会だ。ざわめきながら遠ざかっていく子どもたちの列が廊下を折れて見えなくなる、思わず深く息をついた。

椅子に座り、空き缶の鉛筆立てから一本を取る。鉛筆立てにつまっているのは、どれもこれも、

落とし主の現われない鉛筆ばかりだった。

日直の子どもが職員室の前の連絡棚から持ってきたカードに0を二つ書き入れる。男と女の欠席者の数である。

カードを手にして、静まり返った廊下に出た。階段を下りて、職員室へ向かう。連絡棚にカードを戻し、かたわらの小黒板のチョーク受けからチョークを取った。ここでも、0を二つ書き入れなければならぬのだ。

戸を開け放した職員室の中に、書き物をしている教頭の横顔が見える。隣の机の校長も、そこに詰め寄った十七人目の自分もいない。校長はいつものように隣合わせの校長室に引きこもっているのだらう。そこまで押しかけ、十七人目はまだ詰め寄っているのだらうか。聞き耳を立てたが、校長室からは物音一つ聞こえてこなかった。

肩をすばませ、職員室に入っていく。机の下から鞆を引き出す。煙草とライターが、そこに入っているのだ。二つをつかみ、逃げるように職員室を出た。

教室へ戻り、戸を閉めた。後ろにまわり、もう一つの戸も閉める。誰もいない空間が息づき、窓の光が椅子をやさしく照らしていた。

腰を下ろし、煙草をくわえる。炎を受けて火が灯り、煙がゆっくりと心をあやした。

煙草の先に、砂時計のように灰がたまっていく。落として散らすには忍びない心の友だ。灰皿の中に崩さぬように灰を落とし、短くなつた煙草の先を静に灰皿に押しした。

教卓の引き出しを開け、ファックス用紙を一枚はぎ取る。緑色の線で刷られた方眼は五ミリで

ある。鉛筆の芯の太さと老眼のため、それより小さな棒は駄目だった。

長い間使ってきたのは、四ミリ方眼のろう引き原紙だった。北海道の最後の学校では、原紙はまだ職員室に残っていたが、時代遅れのヤスリは買ってもらえなかった。一つ前の学校で買ってもらったヤスリを使って製版したが、主流はとくにファックスだった。

東京へ出てくる時、ヤスリも鉄筆もごみに出してしまった。センセイをやるなどということも予想もしていなかったからだ。いざセンセイをやってみると、ヤスリはもう東京では使うことのできない道具だった。原紙もなければ、原紙を張る印刷器もなかったからだ。

はじめて原紙を使ったのは、四十年も前だった。下北の新制の中学校を卒業して、地元の鉱山の事務所に勤めたのである。雑用だった。お茶汲みもしたし、セメント袋もかついだ。

朝、事務所のみんなにお茶を汲むと、あてがわれた自分の机で言いつけられる仕事を待つ。待つ間が長くなると、いたたまれぬ思いで、両手の茶碗を強くにぎったものだった。茶碗の底をのぞいてみると、滴ほどの茶が残っている。茶碗のふちを唇に運び、その尻を両手で持ち上げるのだ。飲んだふりを喉で作り、茶碗を唇から離す。両手からは離さなかった。離してしまえば、することがなくなる手だった。

引き出しを開けようか、開けまいか、その日の手は迷っていた。前の日から戸籍謄本がしまわれていたのだ。郵便で、東京から取り寄せたものだった。父の欄には『空欄』と書かれている。それが手にとめらわせた。労務に渡す約束の日は、もう過ぎていた。

「これ、頼むのかな」

隣の机の労務の声が背筋を引き伸ばした。あわてて茶碗を机におき、目の前に差し出された紙を取る。紙の上に枠を取って刷られている手書きの文字は読めるのだが、その使い道は分からない。

「その通りにガリを切つて」

心細くて返事ができなかった。それを仕上げるために、また何枚かの原紙をこっそり捨てなければならぬのだ。

「あ、戸籍謄本、きた？」

「はい」と、声は薄墨のようだった。

「持ってきた？」

「はい」と、声はやはり薄かった。

引き出しがノロノロと引き出され、封筒をつかむと、心臓の音が手をふるわせた。

隣の机から手が伸びてきた。封筒を渡した右の手で、心臓の音を隠すように引き出しを戻す。

隠した心をむき出すように、労務は封筒の中から戸籍謄本を抜き、それを開いた。

横目で労務をうかがいながらペン皿の鉄筆を取ると、鉄筆は心のように重い。

戸籍謄本を一瞥し、労務は未決の箱に投げ入れた。あしろうような手さばきが、重い心を一層重くさせた。

ヤスリを置き、原紙をのせると、定規を当て、引つかくように線を引いた。悲鳴のような音がある。原紙を持ち上げると、線は原紙を破いていた。手早くたたみ、足元の屑籠にそっと手を伸

ばした。

ガラス戸が開く。老眼鏡のつるの一つが所長の耳から外れ、あごの下にぶら下がっている。

「オイ」と呼びかけるあごの動きで、老眼鏡は横柄にゆれた。「これ、トレスしてくれ」

目の前に突き出た手は、折りたたんだ鉋区図をにぎっている。迷路のように出入りする等高線をオイルペーパーが透かしていた。

頭が迷路に追いやられた。『トレス』などという英語を、中学で習いはしなかった。そんな中学の一年生の教科書からやり直している定時制高校で、学べる程度はたかがしれていた。

「それ、急ぐのか？」と、机の上がのぞかれる。

「さあ」と、返事はにえきらなかった。

「君、君」と、声は労務へ向けられる。

「ハッ?!」という返事と一緒に、算盤をはじく手が止まった。

「これ、急ぐのか？」と、五本の指が机の上の原稿を何度も叩いた。

「いえ、いえ、急ぎません」と、労務があわてた声で言った。

「急がないんじゃないか！ はつきりしろよ、はつきり！」

鉋区図が机の上に投げつけられた。二枚目の原紙が、あおりを受けて屑籠の上に舞い落ちた。

窓の外には、フキノトウが芽を出している。道端には、点々と雪の山が残っていた。一冬の汚れを浴びた残雪は黒く、光っているのはフキノトウだった。光るものは癩である。

昼休み、弁当をかつ込むと、外に出た。こらえた心が爆発し、フキノトウに長靴がいく。えぐ

るように長靴を動かすと、緑色の血を出してフキノトウは潰れた。一つ一つ踏み殺しながら、細い坂道を登っていった。

「自由」と言葉が小さく洩れ、「平等」と声が小さく続いて出る。振り返ると、事務所は坂の下に隠れていた。

「自由！ 平等！」と、声は大きくなる。かつ込んだ弁当がゲップになって唱和した。中学校の教科書『あたらしい憲法のはなし』で習った言葉である。

くうしゅうでやけたところへ行つてごらんさい。やけたぐれた土から、もう草が青々とはえています。みんな生き／＼としげっています。草でさえも、力強く生きてゆくのです。ましてやみなさんは人間です。生きてゆく力があるはず。天からさずかったしぜんの力があるのです。この力によって、人間が世の中に生きてゆくことを、だれもさまたげてはなりません。しかし人間は、草木とちがつて、たゞ生きてゆくというだけではなく、人間らしい生活をしてゆかなければなりません。この人間らしい生活には、必要なものが二つあります。それは「自由」ということと、「平等」ということです。

人間がこの世に生きてゆくからには、じぶんのすきな所に住み、じぶんのすきな所に行き、じぶんの思うことをいい、じぶんのすきな教えにしたがってゆけることなどが必要です。これらのことが人間の自由であって、この自由は、けつして奪われてはなりません。また、国の力でこの自由を取りあげ、やたらに刑罰を加えたりしてはなりません。そこで憲法は、この自由は、けつして侵すことのできないものであることをきめているのです。

またわれわれは、人間である以上はみな同じです。人間の上に、もつとえらい人間があるはずはなく、人間の下に、もつといやしい人間があるわけはありません。男が女よりもすぐれ、女が男よりもおとつているということもありません。みな同じ人間であるならば、この世に生きてゆくのに、差別を受ける理由はないのです。差別のないことを「平等」といいます。そこで憲法は、自由といっしよに、この平等ということをきめているのです。

「こん畜生！」

呶鳴り声は震えていたが、どこ吹く風で流れているのは目の前の小川である。

ズボンの前ボタンを外し、指をこじ入れた。下腹に力を入れる。激しく噴き出た小便が小川を打った。小便の長い影が川の光を汚し、泡の影が水底の石をゆらした。

小便が止まった。影は消え、泡はなく。石はもう不動だった。憤怒はまだおさまらない。長靴が川を掻きまわした。ベルトをゆるめ、ズボンの腰に手をかける。股引き、パンツにも手をかけて、一挙に下へ押してやった。

尻が出て、風が当たった。そのまましゃがむと、水面が尻を濡らした。削がれるように冷たかったが我慢した。負けたくなかった。

便意もないのに、力みを入れる。腹を押して力んでみたが無駄だった。

水面に映る顔に唾を吐き、「テテナシゴ！」と罵ってみた。唾より多く涙が流れ、水面に浮かぶ顔がかすんだ。

空は青く高かった。高い空の果てからは、人の姿など見えもしない。見えるはずもないのに、

人は尻を隠して生きていくのだ。

ならわしに従い、ズボンを上げた。そろそろ昼休みの終わる時間だった。……

鳴ったのは鉦山のサイレンではなく、学校のチャイムだ。一時間目が終わり、トイレに行く子どもたちのざわめきが廊下に聞こえる。教室の戸が開き、サチコが首を突き出した。「先生、学級通信できた?!」

「うん、今、印刷するとこだよ!」と、升目の埋まったファックス用紙を高く上げる。

小走りに教室の中に入ってくると、サチコは勢いよく紙を取った。取った紙を教卓に置き、ひじを広げて顔を近づける。

髪がたれ、顔はよく見えなかった。たれた髪を掻き上げてやる。もつれた髪 of 乾きが手につたわった。

髪を受けたまま、手の動きを止める。彼女の皮膚を目でなでた。黄ばんだブラウスの襟元から喉がのぞき、喉の左右の皮膚の下には視線の動きを拒むように骨が張っていた。

拒む鎖骨を視線が越える。鎖骨を越えるサチコの肉が波を打っていた。波は二つのふくらみを作り、ブラウスの左右をこんもりと盛り上げている。

髪を受ける手を離す。落ちた髪を払ってサチコの首が光のように動いた。

サチコの腰に両手を伸ばす。椅子に座ったセンセイの膝の上に彼女の体が後ろ向きに引き寄せられた。うなじの産毛がうっすらと渦を巻いている。洗いざらしのスカートが花のように開いていた。

ブラウスの前にまわした手で、腹をもんでやる。

「今日は、おなか痛くないの？」

「痛くないよ」と、サチコは膝の上から振り返った。

目が一つ笑っている。もう一つの目は髪の下だ。髪に手をやり、目を二つに整える。顔を近づけると、パツチリと開いた目の中に映る男がいた。少しずつ男を近づける。少しずつ男が溢れていく。

サチコを乗せたまたの真ん中でうずくものがあつた。ズボンを突き上げ、うずきがはじける。心がはじけ、血がはじけた。

チャイムが鳴る。

「あつ、はじまった」と、サチコの足が床に伸びる。2時間目の図工室が彼女を待っているのだ。

「刷つといてね」

彼女の顔が振り返る。

ゴキッ！

「いいから、ここにいろよ」

呼び止めるのは十八人目だ。十八人目の口をふさぐ十九人目の手が声を殺し、言葉はサチコに届かない。ふさぐ手を振りほどき、彼女を追いかける自分がいた。

外れて残った自分が一人、胸を押さえ、息をあえがせる。心が萎え、陰茎が萎え、潮はもう引いていた。

煙草を吸う。外れて残ったいびつな瘤を吐き出して、自分の表面を滑らかに整える。表面は整うが、心のいびつはおいそれとは整わなかった。

心を無視して、学級通信の原稿を取る。階段を下りて、印刷室に入った。

印刷機には、ザラ紙がたつぷりとセットされていた。受け口に原稿を差し込み、『製版』の文字を人差し指で押す。原稿が動き、いつものように試し刷りが一枚飛び出してきた。次は印刷枚数の数字である。

『3』を押す。子どもの数はこれに0だが、余分を取って『5』を押す。『5』という光の数字が、これらいつものようにカウンターの並んだ。

『印刷』の文字を押すと、機械は動きはじめる。正確なリズムが少しずつ心を整えていった。

突然、機械が動きを止める。カウンターの数字は、まだ0になってはいなかった。数字の隣に文字が現われ、光っている。

カミヅマリ ホンタイノ ナカ マタハソト

それ以外に、どこに詰まるところがあるというのだ。これでは下手な心理学者と同じである。

ヨウジョゴウカン ハンザイシャノ ナカ マタハ ソト

機械の外から先ずはのぞく。ザラ紙をのせた皿の奥に、引っ掛かっている一枚が見えた。引き抜いて、丸めてごみ箱に叩き入れる。

皿のザラ紙を持ち上げて、机の上で四方を揃え直した。髪の毛の引っ掛かりの原因は、紙の揃いの乱れからくることが多いのだ。人間も、やはり揃わなければならないのだろうか？

『reset』の文字を押し、もう一度『印刷』の文字を押し。機械はまた動き出し、カウンターの0と一緒に止まった。

刷り上がった一枚を、かたわらの箱の中に入れる。管理職が目を通す一枚なのだ。

残りを持って教室へ戻る。先ずは座って煙草に火をつけた。

教室の後ろに掛かっている時計の針が九時五十分を指している。腕時計に目をやると、一分遅れの時間だった。一分が人生の岐路を決めるような切迫した時間は、幸か不幸か持つてはいない。二時間目は、後三十五分、あるいは三十六分も残っているのだ。

残っているのに、煙草の吸い方が速くなる。教卓の上に子どもたちが積んだ漢字の宿題に丸をつけてしまいたかった。

まだ半分も残っている煙草を灰皿にこすりつける。見開きになって積まれた漢字練習帳の山を崩し、赤いボールペンを持った。使命感がボールペンを滑らせ、どんどん進む。

終わった。腕時計を見る。後二十分も残っているではないか。掛時計を見る。後十九分も残っているではないか。

今度は作文に赤ペンを入れる。サチコ以外の作文はなかった。三十人の子どもを六つのグループに分け、持ってくる曜日をグループごとに決めてはあるが、思うように集まらないのだ。

かな違い一本にしぼり、文字を拾って直していく。たたみかける文体や、せめぎ合う行をいじくりまわし、噴き上がるサチコの内部を削ぐことはできない。学級通信にも、かな違いを直しただけで載せたのだが、それもまた野生の肌に鈍傷をつけることなのかもしれない。オセツカ

イが身についたセンセイの仕事である。

最後のかな違いを訂正し、今度は励ましの言葉である。とても一言では書ききれないが、百言でも書ききれない。

すごいかんそうぶんをかいだね。こころがいっぱいつまっています。

ボールペンの動きが止まる。赤い文字が目染み、心に染みた。真つ赤な心がサチコのうなじを追っていく。産毛が目の裏で渦を巻いていた。渦は心を濁し、重たくする。体も濁り、そして重たい。

文字をあきらめ、鼻の穴に人差し指を突っ込んでみる。ぐるりとまわして、鼻糞をほじくった。そんなことで軽くなる体ではない。ティシュペーパーにこすりつけ、屑入れにほうり込むと、トイレにいった。

開け放したまま、釘で留められている入り口のドアだ。子どもの溜まり場とならないように、見通しをよくしたらしいのだが、大便所のドアだけはさすがに閉まっている。

鍵をかけ、尻を出して、重たい体を下におろした。小便がみみっちい音をたて、ウンコがこぼれ落ちる。今にも壊れそうだった朝の残りが、固くて太いわけがない。ウンコは一本につながらず、便器の底でバラバラに千切れていた。こんなものの排出では、体はやっぱり軽くはならない。尻を拭き、重たい手で水洗のハンドルを引き、ベルトを締めた。だらりと手を下げ、教室へ戻る。

壁の時計は十時十三分を指していた。腕の時計にも、また目をやる。一分遅れに変わりはない。後十二分か十三分、たっぷり煙草とつき合って、心と体を軽くしよう。

煙草に火をつけ、ゆっくりと吸う。無念無想。窓の外の青い空をただ黙って眺め続ける。

チャイムが鳴った。二時間目の終わり、十時二十五分である。腕時計はピッタリだ。掛時計はやはり一分先を示している。棚に足をかけ、針を直した。ケチな習性である。

足音が廊下に乱れた。教室の戸が勢いよく開く。

「ただ今！」

元気な声と一緒に、絵の具ケースを抱えた子どもたちが七、八人飛び込んできた。サチコの姿は見えない。

「先生、ぼくたち、もう描いちゃったんだよ」

「何を描いた？」

「お風呂の絵」

「チンポも描いたか？」

「うん、描いたよ」

「どんな形してるのかな？」

「見せてあげるよ」と、ベルトに手をかけたのはおチビのカズヤだ。

「いいよ、いいよ」と、あわてて手を振ったがもう遅かった。腰から膝へ半ズボンとブリーフを落とし、むき出しのチンポを突き出してよこす。女の子たちが悲鳴を上げて逃げだした。

「ぼくも見せてあげるよ」と、ノツポのハルノブが出す。

「ぼくも」

太った腹に手をやって、ヨシキも出した。

合わせて三つのチンポが攻めてくる。細く、しなやかに、艶を帯びたチンポたちは、つぼみのように尖っていた。まとめて言えばそうなるが、とてもまとめられるものではない。

人の先頭を取ろうとするカズヤのチンポは、ヒューンと長く突き出ていた。背は一番低いのに、チンポは一番長いのだ。

褒めると照れ、照れてたこになってしまいう心のひだを見せるように、ハルノブのチンポの先は念入りに縮れていた。

真ん丸お月さんのヨシキのチンポは、体のわりには一番小さく、遠慮深い。感心してはいられなかった。ここは白昼の教室である。

「やめてくれエーッ！」

逃げ出すと、チンポを突き出したまま追いかけてくる。廊下へ逃げると、三人は教室の中で女の子たちを追いかけはじめた。

「今日は、みんなで遊ぶ日だろう。そんなこと止めて、早く外へ行け！」

入り口から首を突き出して呶鳴りつける。「まだチンポの絵描いてる人いっぱいいるから、みんなで遊べないよ」と、カズヤが言う。

「よし、それじゃあ、自由遊びだ」

「ワッ！」と、三人は半ズボンを上げ、女の子たちは手を叩いて廊下に出た。集団遊びを喜ばない子どもたちなのだ。子どももまた、太い一本のウンコになりきることはできないようだ。

廊下の突き当たりの非常階段へ一人で向かう。看護当番に当たった者は、朝の登校指導の他に、二、三時間目の間にある二十分休みの見まわりをしなければならないのだ。放課後の見まわりもあった。

四年一組、四年二組と、教室の前を横目で通り過ぎる。教室は空っぽだった。つまらぬ注意をしなくてもすみ、心と足が軽くなる。はずみをつけて非常階段を駆け上がり、四階の廊下に足を入れる。

六年二組の教室で、女の子が二人、机をはさんで笑い声をたてていた。マンガクラブで一緒にやる顔なじみの子どもである。

「外へ出なさいよ」と声をかけると、「ナンデー？」と、言葉が返ってきた。言葉は一人のものだったが、にらみつけてくるのは二人である。ナンデー外に出なければならないのか、確かにそこが問題なのだ。春夏秋冬、雨の日以外は、外へ外への二十分休みである。

「図書委員会からお知らせします。今から本の貸し出しをするので、図書室にきてください」

校内放送が子どもの声をつたえる。二階の端の図書室では今日も客が少なく、図書委員の子どもたちは恨めしそうに校庭を眺め続けるのだろう。二十分休みには、本の貸し出しもおこなわれることになっているのだ。

「ナンデー？」

女の子の口調を真似、廊下をいく自分を問う。こうして働き、こうして生きる自分の意味を問いつめると、『ナンデー？』は、この世をひっくり返す言葉だった。

出発点の三階に戻る。二階も一階も、まだ巡視していないのに、足はもう下へはいかない。

三年二組の教室に近づくと、走りまわる子どもたちの音がした。黙って教室の中に入る。図工室から戻ってきた子どもたちが、思い思いの時を過ごしていた。

追いかけて合っている子ども。マンガをノートに描いている子ども。それを取り巻き、しゃべり合っている子ども。本を一人で読んでいる子ども。一つの本を読み合っている子ども。窓辺にたえずみ校庭を眺める子ども——思い思いの子どもたちを、同じ帽子、同じ体育着、同じ上靴、同じ教科書、同じページと、数え上げたらきりのない同じ同じの洪水の中に飲み込んでいるのである。

「先生、これ、いつくれるの?！」

教卓の椅子からサチコが叫んだ。そこから外れて追いかけていった十八人目の姿は見えない。数名の女の子たちがサチコを取り囲み、学級通信を読んでいた。

「三時間目がはじまつたら渡すよ」

「いいなあ、サチコちゃん。わたし、まだ一回ものっていない」と、サチコのそばで一人が言った。

「きつとのせるよ。みんなの作文をのせるのがセンセイの目標なんだから」

言いながら教卓に近づくと、椅子を空けて立ち上がったサチコの肩に、さり気なく手をかけた。肩のぬくもりが伝わった。歯止めをかけるように話しかけてくる子どもがいた。

「先生、先生、今日順番じゃないけど、作文書いてきていい?」

「ああ、いいよ。原稿用紙持つていきな」

「ワ―イ！」と、黒板の隣の棚に子どもが走る。

「わたしも、書いていい？」とサチコが言った。

「いいよ」

「ワ―イ！」とサチコが後を追う。

「わたしの作文の順番、金曜日だから、その時に書いてくるからね」

「わたし、月曜日」と、言い逃れる子どももいる。最後に残った一人の子どもは、「先生、肩もんであげようか」と、機嫌をとって作文から逃れた。

肩もみをはじめた子どもの後ろに列ができる。

「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」と、手の動きに、みんなは声を合わせる。十回もむと交代なのだ。

チャイムが鳴った。

「ありがとう。これで終わりにしよう」

「先生、わたしまだやってない」と、サチコが肩に手をかける。

「今度やつてもらうから」と邪険に立ち上がり、黒板に近づいた。

『しゅくだい かん字21 22 ページ』という文字が右の上隅に書いてある。黒板消しを取り、21と22を消した。チョークに持ち替え、23と24を書き入れる。それをメモ帳に書き写すことになっているのだ。

本意ではない。前の担任がそうしていたから、そうしてくれと、参観日に言われてしまったのだ。宿題一つ、頭の中に入れないようでは稗田阿礼が泣いてしまう。古事記が気に入らなければアイヌのユーカラでもいい。あれら口誦の人類の能力をお母さんたちは撲滅するのですか。

——そう言いたかったが、話の通じぬ相手には黙るより他なかった。

机に座った子どもたちが、国語の教科書、ノート、筆入れを出しはじめる。メモ帳を出す子どもたちは、いつも通り数名だった。

「今日はテストをやるから、教科書とノートはいらないよ」

「ワイー！」と声上がる。子どもたちはテストが大好きなのだ。

蛍光灯のスイッチを押し、やや暗い廊下側だけを明るくする。今日はじめての点灯である。節約は乏しい時代を生きてきた人間の習性なのだ。

「今日の係」と、それぞれの班の当番を呼ぶ。当番は先を争って、小走りに寄ってきた。

手に取ったのはテストではなく、学級通信だ。五枚ずつ数えて、六人の当番に渡す。六人目の子どもの後ろに、列がまたできていた。班の子どもに配り終え、再び戻ってきた当番たちである。テストが渡るのを待ちかまえてのことなのだ。予想を外して棚からつかんだのは原稿用紙だ。

「みんな座りな！ まだ挨拶してないよ！」

日直のミチヨの声が不意にとどろく。ミチヨにとっては不意ではなかった。不意なのは先生だ。授業のはじまりの掛け声をせっかく掛けようとしたというのに、挨拶抜きで、ずるずると三時間目に入っていくこうとする先生はルール破りなのだ。

「ごめん、ごめん」と、笑ってあやまる。直立不動で立ったミチヨは、笑ってくれなかった。

「ごめん、ごめん」と、今度はもう一人の日直にあやまってみる。あやまる前から、ヨシキはもう笑っていた。

「先に、作文の紙を渡してしまうから、一寸待ってね。今日はセンセイ、集まりがあつてさ、給食が終わったらすぐ出かけなくちゃ駄目なんだよ。だからさ、忘れない内に、渡すものを渡しとくからね。サチコさんの作文も学級通信に載せといたから、後でよく読んでおいてね。明日、上手だと思ったところをみんなに聞くからね」

ことわりを入れて、順番に当たっている子どもたちに原稿用紙を渡して歩く。赤ペンを入れた原稿も、サチコに返した。ニコツと笑ったサチコの笑顔を振り切つて正面に立つ。あちらこちらからおしゃべりが聞こえ、体のゆれも見られるが、まあ、ましな方である。早くテストにとりかきたいという子どもの意欲が口を閉ざし、おしゃべりの数を上まわっていた。

「姿勢をよくしてください！」

日直の二人の声も、意欲をのせてピツタリと重なる。意欲に押されて、おしゃべりは止まった。

「これから、三時間目の勉強をはじめます！」

子どもたちの頭が一斉に下がる。

「ナンデー？」と、六年生の子どもの声が耳元で鳴った。授業のたびに、ナンデおじぎを繰り返さなければならぬのだろうか？ 教師は芸人、子どもは客。客におじぎを強いるのは、どう考えてもおかしいのだ。

棚に近づき、業者から買った国語のテストの束をつかむ。当番の子どもが六人、また並んだ。机と椅子が動き、子どもたちは前後左右の間隔を広げ、テスト用紙を待っている。この素早い反応が、センセイの芸への反応ではないのが残念だ。顔も知らない人間が、知らない部屋で考えたテスト一枚への反応である。

芸で子どもを引きつけたことが、なかったわけではない。『うんこいし』がそうだった。鳥浜貝塚の糞の化石に引きつけられ、『うんこいし』という文章を子どもたちのために書いたのだ。鳥浜貝塚を眺めに出かけ、ウンコ石を展示する若狭歴史民俗資料館からは四冊の発掘報告書を買ってきた。それらを元に、こんな文章をザラ紙に印刷したのは、四年前のことだった。

うんこいし

ふくいけんの みかたこと いう みずうみに ながれる かわの きしで、おおむかしの うんこが たくさん ほりだされました。うんこは、つちの なかで、かたい いしにかわってしまい、もう、あの、くさい においは しません。でも、かたちと、いろは、いまの にんげんの うんここと かわりません。

ほんとうに にんげんの うんこなのだろうかと、だいがくの せんせいはい かんがえませんでした。ちうら みちこと いう せんせい です。

みちこせんせいは、じぶんの たべるものと おなじものを、じぶんの うちの いぬに たべさせました。じぶんのうんここと、いぬの うんこを くらべてみる ためです。くらべて みると、いぬの うんこには、たべものの もとのかたちが ほとんど のこって

いないのに、みちこせんせいの うんこには、さかなの ほねや、とうもろこしの かた
が のこつて いました。そして、はりだされた おおむかしの うんこにも、さかなの
ほねなどが はつきりとのこつて いたので、これは、にんげんの うんこに ちがいない
と、みちこせんせいは おもったのです。

みちこせんせいは、うんこいしを かたちで わけて みました。うんこいしは、6つの
かたちに わけられ、はじめ、ちよくじよう、しぼり、ばななじよう、ころじよう、ちび
じようと いう なまえが つけられました。

はじめと いうのは、うんこの ではじめの ところ です。ちよくじようというの
は、まっすぐな かたちと いういみで、はじめに つづいた ところ です。しぼりは、うん
この さいごの ところ です。うんこの さいごは、しぼりだすように するので、とが
つて います。ばななじようは、ばなの かたち、ころじようは、ころころした かたち、
ちびじようは、ちびの かたちのもの です。ちびの かたちになつたのは、やわらかい
うんこが くずれて、ちいさく、ばらばらになつて しまった ためです。

みちこせんせいは もっともつと、うんこいしの ことを しらべるつもりだったのです
が、びようきで しんで しまいました。まだ ³ ⁵ さいの おかあさんせんせい でした。
いま、うんこいしは、だれかが かわつて しらべて くれるのを まつて います。

うんこいしを しらべると、おおむかしの ひとたちの たべた ものが わかるのです。
おおむかしには、どんな きが はえて いたのかも わかるのです。きの かふんが、み

ずうみや かわに おちて ながれ、その みずを のんだ ときに、かふんが いっしょに おなかの なかに はいって、うんこに まじって でて くるからです。けんびきょうは、そういう かふんを うんこいしの なかから みつけました。

うんこいしが ほりだされた ところは、おおむかし、もう ひとつの みずうみが あって、その きしに ちかい ところ だったと いわれて います。おおむかしの ひとたちは、きしに ちかい みずうみの なかに くいを うち、その うえに いたを のせたようです。そこから、したの みずうみに うんこを したらしいのです。

みずうみの みずが なくなり、いつのまにか つちで うまつてしまった その ばしよを ほると、うんこいし ばかりで なく、うったままの すがたで、くいも でて きました。まるきぶねも、でて きました。くいの ばしよは、ただの べんじよ では なく、まるきぶねを つないで おく ばしよでも あったのでしよう。

にんげんは、うんこを します。いぬも、うんこを します。うまも、うしも、うんこを します。にんげんも、いぬも、うまも、うしも、どうぶつ なのです。

発掘報告書からコピーした写真や図も入れた。鳥浜貝塚の位置図、三方湖の写真、六つの形に分類したウンコ石の写真、縄文時代の鳥浜の想像図、そして発掘された杭の写真である。

相手は二年生の子どもたちだった。五月のことである。五月といえ、二年生になったばかり。漢字まじりの教科書を読み通すことができない子ども中にはいた。ひらかなばかりの文にしたのは、そのためである。

文は先ず、センセイが読んで聞かせるか、リレー方式で子どもに朗読させるのが学校では普通である。普通のやり方は取らなかった。はじめから、自分一人の力で読み通してしまわせたかった。

子どもたちの目が一斉に文字に食い入る。一番勉強のできなかったヒロユキは、指で文字をたどりながら目を動かしていた。目だけでは足りず、つぶやくように声を出して読んでいる。彼にとっては、生まれてはじめて、独力で文を読み通した日になったのだ。

一ヵ月ほどして、運動会があった。運動会の後のPTAの慰労会で、「先生、ウンコ石はよかったなア」と、ビール瓶を片手に隣に割り込んできたのはヒロユキの父親だった。

「学校のことなんか、何んもしゃべったことねえのに、ウンコ石のこと、しゃべってしゃべって、寢床サ入っても、まだしゃべくるんだもん。なあ、先生よオ、おれ、牛飼いしてるからよく分かるんだ。ウンコってのア、大事なもんだよ。ウンコ見れば、牛の体具合ピタツと分かるんだ。ウンコ見て、牛の餌の調合考えるんだからな。ウンコを馬鹿にすれば駄目なんだ。ヤー、よかった。ウンコ石は、ほんとによかった」

「クニコも、帰ってくるなり、ウンコ石のプリント見せてくれましたよ」と、向井の席に座っていた母親が口をはさんだ。やはり牧場の家庭である。「おかしいのはね、クニコったら、ウンコ石を作るんだといって、牧草地の隅っこにウンコをしたんです」

笑い声に囲まれて、母親の言葉は普段着になった。

「ウンコサ、パラパラって土かけてね、早くウンコ石にならないかなあって眺めてるんだからア。」

だから、わたし言ったんだ。何千年もたたなきゃウンコ石にならないよって言ったら、じゃあ誰のものか分からなくなるねってクニコが言ってる。そしたら、家の父さんがまた悪い父さんなの。名前書いて、札立てればいいべってからかってさ、クニコったら本気になってしまったて、木端拾ってきて、マジックで書きはじめたもん。このウンコ石はテラダクニコのものです。ごていねいに、年月日まで書き込んでしまつてさ。まだ木の札、倒れないで牧草地に立つてるんだからア」爆笑をしながら、心はふるえていた。目の前で一緒に笑うクニコの母はアイヌである。名を残すなどという立志の思想からはるかに遠く、祖先の墓標は近くの丘にひっそりと立っているのだ。

名を刻んだ墓石の並ぶ墓地の奥で、墓標は雑草に囲まれている。エンジュやドスナラの皮をはいで立てた墓標は、歳月にさらされて痩せ細っていた。死者の性別だけを示す墓標である。墓標の先端が尖っていれば、それは槍をかたどった男性のものであり、穴を持った丸い頭があれば、それは針をかたどった女性のものなのだ。朽ちて欠け、丸い頭になってしまった槍もある。頭を通す割り穴が葬儀のために開けられたものか、歳月のために開けられたものか、見分けのつかない墓標もあった。……

テストを持って真つ先に立つてくるのはミチヨだった。できた順に丸をつけ、間違つたところはやり直す。全部できたら自習をするというやり方で、テストの時間を過ごすことにしているのだ。

床を走る足音がする。テストを片手にひらめかせ、走ってくるのはカズヤだった。気づいたミチヨも走り出し、足音が重なった。

「セーフ！」

カズヤの声が鼻先で響く。教卓の上に両手を伸ばし、倒れ込んだのはカズヤなのだ。一番乗りを取られてしまったミチコの頬が、カズヤの後ろでふくらんだ。

二人の列が三人になり、四人になる。黒板の長さに沿って並んでしまうと、列の中におしゃべりがはじまった。

「こらっ、うるさい！」と呶鳴りつけ、おしゃべりを押さえるが、すぐに元のざわめきがくる。自習の子どもたちも席から離れ、かたまりを作って騒ぎはじめてきた。三時間目は、終わりに向かって近づいているのだ。腕時計を見ると、十一時二十七分だった。残り時間は三分である。

机の上に開いて置いた教務手帳に目をやる。今日の点数が並ぶ欄の、まだ書き込まれていない空白は一つだった。サチコの欄である。

「後三分」

時間を教えると、サチコがあきらめて立つてきた。

丸は半分もつかない。教務手帳に点数を書き込むと、「ア、ア、ア、ア」と、サチコはあごを前後左右にゆさぶってくやしがつた。

チャイムが鳴る。

「これを見て書きな」と、解答は赤で刷り込んだ紙を渡すと、サチコは微笑みながら受け取った。ミチコとヨシキが立ち、終わりの号令を掛けるきっかけを待っている。悪いけど、出番はない。サチコはまだ終わっていないのだ。

「机を元に戻しながら、オシッコにいつといで！」

大きな声でみんなに言う、一斉にみんなの体が動いた。

「先生、できた！」と、サチコが小走りにやってくる。丸をつけ、はじめの点数を二本の線で消してやった。100と大きく書いてやると、「ヤッター！」と叫び、飛ぶように自分の席へ戻っていった。机の上にテストを置き、オシッコに走っていく。

五分間の休みは終わり、四時間目のはじまりを告げるチャイムが鳴った。

「姿勢をよくしてください！」

ミチヨが声を張り上げると、ヨシキはあわてて立ち上がった。子どもの心は、まだ四時間目に切り替わっていない。教室の中は、おしゃべりの花が満開だった。百点のテストを両手でつかみながら、サチコも花の一つである。花々がゆれ、言葉の花粉が飛び交っていく。花粉を受けて実がふくらみ、種がはじけると、新しい話題の芽が、たちまち花を結んでいく。四季はめぐり、子どもたちは輝いていた。輝かないのは、言うことを聞いてもらえない日直だ。

笑顔で二人に視線を送り、両手を軽く前に出す。出した両手を沈めると、二人は顔を見合わせながら座った。

算数の教科書を開きながら、黒板の前に立つ。チョークを持ち、ページを確かめると、横書きに文字を書いた。

37ページのれんしゅうもんだい①をノートにやりましょう。やった人はドリルのわりざんのもんだいをやってください。やりかたのわからない人は、いつものように先生のところ

聞きにきてください。

チョークを置いて、花の中を歩いていく。花の肩に手をふれて、黙って黒板を指すと、花はしばみ、下がった頭が机の中をのぞき込む。教科書、ノート、そして筆入れを取り出す音が教室の中につたわっていった。

つたわる音に気づかないサチコのおでこを指ではじくと、手品のように舌が飛び出す。湯気の出そうな赤い小さな肉がかわいかった。食べてしまいたい彼女の舌である。

自分がまた外れようとする。ゴクツとつばを飲み込んで、外れる力を押し戻した。心を押し込め、表情を押し込める。外れずに済んだ十九人目の自分は、硬い表情で教卓に戻り、空を眺めた。

「先生、分からない」

サチコの声が耳元でする。教卓の上にノートを置く彼女の手があった。∞+∞という式だけが、ノートに書かれてある。パソコンのように無表情で教えはじめると、二人、三人と、続いて出てくる子どもたちがいた。

何日かかけてやった問題の繰り返しが始まる。一つ教えて席へ戻し、次の子どもにまた教える。分からなかったら何度立ってきてもいいのだが、パソコンになりきれる人体ではなかった。嘆声も出れば。歓声も出る。そのたびに表情は変化し、グリコーゲンは酸化する。体が火照り、こめかみが痛かった。

疲れることは、いいことだ。センセイの疲れは、子どもの疲れの証拠である。赤信号のサインを感じて、計算に疲れた子どもたちのおしゃべりが、あちらこちらではじまっていた。

腕時計を見ると、十二時十五分だった。給食の時間まで五分あるが、一時四十分までには北千住へいかなければならない。区教研は国語部会の文学散歩に出てみようと思っていたのだ。

「みんな、大分わかってきたぞ。続きは、また明日やるからね。今日はこれで終わりにしよう」ノートを持って並んでいる子どもたちに声をかけると、掌でメガホンを作って、教室のみんなに言った。

「後五分あるけど、給食にします！ まだ他の教室では勉強をしているので、声を出さないで準備してください！ 分かった?！」

「ハイー！」と、みんなの声が教室にとどろいた。

人差し指を唇に当て、みんなの声を止める。声は止まったが、机を動かす音がとどろきはじめた。黒板を向いて並んだ机を五人で向き合う形に変えるのだ。

「なるべく静かにね」と注意の言葉は口から出るが、顔は笑っていた。終わりの挨拶はまたもや省きだが、ミチヨもヨシキもニコニコ顔で机を動かしている。

白衣を着た給食当番が働き出す。カレーが匂う配膳台から、サチコが走ってきた。

「先生！ わたしのこと、バイキンって言って、やらせてくれないんだよ！」

「誰だ！ そんなことを言うのは！」

椅子から立ち上がり、給食当番に詰め寄る。

「誰だ！ バイキンって言ったのは誰だ！」

「ぼくじゃないよ」と、男の子の声が一つする。

「ぼくじゃないよ」と二つ目の声が続き、残った子どもはカズヤにミチヨだ。

「お前か?!」と指を差されたのはカズヤだった。

あわてて首が横に振られる。隣のミチヨのうるんだ目が氣勢をそいだ。

「先生、サチコちゃんも悪いんだよ。無理矢理、カレーをやろうとするんだもん」と、カズヤは真相に迫る第一声をさきがけた。

「あんた方なんか、いつつも好きなものばかりやってるでしょう。一回ぐらい、わたしにさせてくれたっていいでしょう」と、サチコは負けない。

「どうしたらいいか、給食当番で考えなさい」と言つて教卓に戻る。給食のチャイムが鳴った。五分早めた給食だが、何の役にもたつていない。

椅子に座つて眺めていると、子どもたちの話し合いがはじまった。かたまりが崩れ、カズヤが真つ先にやつてくる。

「先生、決まりました」

「どう決まった?」

「ジャンケンして、勝った人から、好きなものをやるの」

「よし、いい考えだ。上手に話し合つて偉かったぞ。仲直りも忘れないでね」

「ごめんね」と、ミチヨがサチコに言った。

「ごめんね」と、サチコがミチヨに言う。

「仲直りもできたし、よかった、よかった。じゃあ、ジャンケンしてやりなさい」

配膳台へ給食当番は戻っていく。ジャンケンの声が響いた。席を立つて群がっていく子どもたちの姿で、ジャンケンの手は見えなかった。

「みんな戻りなさい！」

子どもたちが散らばったのは、センセイの大声のせいではない。ジャンケンが終わったからだ。運がよく、サチコはカレーのルーをかける係だ。御飯の盛りつけはミチヨになる。福神漬を添える子ども、冷凍みかんを渡す子ども——牛乳を渡すカズやは、もうみんなの席に牛乳瓶を配って歩いている。

列ができ、お盆とスプーンを取った子どもが配膳台の前を流れていく。センセイの給食をお盆にのせてサチコが運んできた。量は子どもと同じである。胃袋が悪いセンセイの適量を子どもはもう知っていた。

「姿勢をよくしてください！」と、ここでまた日直の出番がくる。ヨシキの声が、ミチヨの声より高く響いた。

カレーライスを前にして、子どもたちのざわめきはすぐにおさまった。

「いただきます！」と、ヨシキの聲がはずむ。元氣のないミチヨのことが気がかりだ。

「いただきます！」

みんなの声と一緒に、スプーンを持つ音が鳴った。

空になった食器と牛乳瓶を前にしてみかんとむきははじめたころ、一足お先に自分のお盆をかたづけ出す子どもがいる。かたづけた足で近づいてくるのはサチコだった。

「先生、ミチヨちゃん、ナプキンを何枚も持ってきてるんだよ」

「ふうん」と、みかんの房を飲み込んだ。

「いいの？」

「いいんじゃない？」

解せぬ顔でサチコは立ち去る。頭の中を一拍遅れで考えがめぐった。

「ミチヨちゃん、一寸！」と、まだ食べ終わっていない彼女を呼ぶ。

「ナプキン、何枚も持つてるんだって？」

「はい」

「一寸、見せてくれない？」

紐で締まった袋をぶら下げ、ミチヨがまたやってくる。袋を開け、中に詰まったナプキンを彼女は取り出した。様々なデザインで彩られたナプキンが次々に現われる。全部で五枚だ。給食盆に敷くためのナプキンは、一枚あればたくさんである。だがコレクションは、一枚では成り立たない。成り立たないからといって、ここでコレクションを認めてしまえば、真似る子どもが続々と現われるだろう。教師根性が鎌首をもたげる。

「あのね、みんなが真似てね、お母さんに、ナプキン買って、ナプキン買って言うて困るでしょう？ だからね、学校には一枚だけ持ってきて、後は家に隠しておきなさい。分かった？」

言い含めると、ミチヨはうなだれて席に戻った。その向かいで、小気味よさそうに視線をやるのはサチコである。

給食終わりのチャイムが鳴った。一時である。後四十分で北千住に着かなければならないのだ。歩く時間も入れるなら、二十分は欲しかった。いや、はじめての場所だから、三十分は欲しいところだ。看護日誌も書いていかねばならないのだから、掃除をする時間は残っていない。帰りの会も、できるはずがなかった。みかんの房を次々に口の中にほうり込む。

掌でメガホンを作った。

「今日は掃除はありません！」と先ず叫ぶと、歓声が上がる。「ごちそうさまも省略します！ すぐに給食をかたづけて、さよならだけして帰ります！ センセイは一時四十分まで北千住に勉強にいかなきやならないので、すぐにかたづけてください！ 勉強道具より先に給食当番を手伝ってください！」

配膳台に子どもたちが群がる。センセイのお盆をかたづけてくれるのはカズヤだった。ランドセルを配って歩く子どももいた。

一早くランドセルを背負ってヨシキが前に出てくる。遅れて出てきたミチヨの動きは相変わらず元気がなかった。

「さようなら！」

みんなの前で挨拶の言葉をかけるヨシキの声は元気だが、ミチヨの唇は動かない。

「さようなら！」

みんなの声がとどろき、戸口が混み合う。

「ミチヨちゃん！」と、彼女の背中に声をかけた。ミチヨが振り返る。

「明日も元気で、また会おうね！」と言いながら手を振ってやった。笑いを作ってうなずいてくれたが、言葉はない。

子どもがいなくなった教室の窓をあたふたと閉めた。床のあちこちに鉛筆や消しゴムが落ちている。手つかずのティシュペーパーの袋もあれば、引き千切られたノートの紙も落ちてゐる。

「しまった。ごみを拾わせるんだった」

舌打ちをして、ロッカーから箒を取り出し、大急ぎで床の上を掃きはじめた。

落とし物をごみから選び、教卓の上にのせる。残ったごみをかたづけると、今度は机の乱れが気になってくる。

「ほんとに、こういう子どもだろう」

つぶやきながら机の乱れを直し終わると、腕時計は一時十三分を指していた。

煙草とライターのシャツのポケットに入れる。ごみになったノートの紙を屑入れから取り出し、吸殻を包んで捨てた。

蛍光灯のスイッチを切る。壁にかけた名札入れが目に入った。下校をする時には、胸の名札をそこに戻すことになっているのだ。名札をつけて家に帰ると、山谷のアヤシイオジサンに名前を呼ばれてしまうという理由からだった。

三分の一は戻っていない名札である。戻さないで帰ってしまうと、なくしてしまう子どもが多い。抜き打ちの点検がおこなわれるかもしれない全校朝会は五日先のことだった。心配は後回しにしよう。

廊下に出て、階段を飛んで下りた。小走りで職員室に入り、机の上の看護日誌を開きながら椅子に座る。ボールペンを持ち、月日と曜日、天候を書き入れた。

続く欄の頭には『登校時』という文字が刷り込まれている。前の日の欄に目をやると、『登校時が元気よくできていない 帽子をかぶってこない子が2人いた 8時25分過ぎの登校は6名』とある。校長が引いた赤鉛筆のアンダーラインが、文の全てに沿って伸びていた。

『登校時が元気よくできていない』と、前の日の文の中から一つだけ選んで書いてしまう。外れていった七人の暴力の意味を問いつめながら書いていく時間もなければ、それだけのスペースも持たない看護日誌だ。問いつめることを拒むような赤鉛筆の使い方でもあった。

前の年の一学期の終業式の日、たまたま看護当番に当たった。驚くほどの元気な声で子どもたちの挨拶が響き、その日の日誌は自分の言葉でスラスラ書いてしまったものである。『休みを返える子どもたちの挨拶の言葉は はずむ足 にこやかな顔と一緒に四つ辻に響き 空高くこだました』

校長はただの一字にも、アンダーラインを引いてはくれなかったのだ。

続く欄は『帰校時』だ。他人の文を読むのも面倒になってくる。『比較的高い声で話しかけてきた』と無難な答えにまとめると、次の『帰校時』を考えた。

『ほとんどの子どもが外で元気よく遊んでいた』と書いてしまい、『放課後』の欄にボールペンの先をやる。

これは簡単。『区教研参加のため放課後の見まわりできず』で済ませてしまおうが、最後には『所

見』という欄が待っていた。所見などという大それたものを書ける力は持っていない。『特になし』とかたづけて、印鑑を押す。

日誌を閉じ、教頭のところに持つていった。「日誌をここにおきます」

「ご苦労さまです」

この学校のセンセイとの、今日の言葉のやりとりは、これで何回目になるのだろうか？ 一回目は十七人目の朝の挨拶。同じ十七人目の校長への文句が二回目のやりとりで、十九人目の今のやりとりは通して三回目だ。

教頭の後ろにまわり、黒板に張つてある区教研の開場一覧表に目を近づける。眼鏡を額に押し上げて眺めた。

もう大方のセンセイが出かけてしまった後らしく、鉛筆書きの名前がたくさん書き込まれている。ほとんどの名前が体育の欄を埋めていた。秋の研究会に備えて、みんなの心は体育についているのだ。文学散歩の国語には誰も名前を書いていなかった。

チョーク受けに置いてあつた鉛筆を取る。やましさに逆らい、国語の欄に名前を書いた。

黒板に並んで校長室のドアがある。閉め切つたドアの前を通りながら耳を澄ませた。声が聞こえる。テレビの声だった。話題にも取り上げられない十八人の自分は、今頃どこでグツタリしているのだろう。

机に戻り、鞆を取る。名札を裏返し、「失礼します」と教頭に言った。

「ご苦労さまです」と言葉が返り、言葉の交わり合いはもう一度だけ残っていた。

尿意がうずいている。まだ我慢はできそうだが、トイレには寄らず、階段を跳ねて下りる。靴を履き替え、歩き出した足取りは、気ぜわしい東京人のものだった。

校門の内側に並んだ小公園から怒声が聞こえてくる。金網が張られ、樹木の茂る小公園の怒声の主は見えなかったが、確かにそれはなじみの声である。

歩調をゆるめ、入り口から中をうかがう。怒声の主は、やはり自分だった。呟鳴りまくる自分の前には、うなだれたミチヨが立っている。しゃがんでいるのはサチコだった。サチコは足をさすっている。

「どうして足を蹴飛ばしたかって聞いてるんだ！」

問いつめるのは野暮である。盛りつけのトラブルでせっかく先にあやまったのに、ナプキンのコレクションでチクられた彼女なのだ。

止めに入ろうかと思った瞬間、それをはねのけるように一際高く怒声が響いた。

「往復ビンタだア！」

掌を頬に浴びてミチヨが倒れる。倒れたミチヨの襟首をつかみ、引きずり起こすと、掌はまた彼女を襲った。

勢いあまった掌が、かたわらの低い木の枝を払ってしまう。枝がゆれ、花の匂いが散った。白い色を裏に見せて、花びらの表は紫色に光っている。紫木蓮だった。

掌の音がまた響く。サチコの守護神になってしまった十八人目の掌の音は、十九人目も狙うかのような激しい勢いだった。

逃げ出す。逃げ出して校門から飛び出す。飛び出しながら、腕時計の日づけに目をやった。間違いない、今日は母の命日だったのだ。

出棺の日、柩を取り巻く人々の後ろをうろつきながら、身の置き場所に困っていた息子だった。柩のふたを開く音が体を縮ませた。

「ワーツ、奇麗な……」

一斉に起きた嘆声に、縮んだ体を思わず爪先き立てると、紫木蓮の着物の柄が目を捕らえた。「坊や、お別れをするんだよ」

気づいた祖母が近づいてくる。恐怖にはじかれ、縁側に走り出すと、はだしのまま庭に飛び下りた。庭半分をドブ川が流れ、それをおおうドブ板は腐り、なくなっている。

下駄を突っかけた祖母の姿が迫っていた。ドブの向こうはお屋敷の塀だ。割り竹を組んだ高い塀の隙間から紫木蓮が匂っている。破れかぶれになった体は、ドブの中に飛び下りていた。……

朝と同じ道なのに、亡者を目に入れるゆとりはない。目を占めるのは、記憶の中の紫木蓮だ。紫木蓮をかき分けて信号機の色が現われ、券売機のボタンが現われる。改札口を通り、『手洗所』という文字が現われた時、電車の音がした。

手洗所を後ろに捨て、ホームへ走り出す。込み上げるものをこらえながら、ガラ空きの電車に乗った。

紫木蓮が込み上げ、ビンタが込み上げ、尿意が込み上げる。三つ巴の渦の中から尿意一つが浮き上がり、肉を叩いた。

両足を踏んばってドアに立つ。マンシヨンの洗濯物が旗のように励ましを送ってくれた。

電車は隅田川にかかる鉄橋を渡った。暗い川の色は、こらえる力を削いでいく。目をそらして岸を呼んだ。岸のマンシヨンの洗濯物が再び現われ、電車の動きはゆるくなった。

聞いたドアから、棒のように固く下りる。うなりながら階段を昇り、左右を見まわすと、『手洗所』という文字が光を抱いて輝いていた。

チャックを下ろし、肉の先をつまみ出す。しびれるような快感が肉を貫き、激しい音が耳を叩いて体をめぐった。この世の不満や鬱積をこんなふうに出すために、外れていった自分もいるのだ。

チャックを上げ、腕時計を見ると、集合時間にはまだ八分も間があった。

「なあんだ」と、いつものペースで歩き出す。

改札口の外は蛍光灯の光が重なり、ガラスの向こうに色とりどりの商品が咲いていた。頭の上では案内の文字が光っている。『旅行センター』という文字を見つけ、左側の階段を外に下りる。

集合場所の旅行センター前では、プリントを抱えた女性を囲んで数人がおしゃべりをしていた。参加者名簿に名前を書き、煙草をくわえながらプリントに目を通してしていると、人の集まりは二倍三倍に増えてくる。

駅ビルが見下ろす広場のわきを通り、文学散歩の一団は出発した。散歩という言葉にはほど遠い東京人の足の運びである。遅れぬように先頭近くを歩いていても、いつの間にかビリになってしまうのだ。

風でゆれるのれんが顔に当たる小路を通り抜け、最初に着いたところは金蔵寺という寺だった。

「エーッ、よろしいですか。それでは一寸、お話します。千住宿は江戸の入り口で、北千住には本宿と呼ばれる宿場があり、南千住コツ通りは下宿と呼ばれていたんです。で、旅籠——旅館のことですね。この旅籠には、一軒で、飯盛女を二人おくことが許されていたんです。ハイ。飯盛女といってもですね、飯を盛るだけじゃありません。遊女なんです。で、この遊女と遊ぶの目的に、江戸市中からも人がやってきました。旅人が泊まる数よりも、実際は、こういう客の方が多かったんです。で、この左側の石碑は、そういう飯盛女の供養のために建てられたものなんです。ハイ」

研究家が説明をはじめている。石碑を囲む人々の前には、南無阿弥陀佛と刻み込まれた石が建っていた。石は黒々と恨みの色でくすんでいる。その右には、お地藏さまをはさんで、無縁塔と刻み込まれたもう一つの石碑があつた。

「エーッ、それからですね、この右の方——これは天保の大飢饉の時のことなんです、食うに困った地方の人たちが、江戸にいけば何とかなるだろうということで、日光街道を南に南にと上ってきたんです。で、この千住宿にたどり着いた途端、疲労と空腹、そしてここまで来たという安堵感のためなんでしょうか、バタバタと死んでしまつたんです。そういう名前も分からない人たちを供養するために建てられたものなんです。ハイ」

江戸へ江戸へと上ってきた人たちが、ここにもいたのだ。心の飢え、立身出世のためではない。生身の飢えで痩せ細った足を引きずり、江戸へ向かった無名の人々である。

次の見学場所へ移るために、文学散歩の群れは動きはじめ。

無縁塔に近づき、石の表*単行本では面に掌を当てた。日の光を吸った石は、人肌のようなぬくもりをつたえていた。

飯盛女の供養塔にも掌を当ててみる。石のぬくもりが同じようにつたわり、あたりの空気がゆらいでくる。ゆらぎながら、亡者の姿が立ち現われる。窪んだ目、突き出た頬骨、たるんだ皮膚、痩せ細った四肢、はだけた胸の浮き上がる肋骨——髪が抜け落ちた頭を右手でおい、膿で崩れた顔を左手でおおうのは、梅毒に侵された飯盛女だ。

「二朱」

梅毒の傷から右手を離し、揚代を求めて突き出してくる。

「飯」

かすれた声で突き出てくる手が交わり、掌がひしめいていた。体がすくむ。

ゴキッ！

すくんだ自分の背中を割って逃げていくのは、二十人目の自分である。

道の角を曲がると、説明はもうはじまっていた。ガラスで囲まれた三階建ての都税事務所には、もったいなくも一面に蛍光灯の光が目立ち、植え込みの小さな金属板の説明は目立たない。

植え込みに沿って走る車を避けて、みんなは道を隔てた家の前にかたまって研究家の話を聞いていた。かたまりには入らずに、説明板に近づいていく。これもまた、都へ向かってやってきた

人間の跡なのだ。

橘井堂森医院跡

鷗外の父森静男は、元津和野藩亀井公の典医であつたが維新後上京し、明治十一年南足立郡設置とともに東京府から郡医を委嘱されて千住に住んだ。同十四年郡医を辞し橘井堂医院きつせんどういんをこの地に開業した。鷗外は十九歳で東大医学部を卒業後陸軍軍医副に任官し、千住の家から人力車で陸軍病院に通つた。こうして明治十七年ドイツ留学までの四か年を千住で過した。その後静男は、明治二十五年本郷団子坂に居を移した。

昭和六十年三月

東京都足立区教育委員会

『きつせんどういん』というふり仮名の四つ目の文字を鉛筆で書いた×がおおっている。これでもか、これでもかというように線の行き来は重なり、太かつた。その隣には同じ鉛筆で、『いと訂正の文字が入れてある。』

「鷗外か」と、つぶやきが出る。陸軍軍医総監、皇室博物館長、帝国美術院院長、文学博士にして大文学者の鷗外相手のつぶやきは、鉛筆のようなものである。そして鉛筆にも、首を傾げる力はあるのだ。

鷗外よ、あなたの遺言はぜいたくだつた。『余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍省縁故アレドモ生死別ルゝ瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辭ス』というあの遺言は、どこの誰とも分からぬ姿で死んでいった天保の行き倒れ人から見ると、ぜいたく極まりないものなのだ。『墓

ハ森林太郎墓ノ他一字モホル可ラス』と述べるあの遺言は、源氏名のまま死んでいった女たちから見るならば、ぜいたく極まりないものなのだ。

早足がまたはじまり、広い通りに出る。堀が流れ、千住小橋がかかっていた場所である。堀は地下の排水路となり、橋の代わりは横断歩道だ。

道を渡り、ひなびた商店街に行く。旧日光街道である。人の流れはほとんどないが、地の利を知った運転手たちの、ここは抜け道になっていた。我が物顔に車が走り、人間は狭い道の隅っこに追いやられる。

視界が開け、千住大橋の青いアーチが見えてきた。旧街道を飲み込んで、広い通りが大橋めがけて伸びていく。橋のたもとの小さな公園に、芭蕉の句碑は建っているのだ。

「なあんだ、ここか」とつぶやきながら句碑に近づく。橋の向こう側までやってきたのは、つい先週のことだった。家庭訪問週間だった。クラスの子どもの一番遠い家は、向こう側の橋のたもとに近かったのだ。

茶色い自然石にはめ込まれた黒御影に『おくのほそ道』の旅立ちの言葉が刻まれている。

千じゅと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なをすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄と見送なるべし。

碑を囲んだ群れはほどけ、ベンチに休んでいる。

立ったまま、煙草に火をつけた。煙がゆらぎ、思いがゆらぐ。ゆらぐ思いを見つめっていると、出発の声がかかった。

「アノー、用事がありますので、ここで失礼させていただきます」

責任者にことわって、公園に居残る。人の消えたベンチに座り、煙にゆらぐ思いの姿を見つめ続けた。

まゆはきを俤にして紅粉の花

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

石山の石より白し秋の風

涼しさやほの三か月の羽黒山

旅の中で、芭蕉は花を詠み、鳥を詠み、風や月を詠んだ。おくのほそ道に旅立った元禄二年から、ちょうど三百年の今年である。芭蕉を讃える行事は各地で計画され、日本の心の具現者としての彼の業績は定まっているかのようである。

元禄二年から二百三十三年たった大正十一年、知里真志保の姉、幸恵は、日本の心に充ち満ちた美しい文章を書いている。ローマ字書きのアイヌ語に、日本語の対訳をつけた『アイヌ神謡集』の序文に、彼女は花鳥風月を見事に散りばめているのだ。

冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べて

ひねもす魚を漁り、花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に轉づる小鳥と共に歌ひ暮して
落とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすゝきをわけて、宵まで鮭とる簞も消え、谷間に友
呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ。嗚呼何といふ楽しい生活でせう。平和の境、それ
も今は昔、夢は破れて幾十年、此の地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第々
々に開けてゆく。

序文の中の『花咲く音』という言葉を考えてみよう。アイヌは、花の美には心を惹かれなかつた。福寿草の花を『チライ・アパツポ』と呼ぶ地域があるが、これは『イトウの花』という意味である。福寿草が咲くと、イトウという魚が川に上ってくる。そろそろイトウを食べられるぞという漁期を知らせるものとして花はあつたのだ。アヤメの花は『イチヤニウ・アパツポ』、『鱒の花』と呼ばれる地域がある。鱒漁の準備を告げる花なのだ。

『永久に轉る小鳥』はどうだろう。『永久』に当てはまるアイヌ語はない。あえて当てはめれば『ランマ』かもしれない。『いつも』という意味があるからだ。しかし、『普段』という意味もある。『ランマ』は日常なのに、『永久』は日常を越えた厳かな觀念なのだ。アイヌにとって、厳かなものは日常を越えてはいない。日常に交わっている。チライ・アパツポも神であり、鳥もまた森羅万象、無数の神の一つなのだ。

『涼風泳ぐみどりの波』を考えてみよう。『涼風』と『みどり』は対になり、さわやかさを広げてくれる。海だけではなく、地上の森のみどりさえも言葉は飲み込み、広いイメージをもたらしてしまうのだが、そういう美意識は花同様にアイヌから遠く、『みどり』にピッタリのアイヌ語もな

いのだ。

あえてアイヌ語は当てはめるなら、『シウニン』だろう。青も、青っぽい紫も、青っぽい黄も、みんな一まとめに、アイヌは『シウニン』と呼んでいたのだ。赤、赤っぽい紫、赤っぽい黄は、一まとめにフレだった。白はレタル。黒はクンネ。これら四つの色名で世界は識別されていたのである。食べられる色なのか、食べられない色なのかの識別。嵐がくる色なのか、こない色なのかの識別。死人の色なのか、生きている色なのかの識別——識別されない世界の謎は神々の手にゆだねられていた。

『円かな月に夢を結ぶ』はどうだろう。円かな月に象徴される夢は、勿論、悪夢などではなく、のどかな夢である。だが、のどかな夢を見たことを人に語るのは、アイヌのタブーなのだ。人に語ると、せっかくの平安を逃してしまうと言われ、反対に、悪夢は直ちに家人に告げ、笹や蓬の葉などで体を叩いて清めてもらうことになっていた。そのため、アイヌの日常語では『夢』を全て『ウエン・タラプ』、『悪夢』と言い、良い夢に悪魔が近づかないように配慮したのだ。

知里幸恵の日本語の、ほんの少しだけを考えてみても、アイヌである彼女が、アイヌの世界から遠ざかった場所でアイヌの世界を語っていることが分かってくる。彼女が語っているのは、もはやアイヌの世界ではないのだ。花鳥風月の日本語は、こうしてアイヌを変えてしまった。

ベンチを立ち、句碑の奥の公衆便所に足を運ぶ。犬のように匂いを残していきたかった。赤い舌をたれ、荒い息を吐きながら、何度でも帰ってこなければならぬ、ここは贖罪の場所のようだ。

卑小な犬の小便は細く、すぐに止まった。それでも力みを何度も入れる。力みのたびにたれる小便は点滴のようだった。そんな点滴で救われるものは何もない。

縮んだ姿をいたわるように中へ隠す。チャックを閉じ、棚においた鞆を持つと、人間の顔をよそおって公衆便所を出た。

腕時計は三時になるところだった。橋を渡ってコツ通りを歩けば、南千住駅までは十分ほどのはずである。

橋のたもとに足を止めて振り返る。車の流れが目を走り、車の音が耳を走った。目をしばたたくと、後ろ姿が二つある。お伴の曾良＊曾良を従えて、歩いていくのは芭蕉だった。

川風にゆれる裾の音が耳に届く。車の流れも、車の音も不意に消え、代わって聞こえるのは芭蕉と曾良の衣の音だけではなかった。江戸へ江戸へと上ってくる飢えた人間の音も聞こえるのだ。痩せ細った素足の引きずり・かすれきった喉の呼吸。末期に向かつてうごめき続ける人間の流れに逆らい、芭蕉と曾良は歩いていく。飢えを踏み、屍を踏んで、花鳥風月の道を歩いていくのだ。

飢えは人間の日常だった。北の果ての南部藩では、三百年の江戸時代に七十六回の凶作、飢饉に襲われている。南部藩大畑村の百姓がお上に差し出した愁訴の文面はこうだった。

乍恐条数奉願上候事

一個物四十文米三十文新役の事

一海草並魚油増役之事

一鰯並に糟鱻一手買之事

一濁酒並他領酒増役之事

一鯛絞糟廿分一新役之事

右箇条並に新役立何卒御赦免被成下度様奉願上候必竟酉戌兩年凶作当年に至雜穀喰尽蕨根海草等にて相凌罷在候得は重立候方より救之合力並に当秋入引当に仕借受等も頼見申度候得共近年莫大之分限割其丘御時節柄之御事故商役等も被仰付罷在候て市中取引不通に成行候得ハ其義も出来申間敷殊更材木類桎等も前代未聞之下直侯て御山筋之者も面倒候二付杣働之者共難洪に及漁稼之者共は一手買入二て窮迫尚又北地雇入之者は去々酉年より漁場処々松前町人受負二相成候二付以来半減同様之給金二候上昨年彼地不漁故二給分皆無相渡不申も多分有之極窮難申尽候得は当秋豊作に相成候ても家業方も千万無覺束不得止事離散等二も相及可申敷ト疑（*）敷奉候間御憐愍ヲ以幾重二も御申立被下前文之箇条総而新役等御免之愁訴御添慮ヲ以願之通被仰付下置候様被成下度候以上

文化十二年 赤川百姓惣代半右衛門

七月五日 木野部百姓惣代孫兵衛

高橋川百姓惣代佐兵衛

湊町百姓惣代 多 蔵

南町百姓惣代 長兵衛

本町百姓惣代 忠兵衛

東町百姓惣代兵右衛門

新町百姓惣代弥五兵衛

検断伝蔵宿老清右衛門

宿老小七郎同榮左衛門

同伝兵衛

沼宮内亘理様 中里伊左衛門様

太田源五平様

文字の中に、日々の言葉は跡形もない。日々の言葉で申いてみれば、こんなふうになるのだから。
うか。

布（*）四十文、米三十文の新税だつてか？！

海草、魚油の増税だつてか？！

するめ、糟鱈、お上の買い占めだつてか？！

濁酒も、他領の酒も増税だつてか？！

いわしの絞りかすア、二十分の一の新税だつてか？！

勘弁してけろじゃ。去年も一昨年も飢饉だべ。今年ア雑穀まで食つてまで、わらびの根っこ

だすが、海草だすがで、やっと生きてきた吾等ア、助けてもれえてんだね。秋の収穫に返済

すして、貸してくれる人アいねえかと思つてゐるんだばつて、貸せる人達ア莫大な税はお上に

取られてまつて、蔵ア空だべ。そればりでねえ。ロシアの軍艦彷徨いて、商いの船ア止まつ

てまるし、動けば動いたで税金ふんだくられ、売るも買るもなんねえんだね。銭こも米も、

貸せる人ア一人もいねえじゃ。まんだあるど。材木と桎ア、聞いたごとねえ様た不景氣で杣夫ふとア苦しみ、漁師アお上の漁の安い買い占めで困ってまつてらね。そればりでねえ。一昨年おととしから、北の漁場のあちやこちや、松前まつめの町人の請負になつてまつたどこで、出稼でかへぎの者の給金ア半分こと同ふしつだね。去年ア去年で、松前まつめ、不漁だべ。錢せんこ何ももらわねえ者も沢山ずっぱりあつたし、今年の秋、豊作になつたつて、どすもこすもなんねえね。夜逃げだじゃ。新税も増税もやめてけろじゃ！

書状に名を連ねている検断の伝蔵は、五代前の祖先である。村の顔役の伝蔵は餓死もせず、血はこの世につたわつた。五代たつたバカな子孫は、~~16743813~~の退職金に励まされ、江戸に上つてきたのである。江戸の入り口の橋のたもとで、下北半島の生の言葉から遠く離れ、したり顔で考え込んでいるのだ。~~数ページ前の、「**」で括った段落をここに挿入~~

トボトボと千住大橋を渡りはじめる。苔色の川の水面を風が渡り、さざ波がゆれていた。波は光を刻んでいるが、心に光はやってこない。

背を丸め、橋を渡ると、自転車ベルの音が背後でした。右側に体を寄せると、ブレーキの音がきしむ。あわてて左側に体を移すと、右足めがけて自転車がぶつかった。

「痛い！」と、思わず言葉が飛び出てくる。

「よけてくれたつていいでしょう！」と、それより強い言葉の逆襲だ。

口紅を引いた女の唇が唾で濡れていた。Tシャツをつけた胸のふくらみが赤いジャンパーをはだけている。にらんだ目を前方に戻し、女の足はペダルを踏み直した。歩道の真ん中を、我が物

顔に自転車は走っていく。

ゴキッ！

外れて飛び出す自分がいた。女を追いかけて走り続ける二十人目の自分をよそに、二十一人目の自分は立ち止まる。

道は二つに分かれていた。女を追って走っていった日光街道と、南千住駅に届くコツ通りだ。コツ通りにいくためには、信号のある横断歩道を渡らなければならない。

「自由か」とつぶやいてみる。自由は赤い信号で止められていた。自転車の女は捨て科白を自由に投げつけ、息子は自由に高校をやめてしまった。赤い信号のない、あれらの自由が自由なのか。赤い信号で足を止め、青い信号で歩き出す、これが自由というものなのか。

息子が高校をやめたのは、一年生の、それも五月のことである。夜、勤め先のPTAの集まりが終わり、帰宅をすると、息子はめずらしく居間にいた。

「パパ、聞いて。高校をやめたいんだって」

ソファに座ろうとする体の動きを妻の言葉が止めた。距離をおいた椅子のひじ掛けに、息子は両ひじを張って座っている。高校に入ってから、急に夜遊びと外泊がはじまり、欠席もするようになっていた息子である。

その地方ではAランクの高校だった。中学のセンセイには、もっとランクの低い高校を受けるように言われたのに、言うことを聞かない息子はギリギリの点数で入ってしまったのである。中学二年の二カ月のつまずきは息子の学力を落としていた。入学はしたものの、勉強についていけ

ないあせりが、息子の行動に現われるようになったのだ。

一週間前の朝だった。

「パパ！ また学校を休むって言うてるわ！ 何とか言つてよ！」

けたたましい妻の声に起こされ、息子の部屋に乗り込むと、体半分を布団から起こし、息子は煙草を吸っていた。

「子どものくせに、お前、何だそのザマは！」

言葉が噴射し、両手を突き出して息子の胸倉に飛びかかる。

ベッドから飛び下りながら、息子の右手が灰皿に煙草を捨てた。捨てただけではない。右手は大きく弧を描くと、父の頬を逆襲したのだ。

目がくらんだ。後ろへ向かって倒れていく自分の体を起こそうとして、足を踏ん張る。踏ん張りきれず、二つの足がもつれると、カーペットを尻が叩いた。背中が叩き、頭が叩く。ひっくり返った体から、助けを求めるように両手を突き出した。

「何をするの！ あんまりだよ！ パパにあやまりなさい！」と、妻はふるえた声で叫びながら、倒れた体に手を伸べた。

「なぐらなかつたら、おれがなぐられるべ」と、息子の声は低かった。

妻の手に引かれ、にぶい動きで立ち上がった。心臓の音が体中に響き、目がかすんでいた。鼓動を押さえるように胸に手をやり、それから目にやった。眼鏡がない。

痙攣したかのように首が動き、カーペットの上を目は探した。つるを上突きあげて眼鏡がか

すんでいる。ひっくり返った持ち主のように眼鏡は不様だった。

あわてて拾い上げ、顔の上にそれを戻す。目に焦点は戻ったが、心はまだかすんでいた。……一週間前のかすみは、心をまだおおっている。ひじ掛け椅子の息子に近づくと、かすんだ権威を取り繕うように、腕を組み、膝を折って座ってみた。正直言うと、あぐらは苦手な自分だったのだ。

「どうしてやめたいんだ？」

「高校って、もっと楽しいことと思ってたのに、一寸も自由がないんだもん。中学校よりひどいんだ」

自由という言葉が父の胸をふるわせた。フキノトウを踏みつけながら自由と平等を叫んだのは、息子と同じ年齢だった。季節も同じ、春のことである。

「自由なんか、どこにもないわよ」と妻が口をはさむ。

「そう言ったらおしまいだよ」と妻をたしなめ、息子への言葉を探す。どんなに表現を変えたとこで、出てくる言葉は同じ穴の貉だった。

「高校ぐらい出なかつたら、今の世の中、エラくなれないんだぞ」

「エラくなんか、なりたくないもの」

「そうか、エラくなんかなりたくないか。……パパと同じだな。パパも、校長にも教頭にもならないで、五十二歳になっちまったもんな」

「パパ、話を曲げないでよ」と、妻がまた口をはさむ。

「曲げてなんかいないよ」

険しい顔で言葉を追いやり、息子を見つめる。うつむいた彼の頬をつたわって流れるものがあつた。**それは結晶のように光り、彼のズボンに落ちた。**

「学校にいかないで、何になるつもりなの？ 何をして働くの？」と、妻の言葉が問いつめる。息子が顔を上げた。濡れた目が母親を見つめる。海のような目だった。海へ流れる巨大なヘド口をはじこうとするかのように、まつ毛がゆれた。

ヘド口はもう息子を埋めているのだ。匂いを知り、色を知り、重さを知り、息子は一人の青年だった。

言葉の出ないいらだたしさが彼のこめかみをふるわせ、頬をつたわる光の動きが勢いを増した。**小賢しい大人の智慧を光は流し、光が洗う。**

「よし、分かった。退学しろ。これから勉強したいと思った時、自分の思うやり方で勉強すればいいんだ」

息子の目が大きく開く。妻は目頭を押さえたが、すぐにその手を離して言った。

「さあ、今度はママの出番だからね。退学した後の職探しをしなくちゃ。忙しくなってきたよ」
濡れた妻の目を押しゃって、その歯は笑っている。

「おれ、センセイを辞めるよ。みんなで東京にいこう。東京なら、いろんな仕事もあるし、みんなで力を合わせて生きていこうよ」

「うん、そうしよう。ママも働く」と、妻は大きい声で言った。……

信号が青に変わり、歩く自由がおとずれる。あの夜、息子と父の心をつないだ自由という言葉には、信号のような色もなければ、形もなかった。色や形をつけてしまえば、二人の自由は、まったく違う二つのものなのかもしれないなかった。

コツ通りの両側には商店が続いている。かつて飯盛女でにぎわっていた通りには、ほんの数軒の簡易旅館が点在し、山谷の男たちが眠るためにだけ泊まっているのだ。

崩れた髷の筭と簪が目の前でゆれていた。藍染めの打ち掛けには白抜きの千鳥が飛び、緋の腰巻を割って蒼白な二つの足のぞいている。この飯盛女にも、よがり声の自由はあった。陰茎どころか、手首を深く受け入れて、よがり声をたててしまふ自由は残っていたのである。（*）

十八のマサノ肌ハ貧乏ナ年増ノソレカトバカリ荒レテガサガサシテイタ。タツタ一坪ノセマイ部屋ノ中ニ明カリモナク、異様な肉ノ匂イガムツトスルホド込モツテイタ。女ハ間モナク眠ツタ。余ノ心ハタマラナクイライラシテ、ドウシテモ眠レナイ。余ハ女ノ股ニ手ヲ入レテ、手荒クソノ陰部ヲカキマワシタ。シマイニハ五本ノ指ヲ入レテデキルダケ強ク押シタ。女ハソレデモ目ヲサマサヌ。オソラクモウ陰部ニツイテハ何モ感覚モナイクライ、男ニ慣レテシマツテイルノダ。何千人ノ男ト寝タ女！ 余ハマスマスイライラシテキタ。ソシテ一層強ク手ヲ入レタ。遂ニ手ハ手首マデ入ツタ。「ウウ」ト言ツテ女ハソノ時目ヲ覚マシタ。ソシテイキナリ余ニ抱キツイタ。「アアア、ウレシイ！ モットモットモット、アアア！」十八ニシテ既ニ普通ノ刺激デハ、何ノ面白ミモ感じナクナツテイル女！ 余ハソノ手ヲ女ノ顔ニ塗タクツテヤツタ。ソシテ、両手ナリ、足ナリヲ入レテソノ陰部ヲ裂イテヤリタク思ツタ。裂イテ、

ソウシテ女ノ死骸ノ血ダラケニナツテ闇ノ中ニ横ダワツテイルトコロヲ幻ニナリト見タイト
思ツタ！ アア、男ニハ最モ残酷ナ仕方ニヨツテ女ヲ殺ス權利ガアル！ 何トイウ恐ロシイ、
嫌ナコトダロウ！

ローマ字書きの原文の石川啄木の日記である。明治四十二年の浅草の話だ。

指や手首を拒む自由は、金で買われたマサにはない。残された自由はただ一つ、よがるか、黙
るかの自由だった。

マサは選んだ。陰門をゆるめ、スッポリと手を受け入れる。狂暴な五本の指を千本の花に変え、
マサは叫んだのだ。

「アアア、ウレシイ！ モットモットモット、アアア！」

花の色はこの世を越え、花の弁は浄土に届く。どん底からのマサの叫び声に啄木はたじたと
なり、殺意を込めてマサの顔を汚したのだ。

マサの自由には、かなわない。

「マサ」と、つぶやいてみる。心の中をヒュルヒュルと昇り、花火のように炸烈するものがあつ
た。

光が開き、光が散る。開いた光はコツ通りを照らし出し、散った光はコツ通りに降り注ぐ。亡
者は輝き、生者もまた輝きながら歩いていった。

顔がゆるみ、笑いがこぼれてくる。定期券を見せる手の爪の先までも微笑んでいた。

階段を昇る足がはずむ。ホームの時刻表を見る目もやわらかかった。

電車がくるまで五分ある。自動販売機に近づきながら、鞆の中の財布を取った。百円玉をつまみ、販売機の穴に入れる。

百円の缶コーヒーとは、みみっちい祝盃である。^{*ママ}自由を本気で祝うなら、金はバラ撒いてしまえばいい。貳拾六萬七仟七百七拾四円也の給料を月に一度もらうばかりに、どんなに多くの自由を縛られているのだろう。バラ撒け！バラ撒いてしまえ！

内から湧き立つ炎を消すように、冷えたコーヒーを流し込む。歩きづめの疲れた体にコーヒーは染み透り、ベンチの背もたれは体の重さを受けていた。

隣接する隅田川貨物駅の広い敷地が目の前に横たわっている。踏切の遮断機は開いたまま動かず、点在する貨車は錆びた姿で動かなかった。かつて石炭でにぎわった貨物駅は、もうその役目を終わってしまったのだ。安らぎではない。死である。だが、冷えたコーヒーは疲れた体に安らぎを与え、物音一つしない風景に体は安らぎを映してしまう。バカにならない百円玉の力である。

電車がきた。残ったコーヒーを飲み干して、籠の中に空き缶を投げ捨てる。溜まっている空き缶の山にぶつかり、小さな音が響いた。

小さな快感が体を走る。大きなものは決して捨てず、無抵抗の缶一つを相手に威張っているあわれな男だ。マサを相手の啄木と違うところは一つもなかった。

「マサ」と、つぶやきながら電車に乗る。花火がまた上がった。無数の光が尾を引いて、乗客を照らし出す。男もなく、女もなかった。老人もなく、子どももない。そこに乗る全ての人間と、マサは光で結んでくれるのだ。

シートに座る体がゆるみ、風のように心がただよっていた。疑いを捨てた目は、ケチな識別を忘れ、光だけを感じていた。

光をふさぎ、車窓に石垣が流れてくる。高さが下がり、墓石を載せた石垣が目をよぎっていた。乗り換えの日暮里には谷中墓地があるが、墓石の位置はこれほど低くない。おかしいなと思った時、電車は駅の構内を止まらずに走っていた。

『へいまだに』という文字がホームに見える。常磐線は日暮里の次にある鶯谷を無停車で過ぎ、終点の上野に着くことになっているのだ。

いまましいと舌打ちはしない。マサが浅草から招いているのに違いなかった。

電車が止まった。階段を昇り、精算所を探す。定期券を見せ、百二十円を払うと、浅草口改札口を出た。

浅草行きの地下鉄に向かって階段を下りる。五十年ぶりの訪れに足ははずんでいた。

母に連れられ、よくいった浅草である。東京の地下鉄は、これから乗ろうとする銀座線しかない時代だった。その線の中でも、上野と浅草の間は、一番はじめに開通したものだ。

券売機のある壁には、『浅草まで おとな120円 こども60円』と刷られた紙が何枚も並んでいる。さびれた盛り場の懸命な呼び込みのように、文字は大きかった。(5)

電車はガラ空きである。誰もいない向かい側の席の窓に、自分の顔が映っている。五十年前の思い出が、不意によりがえってきた。座席に膝立ちになり、ガラスに額をこすりつけながら、窓の外を眺め続けたものである。空もなく、ビルもなく、木もなければ、人もいない。そんな地下

鉄の闇そのものが一つの風景だったのである。闇の中のコンクリートの壁のしみや、間を取りながら通り過ぎる壁の電灯の光——窓に映る自分の顔を叩く掌の動きは鼓動のようにはずみ、幾重にもこだまを重ねた車輪の音は、そこが地下であることを教えるようにしつこく響いてくるのだ。った。

「これが地下鉄の音だったんだな」と、思わずつぶやく。半年勤めた新聞屋には、地下鉄の丸ノ内線と有楽町線を乗り継いで通勤した。音にも闇にも心を動かさないで、女の体や車内広告を相手に時間をつぶして乗っていたのだ。

三つ目の駅の光がくる。浅草だった。ホームに下りると、出口を示す文字がある。

↑浅草観音 吾妻橋方面—松屋 隅田公園方面 ↓

松屋を選んで右に行く。五十年前の東京の子どもにも、松屋は驚きだった。地下鉄がデパートにつながっているという、今では北の札幌でも見られることが驚きだったのだ。

電車を下りて駅を出れば、鐘紡の工場のくすんだ塀が立ちはだかっている。それが子どものころ住んでいた大井の駅前だった。工場がデパートに変わってしまった今の太田だが、かつてデパートはどこにでもあるようなものではなかったのだ。そのデパートの店内が、ホームに続いていきなりある。それは闇の果ての、爛漫と咲く光の世界だった。

階段を昇り、改札口で切符を渡す。いきなり続くデパートは、入り口さえも見えなかった。光の花の記憶を裏切り、地下道の光は乏しい。道に沿った左側には靴屋があり、その先には弁当屋があった。くすんだ光にぴつたりの小さな店である。

弁当屋を過ぎると、大きなガラスのドアがようやく見えた。ドアの向こうにオレンジの山はあるが、爛漫にはほど遠い、ただのデパート、ただの食品売り場である。

首をかしげて地下道を戻る。改札口の前で地下道を見つめ直し、歩数を数えて歩き出した。靴屋までは十歩である。二十六歩で弁当屋。デパートのドアまでは六十歩ちょうどだった。子どもの歩幅なら二倍以上にはなるだろう。二倍にして百二十歩の記憶は切られ、いきなりデパートの店内を記憶はつかんでいたのである。光にとって、取るに足りない百二十歩だったのだろう。百二十歩を切り捨てて、光の記憶は百二十倍に輝いていたのだ。

百二十分の一の光に戻ったデパートの地下から、エスカレーターに乗って一階へいく。アーケードが外に見えた。入り口のアーチには、『聖吾西陣』という文字が掲げられている。

赤信号で止められていた人たちが、道を渡ってアーケードに吸われていった。後を追って歩き出す。マクドナルドがあり、レストランがあり、洋服屋がある。どこの街にもあるただの商店街だった。

十字に重なった通りに出る。どうやらこれが観音様に届く、昔の仲見世のようである。せんべいを焼く匂いがした。雷おこしが並び、提灯や鈴が江戸の情緒を伝えていた。

往來の流れの半分を亡者がおぎなっている。生者の動きを氣遣いながら、亡者の流れは川の下

うに左右にゆれていた。

マサは、どこだ？

マサは、いないか？

それらしい亡者を探しては、流れを縫って近づいていく。追い越しながら顔をのぞいた。向こう側からやってくる亡者には、歩をゆるめて横目をやる。

耳、額、まゆ毛、まつ毛、目、鼻、頬、唇、あご——それらの形をずらしながら、亡者たちは固有の顔をさらしていた。顔のずれと比べるなら、マサの運命のずれは大きい。 **銭の所有の桁外れのずれのせいである。**

マサは、どこだ？

マサは、いないか？

マサの顔を知らない男に彼女が分かるはずはない。体はいつか山門を通り抜け、本堂に近づいていった。

戦災で焼ける前の本堂で、母ととった写真がある。回廊の角でしゃがんだ紫木蓮の着物の母は、顔をかたむけて笑っている。かたむけた顔を頭で受けながら、正面を向いて立っている子どもの胸には白い蝶のようにリボンが留まり、蝶の色と同じ歯が大きく開いた口からのぞいている。

リボンの下には、小さな両手でぎられているものがあつた。黒い服の色にほとんど溶け込みそうな長方形の物体は、両手から大きくはみ出しているが、それが何なのか識別するのは難しい。それを識別できるのは写真の母子であり、その物体を子どもにくれた一人の男なのだ。

その日、母に手を引かれて観音様の本堂に近づいた時、男は階段の下から片手を上げ、笑顔を見せて近づいてきた。子どもには知らない顔だったが、早足になった母に引かれて、小さな足は小刻みに駆け出した。

男は背広の内ポケットに手を入れた。出した手の先で長方形の物体が光った。森永のミルクチヨコレートである。シヨウウィンドウのガラス越しに見とれたことは何度もあったが、まだ一度も手にふれたことのない一番大きなチヨコレートなのだ。

「ハイ、坊や」と、男はそれを差しのべた。

出かかった手を止めて、母を見上げる。

「いただきますい」と、母は微笑みながら言った。

うやうやしく両手を出す。片手では持てないような感じだった。

「ハハハハ、かわいいわねえ」と男は笑った。笑いに合わせて、男の肩に下げているカメラがゆれた。……

財布の中から百円玉をつまむ。賽銭の相場は十円玉に決めているが、今日は特別だった。響きを残して賽銭箱に吸われていく百円玉は、十倍の気分を与えてくれる。十倍強く目をつぶり、十倍強く手をあわせ、十倍の思いを入れて、心の中で念仏を唱えた。

母の顔が浮かび上がってきた。忘れていた母の匂いも鼻をついてくる。小さな住所録に残していた匂いだった。ページに残る母の化粧の匂いをかいでは、幼い自分をどれだけ慰めたことだろう。かぎとられ、匂いの失せた母の住所録は、今でも貴重品を入れた箱の底に残っている。

知らない名前の多い住所録だ。その中のどれとどれに、母はまたを広げたのだろう。チョコレートくれた男はどれで、父の名前はどれなのか。問いはいくらでも出てくるが、答えを出すことはもうできない。

チャリ、チャリン、チャリン――

参詣人の投げ込む賽銭の音が響いてくる。地獄の沙汰も金次第。まして、この世の母の苦勞は大変なものだったろう。

母がカフェーの女給になったところ、二人の弟はまだ小学生だった。それなのに、その父親は働く氣力を失し、散歩と読書で日々をつぶすようになっていたのだ。

母の顔が遠のき、開いたまたが浮かび上がってくる。この世の悲しみに縮れている陰毛を割つて、純白の愛液が涙のように滲み出ていた。

チャリ、チャリン、チャリン――

またの間の裂け目に向かって、投げつけられるのは錢である。

指が入る。手が入る。

「アアア、ウレシイ！ モットモットモット、アアア！」

母の声があった。母はマサであり、マサは母であつたのだ。

合掌を解き、目を開けた。または消え、金ピカの祭壇だけが目の前にあつた。

まわりを見まわしながら、本堂の階段を下りる。和服の亡者を目で探した。探しては柄を確かめる。紫木蓮の花はないか？

目をしばたたき、首を突き出した。本堂の真ん前の大きな香炉の前に、立っているのは紫木蓮だ。参詣人と一緒になり、病魔を払う線香の煙を手で受けているのは、確かに母である。

受けた煙を胸に運ぶ。胸の中を結核菌にむしばまれた母だった。だが母よ、煙は股座にこそ運ぶべきではないのだろうか。指と陰茎にむしばまれた股座に、あなたはなぜ煙を運ばないのか？ 思いが風になり、香炉の上に立ち昇る煙をゆるがした。風になびき、煙は折れて横に流れる。なびいた先にはおみくじ売場の屋根があり、屋根の上には鳩がずらりと並んでいた。

風や煙にびくともせず、鳩は山門に向き合っている。反対側の本堂に向き合う鳩もいた。鳩にもまた、それぞれの自由の方角はあったのだ。

紫木蓮と鳩と風——花、鳥、風まで揃ってしまった境内で、まさかと思い空に目をやる。五重塔の後ろの空は橙色に染まりはじめているが、頭の上はまだまだ青い空だった。

青い空をぐるりと見まわす。山門の左高く、何と半月が光っているではないか。半月のふところ深く、母への思いを映したように青い影が宿っていた。

花鳥風月の揃い踏みにはさらわれていた。おくのほそ道への悲憤慷慨はどこへいったのか？ あれは二十人目の仕業であり、ここに立つのは二十一人目の別人なのだ。

バラバラだ。骨のように自分を外し、骨踊りをやってきたのだ。

へバラバラバラバラ

母が歩き出す。距離を取って後をつけると、母の姿は花やしきの通りに入った。母の店も、この浅草のどこかだったのだろうか？ 走り出し、通りを見ると、母はもう見えない。

華やかな叫び声が空に響いていた。ジェットコースターに乗った若い男女の声で花やしきにはぎわっている。

にぎわいの下を黙々と歩いた。映画館らしい建物が見えてくる。『廻落』という文字があつた。関東大震災で崩れた十二階は、ここに建つていたのだ。

映画館の道の先には、国際劇場を壊して建てたというホテルの高い姿がそびえていた。白いフレームで区切られた壁面のガラスはコーヒー色で染められ、サングラスのように気取っている。お洒落で浅草を変えようとしたのだろうか、ここ六区のさびれはひどいものだ。

六区の通りに見える姿は、ほとんど亡者の流れである。厚化粧と間違えられそうな顔の色がチンドン屋のようにゆれながら、過去の栄華を取り繕っているのだ。

東映の横からは通りが挟まり、商店街のアーケードが続いていた。『ソープ』という文字が入り口のアーチに掲げられているが、ここも亡者がほとんどである。

キョロキョロとあたりを見まわしながら歩いているのは、男の亡者たちである。色のあせた着物を着流し、足は下駄を引きずっていた。女をかう場所はもうここにはなく、通りの名称は過去の遺物だった。

足を戻し、東映の前を過ぎる。左手の小路の奥に『ソープ』という文字が見えた。心臓が鳴る。パチンコ屋の音が足を急き立てた。

看板の文字が大きくなってくる。頭の上の看板を見上げ、足を止めた。あたりを見まわすと、ソープの看板はここだけである。

入り口に置かれた小さな看板には数字が並んでいた。¥4500だ。それだけでは、女を買えぬという程度のことは知っている。

たった一度、女を買った。ソーブランドがトルコ風呂と呼ばれていたところだ。連休だったその日、同じ学校のセンセイたちと泊まりがけで小樽へ遊びにいった時のことだ。たった一人の女教師は参加せず、男七人の集団だった。

夜、みんなでバーに入り、キャバレーに入った。キャバレーを出た時、「さあ、トルコにいくぞ」と言ったのは校長だった。

抜け出す言葉を言いかねて、体はタクシーに入ってしまう。歓声の渦巻く車の隅で狸寝入りを続けていると、車は止まった。

「着いたぞ！ トルコだ！ トルコだ！」と、校長が肩を叩く。

目覚めたふりを作りながら、緩慢に体を動かしした。後を追ってきた二台目のタクシーからは、同僚がもう下りていた。

待合室のソファーには、何人かの先客が待っていた。組んだ足、煙草を持つ手、週刊誌に見入った顔——それら体の細部には場慣れた雰囲気がただよい、はじめての心をさわがせる。

蝶ネクタイの男が立つカウンターには、センセイの列ができていた。一番後ろに並んでみる。千円札を一枚出して、みんなはカウンターから離れていった。

「これは入浴料。女にはまたサービス料を払わなきゃならないんだ」と、すぐ前に並んでいた校長が千円札を振りながらささやいた。

入浴料なるものを手渡し、みんなから離れて座る。ポケットを探り、マッチとわかばを取り出した。たて続けに二本吸う。三本目も吸いたかったが、煙草は二本で切れてしまう。

「オイ、慥柄君」と、校長の呼ぶ声がした。目をやると、校長は指を突き出しながら言った。「おれは後でいい。君、先にいけ」

蝶ネクタイの後について、狭い廊下をいった。半ば開いたカーテンの前で立ち止まり、蝶ネクタイの目がうながす。おずおずと足を踏み入れると、女の声が襲いかかってきた。

「お客さん、酒臭いねえ。わたし、酒臭い人は苦手なんだア」

酒臭いと言われる本人こそが酒は苦手だった。つきあいで飲んだものの、女になじられるほどの酩酊をしているわけではなかった。

「そこに脱いで」と、女は指図をする。

ベッドは診察室のそのような固さを見せていた。その隅に、これもまた診察室と同じようなプラスチックの脱衣籠が置いてある。ピンクのショートパンツをはき、同じ色のブラジャーで乳房をおおった女の体は注射針のように光っていた。男の毒を吸い込んで女はむしばまれてはいないのだろうか？ 女の腔は膿でただれてはいないのだろうか？

「大丈夫かなあ」と、つぶやきが出る。

「エッ、何？」と、女はつぶやきを聞きとがめた。

「いや、何でもない」

言葉を打ち消して脱ぎはじめる。女はカーテンの外へ出ていった。

脱ぎ終わったが女はこない。ベッドに腰かけたが、はだかの体はまだ空間になじんでくれなかった。立ってみても同じである。もう一度座ろうとした時、カーテンをくぐって女の声がした。

「何ボヤツと立ってんのさ。こっちへおいで」

女はサンダルを脱ぎ、一段低いタイル張りの奥へいった。

ドアがある。ドアの上部は女のブラジャーの高さで切れ、暗がりなのぞいていた。バスタオルで体をくるまれ、向こう向きに暗がりに入ると、熱い空気があごを突いた。

「こっち向き」と、女は何もかもはじめての客をあしらう。向きを変えると、「座って」と、女はまた指図をした。

おずおずと下げた尻に感じる平面に体重をあずけると、女はドアを閉めた。首から上はさうし首のようにのぞいている。女はまた見えなくなった。

小さな浴槽が見える。蛇口からは音をたてて湯が落ちていた。浴槽に張られていく湯の高さを砂時計のように見つめながら、のぼせる目をしばたたかせる。

浴槽は、やはり時計だった。溢れそうになった時、女が戻ってきた。噴き出た汗が目をかすませ、蒸し風呂も限界だった。

「まだ、そこにいたの？ めまいして倒れないかい？」と、笑いながら女は言う。

「いや、大丈夫」と、答える声はまじめだった。

女は蒸し風呂のドアを開けた。ゆっくりと立ち上がり、ドアの外へ足を踏み出す。体をくるんだバスタオルを女が外してくれた。毛穴という毛穴から精液のように汗がたれ、出番を待つ陰茎

は萎えていた。

「お風呂に入って」と女は浴槽を指すと、またもやカーテンの外へ出る。

長いセレモニーである。だがセンセイは、セレモニーに忠実だ。

体を浴槽に沈めると、ぬるめの湯だった。蒸し風呂にやられた体には、冷房のようなさわやかさである。涼を満喫していると、女が戻ってきた。

「まだ入ってんのオ。上がんな」

プラスチックの洗い椅子を置くと、女は指でそれを差した。座った体に女は石けんを滑らせる。噂に聞いた泡踊りが、いよいよはじまってしまうのだろうか？

はじまらなかった。ショートパンツとブラジャーはいつまでも女の身を固め、泡はほとんど現われない。濡れたタオルだけが体をこすり、こすられないのは陰茎である。

女の手からタオルが離れた。いよいよ陰茎に手が伸びる。石けんのついた手が萎えた陰茎をつかみ、ピストン運動がはじまる。たった三度の往復で手は離れ、洗い桶の湯が肩からかけられた。

「立って」

立った体をバスタオルが手荒く拭いていく。拭いたタオルは腰に巻きつけられ、だらしない陰茎は女の目から遠ざけられた。

「ここに座んな」と、女はベッドに腰をかけながら言った。

かたわらの棚から女は灰皿を取る。ロングピースとライターがのつていた。一本を取り、女は火をつける。うまそうに煙を吐く女の隣で、匂いだけをかいでいた。脱衣籠の背広のポケットに

「あのさ、こういう所にきたらさ、サービスを要求するのがエチケットなんだよ」

「スペシャル、ダブルスペシャルのこと？」「そう」

「スペシャルとダブルスペシャルって、どう違うの？」

「スペシャルだったらね、このまま」と、女はブラジャーとショートパンツに軽く手をふれた。

「ダブルは？」

「どこをさわってもいいの」

「じゃあ、ダブル」

「寝て」と、女の指図がまたはじまった。

ベッドの後ろにまわり、女ははだかになった。掌の上にチューブを押している。ゼリー状の光が掌を濡らした。

くると体の向きが変わり、乳房と陰毛が目に入った。鑑賞の余裕を与えず、女は急いで近づくと、背中を見せてベッドに腰かけた。

陰茎をおおったバスタオルが解かれる。女の手が陰茎をにぎって動きはじめた。ねっとり塗られたまがいものの愛液は掌と陰茎を隔てる冷たい層となり、陰茎は萎えたままである。

ベッドの上から腕は伸び、背中を見せて腰かける女の体にふれていた。左の手は乳房を探り、右の手は陰部を探る。

乳房は尖り、石のように固かった。両股は固く閉じ、右手を陰核に届けてくれない。乾いた陰毛がザラザラと指をこすった。ここまできて、これで終わってしまうのだろうか？ 萎えた陰茎

が言葉を呼び、言葉は唇から洩れていた。

「本番できないの？」

女の手の動きが遅くなった。

「もう、時間がないもん」

それだけ言うと、動きはまた元に戻る。戻ったところで、陰茎の感性は変わりそうもなかった。

「もういいよ。やめてもいいよ。やめよう」

動きは止まる。

「あと七千円出してくれる？ そしたら本番してあげるから」

5000+7000=12000

暗算がひらめき、財布の中味を考える。それだけ払うと、家族への土産代はまったくなくなってしまうのだ。

「いい、やっぱりやめる」

「お酒飲んでくるから悪いんだよ」

女はそう言うのと、ベッドの後ろにまわった。水の流れる音がする。石けんを持った女のひじが動いた。水を止めると女は素早くパンティをはき、ブラジャーをつけた。ショートパンツのボタンをはめると、女はベッドのかたわらを通り抜け、カーテンの外へ出ていった。

どんよりと脱衣籠に手を伸ばす。元の姿に戻った時、女はまた入ってきた。コーラの瓶を右手に持ち、左手ではコップ二つをつかんでいる。

「わたしのおごりだよ」と、女は左手を突き出した。

「ああ、どうも」と、コップの一つを抜き取る。

女はベッドの横の丸椅子の上にもう一つを置いた。空いた手にコーラを持ち替え、棚の灰皿の隣から栓抜きを取る。勢いよく抜かれた栓はタイルの上を転がっていった。

瓶の口が目の前に突き出る。コップを出して瓶を受けた。噴き上がる泡がコップから溢れそう
だ。

「もういいよ」

瓶の傾きが戻る。口をコップに近づけて泡をすすると、舌の上で泡がはじけた。

「ああ、旨い」

凝りをほぐすように肩をまわした。女は自分のコップから瓶の口を離しながら言った。

「肩、凝ってる？」

「ああ」

「失敗したからでないの？」

「ここで？」

「うん」

「いや、仕事のせいだよ。毎日毎日、仕事仕事だもん」

「仕事ねえ。ホントに、仕事って大変だもんね。わたしも、すぐ肩が凝るんだからア」

女はコーラの瓶で肩を叩きながら尻を浮かした。瓶と入れ替わりに、煙草用具の一式を取る。

一気にコーラを飲み干し、女は煙草をくわえた。火をつける。

「一本、飲ませて」

女にねだる言葉がすらりと出てくる。

女は唇から煙草を離した。袋ごと差し出しながら女は言った。

「これ、みんな持っていいから」

袋の口から白いフィルターを見せて、ロングピースはぎっしり並んでいる。

「一本だけでいいよ」

残ったコーラを飲み干しながら指を伸ばした。一本をつまもうとすると、女は袋を押しつけながら言う。

「いいから、全部持つていきな」

「じゃあ、もらう」

つまみかけた指を開き、袋ごと受け取る。抜いた一本を口にくわえた。ライターの火を女は近づける。女の心を取り込むように強く吸うと、煙草の先には赤い火が灯った。光を眺めながら、ゆっくりと煙草を吸い、ゆっくりと煙を吐く。

「青森の人って、やさしいんだね」

女の声に煙がゆらいでいた。

煙草をくわえ、内ポケットから財布を出す。そろそろ帰らなければならぬだろう。……

〒4500

看板の入浴料の額を眺めながら、財布の中味を考える。一万円に足りないはずだ。時と所を変えてしまった今、一万円ではお話にならない。

狭い階段が足元の看板の向こうから二階に伸びていた。階段を上がり、ドアを開ければ、マサには会えるのだろうか？ 小樽のトルコで出会ったような女の心と出会えるのだろうか？

財布の中味も忘れてしまい、階段を見つめる。一歩近づいて足が止まり、二歩目の足は出ないのに前に引きずろうとする心があった。

微かな風が頬をかすめる。紫木蓮が目の前でゆらいだ。たもとがひらめき、肩を押す力が後ろに向かって体をはじいた。

「お母ちゃん！」

はじかれた体から、声のはじける。きつい表情でにらみつける母の前で体はすくみ、言葉はもう出なかった。

紫木蓮が動き、背中を見せた母の姿が離れていく。T字路の角から、紫木蓮はもう消えていた。一歩前に足を引きずる。二歩引きずり、三步目から、エンジンがかかったように足は飛び出していた。

すぐにT字路に突き当たり、急ブレーキが足にかかる。右を見たが紫木蓮はなく、左を見ても紫木蓮はない。

急発進で左を選んだ。Uターンをして急ブレーキをかけ、急発進でまた曲がる。

いつの間にか、車が並んで走っていた。嘲笑うように追い越していく車の後ろに車が続き、車

道にはみ出た亡者にぶつかる。

引きずられる亡者、潰される亡者、千切れる亡者、飛び散る亡者——母ももう、飛び散ってしまつたのではないだろうか？

ゴキッ！

骨踊りがまたもやはじまる。外れて飛び出すのは、二十一人目の自分である。車の流れに突っ込むと、手を広げて立ちはだかった。

二十二人目の足が、ふり向こうともつれはじめる。心がねじれ、息がねじれた。

ねじれを戻そうと立ち止まる。肩で大きく息をした。ゆれる肩で、背後の出来事に別れを告げる。

ゆっくりと、足を前に踏み出した。自分のペースで歩くだけだ。ペースさえ守っていれば、鼓動はおさまってくれるだろう。

鼓動はおさまるが、心はなかなかおさまってくれない。押さえ込むように背を丸めた。雷門の朱の色が、押さえ込まれる心をあおる。門の前で売っているラムネの瓶の冷えた色が目をなだめた。

「ラムネ一つ」

冷えた声を装って財布を出す。瓶の口のラムネ玉をオヤジサンは器用に落とした。音もたてず、泡もこぼしてくれないのだ。物足りないが、それがオヤジサンの年季である。音もたてず、泡もこぼさず生きられるか？ 取りあえず、今はオヤジサンにあやかりたかった。

「ハイ、ドーモー！」

オヤジサンの言葉が、ラムネよりも先に滲みてくる。金を渡す声も、オヤジサンにつられていた。

「はい、どうも」

つられてはいたが、オヤジサンのような生彩はなかった。

口惜しまぎれにグイグイと飲む。舌の上で泡がはじけた。喉ではじけ、胃ではじけ、心も少しずつはじけてくる。

「ごちそうさん」

空き瓶を箱の中に戻すと、オヤジサンはまた言った。

「ハイ、ドーモー！」

泡のように浮き上がってくる微笑みと一緒に歩き出す。地下鉄の入り口を見つけ、階段を下りた。微笑みの泥は頭のテッペンから地上へ飛び、顔は次第に硬くなる。

「お母ちゃんたら、まったくもう、どこにいったんだよ」

独り言をつぶやくと、女が一人、ジロリと目をくれて追い越していった。襲いかかる気力は無い。下りる速度をかたつむりのようにゆるめ、女の足を遠ざけた。

券売機の前で財布を開ける。もうダラ銭がなかった。千円札を抜き取り、券売機の口に入れる。吸い込まれていく札を見ながら、ボタンにつく明かりを待った。

札が隠れる。明かりはつかなかった。オヤツと思った時、札の動きは逆になり、こちらに向か

って現われてくる。

ナンダ、コリヤ。オレハ、ニセサツツカイジャネエゾ！

怒つてみても動きは止まらない。手を出して受け取ろうとしたが、受け損ねて札は落ちた。床の上に手を伸ばす。札が逃げた。換気の風にのった札は、ジャンプをしながら改札口へ飛んでいく。

腰を折り、手を伸ばし、札を追いかけた。床の上に着地する札に向かつて指を出す。指より速い札のジャンプは改札口を通り抜け、ホームへ届く階段へ向かった。

「アッアー、千円、千円」

言いわけの言葉を発して、改札口に飛び込んでいく。階段から落ちる寸前の札をようやく取り押さえると、言いわけのの証拠品を指の先で振りながら改札口を出た。

不様な格好を強いさせた券売機の前にもう一度立つ。文句を言いたいが、券売機に耳はない。札を飲み込む口はあるが、言葉をしゃべる口はない。

怒りを押さえて、千円札を入れ直した。入っていく札に手を添えて、まさかの時は、すぐにかめる用意をする。

札が隠れた。さて、もう一度、そこから札は逆流するのか？

札を収めた合図の明かりがボタンについた。同じ札なのに、この差別は何なのだ。機械のくせに、差別をするとは何事だ。——そう言つてはいけないのだろう。人の作った機械である。人に似るのは当たり前なのかもしれない。

ボタンを押し、切符と釣り銭を取る。改札口を今度は堂々と入れるのだが、心は堂々としてくれない。千円札を追っていく不様な姿が思い出された。たかが千円のために、なぜ、ああ迄うろたえなければならなかったのだろう。車の流れに立ちはだかった自分を見捨てたはずなのに、なぜ、千円を見捨てることはできなかったのだろう。

へバラバラバラバラ

階段を昇ってくる見知らぬ人間たちが、バラバラと切符を置いて改札口を出ていった。終点のこの駅から、折り返しの電車は間もなく発つはずである。

あたふたと改札口から入っていく人間がいる。階段の下に気ぜわしく消えていく背中を無視して、ゆっくりと切符を渡した。急ぎ立てるような鉄の音だ。

指の間に戻された切符をゆっくりとズボンのポケットに入れながら歩き出す。大きな股で追いついていく客の足は、階段の段を外して下りていった。

自分を潰すように、一段一段を踏みしめながら階段を下りる。電車のドアはまだ開いていた。

ホームを見渡す。電車に乗り込む動きも見せず、ベンチにうずくまるのは亡者たちだ。首（*）を伸ばして母を探したが、紫木蓮は見えなかった。外へ探しに戻ろうか――

迷いを断つようにベルが鳴る。今更追いかけてどうするのだ。母が死んで四十八年、ただの一度も法事をせず、ほっぱらかしてきた自分ではないか。

電車に乗り、座席に座ると、母を区切るようにドアが閉まった。ドアだけでは頼りなく、目を

閉める。無念無想といきたかったが、閉まらなかった耳をめがけて車輪の音がなだれ込んだ。

ガタンゴーン、ガタンゴーン、ガタンゴーン……

音に合わせて、頭の中で音を唱える。呪文のように音が渦巻き、はじき飛ばされていくものがある。

これはいい。このまま一生、できることならガタンゴーンを唱えていたい。

できない相談だった。ガタンゴーンの本来本元、電車が止まると、それにつられて頭の中の呪文も止まってしまう。ドアの開く音につられて、つぶっていた目も開き、ホームの駅名を確かめてしまうのだ。ただの人間に修行はできず、ガタンゴーンの念仏の上野駅できっぱり終わる。

階段を上がり、JRの構内に入る。券売機の前で財布を出した。浅草駅での釣り銭の八百八十円が財布を重くしていたが、千円札を飛ばす心配はもうなかった。

料金表を見上げる人々のわきをすり抜け、ためらわずに百二十円を穴に入れる。JRなら、どこからでも、帰りは最低料金の百二十円なのだ。下りる時は定期券を見せてごまかすキセル乗車である。

残念なことに、今日はキセルでもうけられない。定期券が有効になる日暮里駅は、上野駅から最低料金の区間なのだ。

やましさを持たなくていい今日の乗車なのに、ここ上野駅の中央広場では重いやましさが心をうずかせる。疎開の日の待合室の場所を求めて、うずきが目をあやつった。

みどりの窓口の向かって右のあたりだろうか。その右にある喫茶店がそうだったのか。大まか

な見当はつくが、飯粒のついた古新聞などは、ただの一枚も散らばっていない。蛍光灯の光の羅列が、飢えた少年の影を消し去るように天井から輝いていた。

「シーツ」

少年の声が耳に響く。目をしばたたと、少年は消されてなどいなかった。喫茶店のウィンドウに、額と掌をすりつけて立っているのだ。

コカコーラ、クリームソーダー、メロン^ミジュース、コーヒーフロート、オレンジジュース、レモンスカッシュ、モカフロスト、ストロベリージュース、ブルーハワイソーダ、ヨーグルトジュース……

ウィンドウに並んだレプリカの色は、イルミネーションのように光っていた。頭の上の換気孔からは人工の風がそよぎ、少年の体をくるんでいる。足元にたれるウンコの匂いを、人工の光と風は吹き飛ばそうとゆれているのだ。

背けた目に壁画が映った。中央改札口の上部一面に人や動物が描かれ、右下には文字の連なりがある。

文字に近づき、目をやった。壁画の題名と作者名が書いてある。題名は、何と『自由』と名づけられているではないか。

「自由」

思わず言葉が洩れてしまう。画面に目をやり、右から左へ、ゆっくりと視線を移していった。銃を持ち、長々と寝そべっている男がいる。数羽の鳥が首を伸ばして、男のそばに転がって

た。獵師らしい男の隣で大きなあぐらをかいているのは、木こりのようである。足元には鋸が眠り、背後には伐り出された原木が積まれていた。

木こりに向かつて足を投げ出し座っているのは、若い女である。女と並んであぐらをかくのは、白髪のまじった老人だった。

黒い森がある。森の下は湖だろうか。白い波紋が広がり、女が三人、くすんだ肌色で水浴びをしていた。

女の肌色に似た馬もいる。馬の下には大きな魚の尾を持って別な女が立ち、その隣では二匹の犬が鼻を向き合わせていた。犬の上部には、白馬にまたがる男が一人。人を乗せない白馬も走り、その隣では枯草色の馬が四肢を天にばたつかせてはしゃいでいた。

果樹園がある。黒と灰色の果実がなる樹木の下で、開いた傘の柄を両手でにぎりしめ子どもが立っていた。子どもの隣には女が三人、果実を採り入れた籠を抱えて立っている。その下では、足をくずし、ひじを籠に突いて女が一人座っていた。

牛に乗った人もいる。そして最後は四人のスキー客だ。スキーをまたいで足を伸ばす女。女に背を向けた男がいる。もう一人の男はスキーを抱え、あぐらをかく。もう一人の女はストックをそばに置いて寝そべっていた。――

この世の形に自由をはめ込めば、自由はこんなものになってしまうのかもしれない。鳥を射ち、寝そべり、木を倒し、あぐらをかき、足を投げ出し、水浴びをし、魚をぶら下げ、馬に乗り、傘をさし、果実を採り入れ、ひじを突き、牛がいて、犬がいて、スキーにいく。

それはいい。暮らしを離れた自由はごめんだ。だが、この壁画の色調は何だ。バックは一面、雪空の色である。人も動物も森も果実も、華やかな色は一筆もなく、服の色は枯草色が主調なのだ。朱も紺も茶もくすみ、そして灰色に黒と白――

そんな色調の夢を見たことがある。あれは定時制高校の三年の時だった。昭和は二十六年のことである。

壁画の下には、『昭和26年12月創作』という文字があった。『戦争終結』という文字も並んでいる。あの夢を見た同じ年に、猪熊はこの壁画を描いたのだ。

夢を見たのは屋根裏だった。土間にある細い階段を昇ると、体一つを通す穴を切って床がある。床の広さは畳二枚ほどだったが、畳などは敷いていない。敷いているのは、縁のほつれた一枚の莫薩（*）だった。もう一枚は敷けるのだが、窓際のその場所は暮らしに使うモノたちで占められていた。

傷のついた食卓の下は鍋の置き場所だった。食卓の上には、ゴチャゴチャとモノが置いてある。縁の欠けた小皿は、煙草の吸殻をのせていた。箸立てに詰まっている、まるで大家族のような数の箸は塗りのない丸箸であり、とつくに割られた染みだらけの割箸だった。祖母の仕事の道具である針箱ものっている。くけ台もあり、コードの布のほつれを見せたアイロンもあった。

水の入った葉缶ものっている。口飲みで世話になる葉缶の隣には、茶道具をのせた盆もあった。煮炊きは土間で七輪を使うが、茶碗を洗うのは屋根裏で済ませていた。食卓の隣には水の入ったバケツがあり、ひしゃくが突っ込んである。バケツの隣のボールには、布巾でおおった食器が

入っていた。ボールは三つ重ねになっている。先ずひしゃくで水を汲み、一回目の洗いものを一番下のボールでやるのだ。次に二つ目のボールに水を汲み、仕上げ洗いを済ませると、水を入れない三つ目のボールに食器を納めるという手順である。

汚れた水を土間の奥の井戸に並んだ流し場まで捨てにいくのも、新しい水をバケツに汲んで運び上げるのも祖母の仕事だったが、腰の曲がった祖母に代わってやらなかったわけではない。捨てる水は階段の下まで運び、新しい水は階段の下から運び上げる。それはやったが、土間の奥はごめんだった。土間に面した居間の談笑がこわかった。

赤の他人ではない。疎開してから世話になる三軒目の親戚なのだ。二軒に追われて三軒目は、己のおびえをもたらしていた。談笑は、自分と祖母への嘲笑のように響いてしまうのだった。

バケツの水は顔を洗う水にもなり、口をすすぐ水にもなる。ボールの隣には洗面器があり、洗面器の中には祖母と共有の手拭が一本、投げ出されていた。手拭を浸す程度に水をやり、顔を拭いて済ますのが、水を捨てる手間をはぶくやり方だった。そのやり方は、四十年近くたった今も、頑固に守っている。

歯ブラシは、さすがに二本用意され、歯磨粉のこびりついたコップに立てられていた。袋入りの歯磨粉。緑青の噴き出た水こぼし。そして一番奥には、りんご箱を一つ置き、一まわり小さい仏壇がのっていた。

りんご箱の中には定時制の教科書が積まれ、風呂敷に包まれたままの何冊かもあった。気が向くと風呂敷包みを持つて出るが、ほとんど手ぶらでの登校だった。

仏壇は、曾祖父の手作りのものである。塗りのはげた仏壇の上部は、梁ぎりぎりの高さにあつた。それは腰の曲がつた祖母が背筋を伸ばして正座できる高さであり、十八歳の孫が背中を丸めて正座できる高さであつた。ひさしに近いその場所から、高さは傾斜を挙げて莫塵の上に届いているが、一番高い梁の下でも直立することはできない。膝を曲げ、腰を折り、頭をたれて動かなければ、屋根裏での体の移動できないのだ。

莫塵一枚の屋根裏部屋の真ん中に食卓を動かすことはできたが、布団を敷く時は、食卓を窓際に戻さなければならぬ。美濃版二枚のガラスの入った小さな窓は、はめ込みになり、開けることはできなかったが、ゆるくなつた窓枠の隙間からは風が吹き込み、雨や雪も吹き込んだ。壁の板の隙間からも吹き込んでくるのである。

祖母はどこからかもらつてきた新聞紙を細く切り、飯粒を塗つて、隙間という隙間に貼るのだが、雨や雪を受ける紙は飯粒の効力を保つてくれない。晴れた日が続くと、黄ばんだ新聞紙は隙間を離れて反り返つてしまうのだ。風の強い日、新聞紙は風のようになりながら、ふるえ続けた。

食事をとる空間のために丸めておいた布団は一組である。二組敷くだけの広さはなかつたし、あつたとしても、もう一組の布団はとつくに米に化けていた。

冬は日中でも布団を敷く。敷布団は一枚である。シーツはない。行火をのせ、これも一枚の掛布団をかけ、その上からこたつのように食卓をかぶせて祖母は針仕事をしているのだ。小さな窓の明かりは、狭苦しい屋根裏部屋にとつても薄暗い。祖母の頭の上には裸電球がぶら下がつてい

たが、電気代を節約して、祖母は日中ほとんど電気をつけなかった。

定時制が終わり、祖母の入れてくれた茶をすする。煙草をふかし、もう何年も着続けている学生服の上下を脱ぐ。何週間も着続けているメリヤスの上下は、そのまま寝巻きでもあった。匂いのする軍足を脱ぎ、敷布団の真ん中から後ろに移した行火に足を近づける。ほどよい距離を探すと、まだ終わらない針仕事のための光を避けて掛布団をかぶるのだ。

一日中、行火の熱を吸っていた敷布団の真ん中は、尻をあたためてくれる。名残惜しそうに尻を離し、横向きになるのは、祖母の寝る場所を空けておくためだった。横向きの尻には、掛布団を膝にかけて針仕事を続ける祖母の気配がつたわった。祖母の膝が尻をさする。頭をさすられる赤子のように、眠りの中に入っていくのだ。

入る。入る。どこまでも入る。——ここはどこだ？

闇の中に、くすんだ光が差していた。おそろおそろ光に右手を近づける。しなびた皮膚の感触が指の先につたわっていた。左手を近づけても、やはり感触は同じだった。

股だった。二つの股に手をかけて、思いきって左右に開く。

「何をするんだよ！ いやらしい子だねえ！」

祖母の叫びがする。股の向こうの首をもたげて、にらみつける祖母の顔があった。

「クソ婆ア、黙ってる！」

言い返した言葉の力はずみにして、二つの手に勢いをつける。肉の割れ目が口を開き、光の量が大きくなった。光の源はどこにある？

口を開いた割れ目に向かって、グイと頭を突っ込んだ。

入る。入る。――頭が入り、肩が入り、胸が入った。両手を掻き、足を縮める。縮めた脚を伸ばして蹴ると、体はすつぽりと胎内に入っていた。

雪空のように青ざめた光が四方から湧いてくる。枯草色の光もゆれた。くすんだ朱色の光が渦巻き、光量がゆつくりと閉じていく。

暗黒の中から、光は再び蛍のように湧いてきた。どれもこれも、相変わらずの冷たい光だ。

手足をばたつかせ胎外へ出ようと、体は進まない。光の中で溺れていく口の中から泡が噴き出た。泡では駄目だ。言葉を出せ。――光は喉へなだれ込み、言葉はどうしても出てこない。

出せ。言葉を出せ。――

「タスケテェッ！」

言葉に続いて肩がゆれた。肩をゆする手があった。手と一緒に、孫を呼ぶ祖母の声がした。

祖母の顔がのぞく気配がする。掛布団を手で探り、頭からかぶり直した。心臓が鳴っている。

……

壁画から目をそらし、ぐるとあたりを見まわしてみた。喫茶店のウィンドウだけがけばけばしいのではない。列車の時刻を告げる光の文字は黄と赤を際立たせ、場所案内の文字は青や橙を加えて光っていた。電光ニュースの光も流れ、酒や温泉の広告板も、ガラスの中に光を抱いて並んでいる。平成元年、JR上野駅の色調は、昭和二十六年の夢や自由の色調から、はるか遠くの外れていた。

ウインドウの前には、少年がまだ立っている。

ゴキッ！

骨踊りがまたもやはじまる。外れて飛び出すのは、二十二人目の自分だった。もう財布をつかんでいる。女を買うほどの銭はないが、少年を腹一杯にさせる銭はあり、銭で買える食べ物もあった。肩をゆさぶり、少年に近づいていくのだ。車にはねられる亡者を見捨て、車に刃向かう自分を見捨てたのは、二十二人目の自分よ、お前ではなかったのか？

へバラバラバラバラ

目をそらし、改札口へ向かっていくのは、二十三人目の自分である。そらすことの繰り返しなのに、もう一つの出来事をそらされない。そらされず駅員を見る。改札口の駅員の顔が、二年前の出来事の相手の顔でなければいいが……

国鉄がＪＲになって数日後の四月のはじめだった。北海道で買い求めた切符を持って、妻と二人で上野の桜を見にきたのだ。切符に記されている有効期間は、その日で終わりだった。有効期間を活用して、何度も途中下車をしながら東京にやってきた切符である。東京では、既に娘と息子が暮らしていたし、妻と二人での気ままな寄り道が繰り返されたのだ。

東京に着き、大塚駅を出る時も、途中下車のつもりで切符を見せた。駅員は見せた切符を取り上げなかったし、次の日、一人で出かけた大井でも同じだった。大井町駅から大森駅までのなつかしい道を歩き、再び大塚駅に戻ってきたが、切符はやはり途中下車の扱いだった。

上野の桜を見に出かけ、大塚駅に戻ってくる。——切符とは、そこで別れるつもりだったから、

その日、上野駅の中央改札口を出る時も切符はにぎったままだった。

改札口を通り抜けた瞬間、「アッ、一寸」と駅員が呼び止める。振り返ると、駅員は体を伸ばして切符をひったくった。駅員の前を過ぎる妻の手からもひったくられる。

「返してください。まだ使えるはずですよ」

右手を突き出して駅員に詰め寄ると、「出たら終わり、出たら終わり」と、子どもをあしらうように駅員は言った。

「何が出たら終わりなんですか？ 北海道から東京まで、何度も途中下車をしてきたんですよ。」

東京じゃあ、大塚駅でも大井町駅でも取られなかったんですよ。なぜ、ここで取られるんですか？」

「東京都内は、一度出たら、もう使えないんです」

「へー、そうかい。それならそうと、はじめから分かりやすく言ったらいいじゃないか。出たら終わり、出たら終わりだなんて、人をバカにしたような言い方はないだろう！」

「すいませんでしたねえ」と、駅員の声はとぼけていた。顔はこちらを向いていない。ふくれた横顔を見せて、客の列をさばいていた。

客の流れに体は押され、駅員との距離が遠ざかる。距離を縮める大声を気にも留めず、客の列は次々に改札口から散っていった。

未熟な大道芸人は、言葉を探して考える。出てきた言葉はこうだった。

「何がJRだ！ この前、テレビで見たけどよオ、JRじゃあ、デパートにおじぎの仕方を習いにいったそうじゃないか。サービス、サービスって唱えながら、こんな態度をとるのがJRなの

か！」

芸はやはり未熟だった。蔑むように横目をくれる客は、まだいい方である。客のほとんどは一瞥もくれずに通り過ぎ、相方のボケはなかなかオチに導いてくれない。

「ですから、申し訳ございませんと、先程から謝っているでしょう」と、相方は逆に突っ込んでくるのだ。

「へー、申し訳ござま「い」せんだった？　いつ、そんな言葉を言ったんだい？　そんな殊勝な言い方なんて、してないじゃないか！　顔を横に向けて、すいませんでしたねえって、とぼけたように言っただけだろう！」

「あなたの名前、覚えとくわ。清原さんね」と、妻の声が後ろから聞こえた。駅員の胸のプレートには、なるほど『堀』という文字がある。西武ライオンズのホームランバッターと同じ姓だ。ファンである娘の影響で、妻にはなじみの姓だった。「清原は清原でも、大違いの清原だわ。相手にするには足りないわよ。パパ、いきましよう」

残酷なオチをつけてくれた妻のおかげで、ようやくその日のめ事は終わったのだ。

まじめに切符を確かめて、まじめに回収したはずの駅員にとって、何という理不尽な客であったことだろう。JRなるトレードマークを新調し、サービス本位のイメージを強調しても、どこい現場はそうはいかない。ひったくり、「出たら終わり」でかたづけなければ、改札口の流れは止まり、混乱がはじまってしまうだろう。それなのに、こともあるうに「何がJRだ」となじってしまった。JRを楯にとり、ふんぞり返ってしまったのだ。それは過疎地を切り捨て、楯つく

者のクビを切り、金もうけ主義の線路を走るこの国のシステムそのものを認めてしまったことになる。……

うつむいた姿勢で切符を出す。上目づかいで見た胸のプレートは、願った通り清原ではなかったが、鋏の音は痛かった。

痛みを遠ざけるように、ズボンのポケットの奥に切符を押し込む。山手線のホームに向かって足を急がせた。

電車に乗り、空席を探す。一つ空いた席の左側は若い女だった。ブラウスの白い色が包帯のように痛みをくるみはじめ、女の隣に体はもう座っていた。

横目づかいで女を見る。首を折り、女は眠っているようだった。長い髪が女の顔にたれ、鼻の先まで隠している。髪を分けて、伸びているのはブラウスの袖だ。白いブラウスを透かした雲上の肌の色は、長い袖の先から生身の手首となつて近づき、マニキュアのピンクが目にくすぐつた。

居眠りをする女の体が横に傾く。やわらかなぬくもりが肩につたわり、髪が数本、頬をさすってきた。

あたりを見まわし、乗客の視線をうかがう。移していく目の先に紫木蓮が現われ、目をしばたたいた。

斜め前の席を占める着物の柄を上へたどる。柄はとぎれ、襟から出た首の上には母の顔がのつていた。

目がにらんでいる。肩をすばめ、首を縮めた。縮まった体の幅が、もたれかかった女の安定を

奪い、女の体がゆれた。ゆれが女の眠りを覚まし、女は姿勢を整える。

目はもう女には向いていかない。ともに母へ向けることもできなかった。視線を落とした靴の先から、床をたどって母の足元にたどり着いてみる。草履の鼻緒が白足袋の指を分け、指は目のようににらんでくる。押し戻された息子の目は、自分のズボンのチェックの模様を迷路のようにたどっていた。

電車のスピードは六回ゆるみ、ドアは六回開閉した。そのたびに、目はおそろおそろ床を這い、足袋ににらまれ引き返した。

七回目、足袋をのせた草履が二つ、流れるように目をよぎる。母の立つドアの外を灰色のビルの壁がゆつくりと通り過ぎ、広告塔が目の前に止まった。『アサヒ』のネオンの管はまだ光を見せていない。

大塚駅である。ドアが開き、母の背中が見えなくなる。間を置いて座席を立ち、ベルの鳴るホームへ飛び出した。

階段の上から下を見ると、母の背中はまだ見えなかった。前にふさがる人々がもどかしい。すぐ前の腰を押すように定期券を突き出して外へ出た。

首をまわして母を探す。看板の明かりがにぎやかに目をこすった。母の姿はどこにも見えず、明かりにこすられた目が痛い。

眼鏡を上げ、指で目を押さえてみた。揉んで離し、眼鏡の位置を整える。眼鏡の向こうに母はやはりいなかった。

朝の光に見とれてしまった五人目を置き去りにしたのはこの場所だ。どこにいったか、その自分もまた見えてこない。自分も消した自分なのに、母を消すのは不思議ではないだろう。

ゆっくりと歩き出す。

ポーン。

警笛の音がいたずらつ子のように耳の中を転がった。足を止めると、都電がゆっくりと目の前を横切っていく。運転手が頭を下げて、ゴメンナサイの合図を送った。合図を受けて、電車の外も頭が下がる。

イイエ、コチラコソ、ゴメンナサイ

踏切などにはここにはない。道に沿った往来自由の都電の線路なのだ。

東京中に張りめぐらされていた都電の線路は、今ではこの荒川線だけになってしまった。このどかさば、はたして今なのか。それとも、母と生きた昔なのだろうか。ここがもし昔ならば、生身の母が何かの用事で歩いていても不思議はないだろう。

あたりを見まわしながら線路を渡る。母の姿はやはり見え、息子は母の年齢の二倍近くを生きてしまった。白髪の増えた頭髮は黒く染められ、白い数本の陰毛はブリーフ、ステテコ、そしてズボンの三重の守りでおおわれているが、そり残しの髭の中の白いちらつきは隠されない。

「いらつしゃいませ！」

はずんだ声が店先に積んだ野菜の向こうからかかってくる。その声に引かれて、苦い思い出のさつま芋を買って帰ったこともあった。

店先に吊した籠のゆれが止まる。籠と一緒に吊しているビニール袋の束から威勢のいい音をたてて一枚が引き抜かれ、ほうり込まれた野菜が客に手渡されていく。引き換えの札やダラ銭はたちまち籠に飲まれ、籠からつかんだ釣り銭は一円の間違いも許さず客の掌に渡されていく。取り引きが終わり、手から離れた籠は、次の取り引きをうながすように再びゆれをはじめののだ。

「いらっしやいませ！」

声がまたかかってくる。この世の悪を払うように手を振って通り過ぎるが、貨幣に囚われた体は和菓子屋の前で止まってしまふ。BC七百年、トルコ西部のリディアで鑄造されて以来という長い歳月に人類はもう太刀打ちできないのだろうか？

豆大福を八個包んでもらい、銭と取り替える。忘れていた母の命日を償うためだが、八個という数は、家族四人に二個を掛けた数だった。（*∞）

包みを鞆に入れ、坂を上がる。鉄板の囲いの中から工事の音が響いていた。小さな建物が絶えず壊われ、大きな建物が建つていくのだ。

スナックや居酒屋の看板が坂をのぞいていた雑居ビルの跡地に、ベニヤ板の肌をさらした立て札が立ったのは産休代替教員になったころだった。マジック書きの文字は威丈高に右肩を突き上げ、『告知』といういかめしい言葉がいきなり頭に現われる。続く文の面白さに、その場でメモをしてしまったものだ。

大島桃太郎は昭和六十二年十月三十一日までに一切の家財道具を運び出すという約束をしたにもかかわらず履行しなかった。その後建物を取壊さなければならぬ事情が発生し大島桃

太郎の行方を捜したが見つけることができず昭和六十三年二月十日家財道具を一時的に移管しました。本社社員同行の上早急に引渡したいと思うので連絡を下さい。

右告知する。

札を立てた年月日が書かれ、不動産屋の住所と社名、社長名が締めとなり、告知なるものは終わるのだが桃太郎とは面白い。面白いと言ってしまつては桃太郎さんに気の毒だが、正義の名前を持った男が鬼の不動産屋にやつつけられてしまったのだ。

一筋縄ではいかない不動産屋だ。『履行しなかった』と先ずは極めつけ、『移管しました』『連絡を下さい』と、敬体を使って揉み手になる。そして最後は『右告知する』と法律用語でふんぞり返るこの文には、不動産屋の商法が巧まずして表われ、これもまた面白い。

立て札の立っていた場所には、今、棕櫚の木が立ち、二倍のフロアに姿を変えたオフィスビルがある。

坂の勾配が消え、春日通りの車の往来が目に入ってくる。信号待ちをしながら眺めることのできたサンシャインビルは、信号の近くにできたビルに塞がれ、見えなくなってしまった。

ビルが建つ前、軒を並べてそこにあった商店の屋根越しにサンシャインビルは聳え、ああ、東京に住んでいるんだなあという実感に浸らせてくれた。日常に飲まれていく心をふるいたたせてくれたものだ。時には夕焼けがサンシャインの背後の空を染め、一層の彩を心に与えたのだ。

北海道の夕焼けとは違う。北海道は、頭の上から地上まで、九十度にわたる広い夕焼けがあった。まだ青い空の色と混じり合い、薄紫に空を染めているのが頭の上の夕焼けだった。地上の果

てにある太陽の位置に近づくにつれ、次第に紫は色濃くなり、やがて命の血の色に変わっていくのである。

東京の夕焼けには、頭の上まで光を届ける力はない。仰角およそ四十五度の高さに見えるサンシャインビルのでっぺんから、およそ二十度の瓦屋根の間、二十五度の狭い角度に押し込められる夕焼けなのだ。押し込められた夕焼けの頬からは血の色が失せ、紫一色にくすんでいる。くすみながらも頬を見せる夕焼けの生命力は、北海道では味わうことのできない情念を与えてくれたものだった。その夕焼けを、目の前のビルは、サンシャインビルと一緒にすっぽりと押し込めてしまったのである。

昭和六十四年一月七日、鉄骨の立つ建設現場には人の気配がなく、路上にはクレーン車もいなくなっていた。微かな動きを見せるものは、ポールの旗だけである。社旗と安全旗は外され、代わって掲げられたのは黒い布を伴った日の丸だった。

手抜きを見せるように社旗と安全旗が掲げられ、日の丸の弔旗がない現場もあるにはあった。だが、よく見ると、二つの旗の位置は下がり、半旗となってやはり弔意を表わしているのだ。

その日は、定時制高校の受験料の納付を受けつける最初の日だった。期限は二月三日まで。まだまだゆとりのある一月七日だったのに、その日、郵便局に納付に出かけることは、とつくの前から決めていた。次の日は日曜日で郵便局は休みになる。その次の日からは三学期がはじまり、勤めに出なければならなかった。

受験するのは親ではない。息子だった。空港の機内掃除、ブティックの店員、ペリカン便の荷

物かつぎ、バイク便のライダーと、三年間に四つの仕事をさまよったあげく、学歴社会の袋叩きに遭った息子は、もう一度、高校生活をやり直すことを決意したのだ。(*)

仕事をしないで家にいる息子だった。郵便局ぐらい息子にいかせてもよかったのに、定時制卒の父には特有の感慨があった。自分の歩いた道をたどろうとしている息子に、父は自分の姿を重ね、我が事のように落ち着かなかったのだ。

その日の朝、眠りを覚ましたのは、ふすま越しの妻の声だった。娘が起こされ、息子が起こされ、夫は寢床の中で妻子が囲む居間のテレビの声を聞いていた

「パパ、起きてきなさい！」

ふすま越しでは言うことを聞かない夫に向かって、妻はふすまを開けて顔を出す。

「分かっていることじゃないか。そんなにあわてることないだろう」

「ナマの第一報よ！ 昭和の終わった瞬間よ！ 寝てたら味わえないでしょう！」

「……午前六時三十三分……」という臨終の時間がテレビから聞こえてくる。腕時計を目に近づけると、もう八時だった。

「一時間半も前のことじゃないか」

文句を言いながら居間に出ていく。食卓には、まだ朝食の用意はしていなかった。土曜のその日は、職場が休日の妻なのだ。

勤め（*10）のある娘は、化粧のために自分の部屋に戻っていく。朝食抜きの彼女ではあるが、弁当に持たせるはずのおにぎりを作る気配は妻にはなかった。

冷蔵庫を開け、パンを探す。パンはあったがジャムは見えない。

「ジャム、どこ?!」

不機嫌な問いで、妻はようやく体を動かした。

牛乳、生卵、栄養剤——いつもと同じ朝食をとり、顔を洗ってウンコをする。いつもと同じように朝刊も届いていたが、テレビ番組の欄はまったく役にたってくれない。どのチャンネルも番組は変わり、延々と同じ内容が続いていくのだ。

「歌舞音曲は控えるんだって! あんたの会社、歌舞音曲だから、今日は休みなんじゃない?!」
娘の部屋のふすまを開けて、官房長官の談話を妻がつたえた。娘の勤め先は楽譜の出版社なのだ。

扇動にのった娘は、プッシュホンのボタンを押してしまふ。

「もしもし、慥柄ですけど、おはようございます。……アノー、今日は、会社休みなんじゃないか?……ハイ……ハイ……ハイ……ハイ」

ガチャンと娘は受話器を置く。

「笑われちゃったヨーツ!」と一声叫び、娘はあたふたと自分の部屋に消えていった。

「おにぎりどうするんだ?」と、妻に向かって口を出す。

「アッ、そうだ。忘れてたわ。どうしよう? 御飯がないわ。まあいいや。お姉チャーン!」と妻はふすま越しに叫んだ。「今日はおにぎり作らないから、何か買って食べてちょうだい!」

娘の出勤より一足早く、受験料の振り込みに出かける。近くのマンションの一階にある大塚第

五郵便局の前になると、入り口の弔旗が目飛び込んできた。その素早さに驚いて、弔旗の下で立ち止まる。ミシンが掛かった黒いリボンは、にわか仕立てではないようだ。

昭和最後の日付を押した受取をもらうと、足は春日通りを池袋へ向かつて歩きはじめていた。建設現場の弔旗を仰ぐ商店の低い弔旗もあるにはあったが、東池袋五丁目界限では、その後に出会う弔意の洪水を予想することはできなかった。

豊島消防署の弔旗の下で立ち止まり、もう一度リボンを眺めてみる。よく見ると、ミシン掛けどころではない。旗竿に結ぶ紐を通したりボンの穴は、金具をはめて守られているのだ。入念な仕上げである。（*二）

消防署の前から道を曲がり、サンシャインビルの裏へ向かう。ビルの中のアルパ通りは、まだシャッターの上がらない時間だ。

人影の少ないアルパ通りから地下道にさしかかると、人の姿が増えてきた。手には号外が見える。

号外の場所を探して足を急がせた。数人がかりで、あわただしく門松を外す物音がする。

地上に出ると、TOKYUHANDSの前では、読売新聞が号外を渡していた。生まれてはじめてもらう号外に、心は思わずはずんでしまう。手に持って池袋駅へ向かうと、駅前の銀行は軒並みの弔旗だった。儲けの大きさを誇示するように、旗はどれもバカデカイ。

「袋に入れて、とつとくと、宝物になるよ」

声に振り向くと、今度は東京新聞の腕章をしたオジサンが号外を渡している。そこでももらっ

て目の前の明治通りを渡ると、駅の入り口近くでは世界日報が、かなりの若者を動員して号外を配っている。ここでもまたもらってしまい、駅の階段を下りる。電車で帰るつもりだったが、気を変えて、西武デパートのエレベーターの前に立った。

開いたドアの向こうにいるエレベーターガールに目を見張る。エレベーターに乗り込んで、頭の先から足の先まで観察した。この季節は、黄緑のブラウスに、赤い服のはずなのだ。枯草色の帽子とスカート、そして同色の靴でまとめているエレベーターガールのはずだった。それなのに、帽子はない。ブラウスは白に変わり、服とスカート、そして靴は、黒一色に変わっているのだ。昇りきったフロアに出てみたが、同じエレベーターにすぐに乗って下りてしまう。宮城前のナマの姿を急に見たくなったのだ。

地下鉄の券売機に近づく足が、方向を変えた。もう一つ、あのあたりのナマの姿を先に見よう。地下道を進み、階段を上がって外に出る。目指すは、歌舞音曲のストリップ劇場の限界である。見慣れたオジサンの顔がいつもの場所に見えた。いつもの位置より、はるかに低く顔がある。オジサンは道端にしゃがんでしまっているのである。いつもは束で持っているファッションヘルスの割引券は一枚もなく、手は膝を抱えている。

背中を丸めて立ちつくすオジサンのはずだった。背中の形とは裏腹に、割引券を差し出す時のオジサンの手さばきはあざやかなのだ。へそのあたりから空を切って、歩いている相手の体の前、五十センチでピタリと止まる。受け取ると読むや手は近づき、受け取らぬと読むやサッと手は遠のいてしまう。人の流れをせき止めないあざやかな手さばきが、どうしたことか今日は見られな

いのだ。

臨時休業になってしまったのだろうか。それならそれで過ごし方はあるだろうに、日々の習性は、今日もこの巷にオジサンを招いてしまったものかもしれないかった。

映画館の呼び込みの音がする。胸を見ると黒いリボンがついていた。今日の新手だ。切符売りのガラス越しにも、黒いリボンが見えていた。

映画館の横の小路を入っていく。いつもは聞こえるパチンコの響きはなく、シャッターには張り紙がしてあった。

『本日休業』

実に簡潔だ。このパチンコ屋の御主人とは友達になれそうな気がしてくる。その向かいの歌舞音曲、ストリップ劇場の張り紙は、弁解じみているのが残念だった。

『天皇陛下崩御のため九日迄休業』

小路の突き当たりのピンクホテルでは、立ち止まって考えてしまう。

『弔文 天皇陛下の崩御を哀悼申し上げます』

文字は多くなり、かしこまってくるが、はたしてここは休業なのか、営業なのか。紙を張ったガラスのドアは何も言わない。玉虫色の文章美学は、この日が日本の一日であることを示してくれているようでおかしかった。

駅の方角に背を向けて、東池袋五丁目への道を歩き出す。体の奥に渦巻くものがあり、足は大胆に動いてしまう。渦巻く体を押し込めて、電車に乗っていることなどできなかった。

マンションの階段を駆け上がり、ドアを引っ張る。靴を蹴散らし居間に入ると、言葉は立て続けに飛び出してきた。おごそかなテレビの報道に逆らうように勢いづいてレポートをするのだが、相手になつてくれるのは、目の前の妻と息子の二人だけだ。無名のレポーターには勝ち目がない。

二人を誘つて、皇居前に出かける。マンションの近くのもう一つの駅、地下鉄の新大塚駅から乗車し、東京駅で下車した。昼食を先にとろうと、JRの構内を抜けて八重洲地下街に向かう。出会う駅員のどの胸にも黒いリボンがついていた。地下街の食堂では、ウェイトレスもレジ係もやはり黒いリボンだった。

食事が終わり、丸の内口にまわる。ポケットには『ぴあand文庫』を忍ばせてきたが、道の心配は必要だった。ベルトコンベヤーに乗ったように流れていく群れの中に身をまかせていればいい。至る所に立つ警官の制止でベルトコンベヤーはしばしば止まり、生産性は向上しなかった。

皇居前広場がようやく見えてくる。記帳のためのテントが並び、流れは玉砂利の音をたてはじめた。

流れから外れ、二重橋に近づいてみた。鎖が張られ、堀は遠い。

鎖の前から風景を眺めた。櫓、松、二重橋——五十年近く前、国民学校の教室の正面に掲げられていた額入りの写真と変わるところは少しもない。朝の教室で額の仰ぎ、歌を歌うことから一日ははじまったものだ。

へ海ゆかば水漬く屍

山ゆかば草むす屍

大君の辺にこそ死なめ

かえりみはせじ

歌の次は、父母への誓いの言葉だった。

「お父さん！ お母さん！ 今日一日！ 真剣に勉強します！」

声を合わせて叫ぶ教室の正面には、二重橋とセツトになったもう一つの額があった。父母の名前を子どもたちの筆で書いて収めたものである。びっしりと半紙に書かれた文字は近寄らなければ読みとれないものではあったが、父の名前が欠落した白い一つの余白はどの席からでも分かった。

目を逸らし、いつも唇をあいまいに動かす一人の子どもがいた。子どもの喉から、誓いの声は、ただの一度も出たことはない。身の置き場に困りながら、子どもは朝のセレモニーに堪えていたのだ。……

「いこうか」

妻と息子をうながし、二重橋に背を向ける。玉砂利の果ての側溝の石のふたが広場の入り口へ向かって続いていた。

ふたの上に人が点々と立っている。ジャンパー姿もあれば、背広姿もあった。くだけた姿勢を見せながら**思い思いの場所を取る**男たちの耳には、一様にイヤホーンが差し込まれている。

「見ろ、私服だ」と、妻に耳打ちをして教えてやる。

「どうして私服だつて分かるの？」と、妻はすぐには信じてくれない。

「イヤホンしてるだろう」と、息子が口をはさんだ。

「へー」と、目を丸くして妻は立ち止まった。

「そんなにジロジロ見るのやめろよ」と、妻の脇腹を突く。突ついた手で、ポケットの地図を取り出した。

「これからどうするの？」と、妻の目は地図に移る。

「楠木正成を見ていこうよ」

ページをめくる手の動きが止まらない。

「わたし、聞いてくる」

言葉より早く妻の体が動き、私服の一人に近づいていった。

私服の指の方角に妻は首をまわすと、何度もうなずき戻ってくる。

「どうして私服なんか聞くんだよ」

逃げ出すように歩きながら、追いつがる妻に文句を言う。

「すぐ人に聞くんだから。恥ずかしいよ」と、息子が追い討ちをかけた。

「いいじゃない。聞いた方が早いんだもん」

「よりによって、私服なんか聞かなくてもいいだろう」と、今度は夫だ。

「この辺のことは、あの人たちの方がくわいでしょう」と、妻の言葉は理に合っている。

足の動きをゆるめながら、妻と並ぶ。銅像に導いてくれるはずの妻をないがしろにはできない

のだ。

道は人の流れから外れていた。機動隊が数人、向こうからやってくる。楯もなく、ヘルメットもなく、防弾チョッキの分厚さもないが、皮の長靴のいかめしきは充分だ。

一人の手にある探知機がマンホールのふたに当てられる。近くの松の根元には、残った隊員の目が当てられていく。

「見ろ、爆弾探してるぞ」

「そんなこと、どうして分かるの？」と、妻は相変わらずの善人だ。

「探知機持つてるだろう」と、息子はまた口をはさんだ。

「へー、あれが探知機？」

すれ違いざま、妻の言葉があたりに響き、彼女の脇腹がまた突つかれた。

「アッ、あれだ！」

妻の対象は、するりと正成に変わってしまう。馬にまたがる銅像が松の枝越しに見えるのだ。

後醍醐天皇を守るために、命を捨てて戦った彼である。祖父の散歩の相伴をして何度もたずねてきたこのあたりだが、そのころの正成は忠君愛国の鑑だった。はたして今は何の鑑か？ 教科書からも、絵本からも姿を消され、それでも彼はこの場で堪えた。四十三年と数カ月の戦後、皇居の方角を見守りながら手綱を取り続けてきたのである。その忍耐、その執念は、やはり忠君愛国の鑑と言っているのだろう。

見上げながら像に近づく。鳩が数羽止まっていた。オシッコの跡が数本、像を汚している。太

い鎖が張りめぐる台座一面、種のように散らばっている小さな粒もあった。

鎖をまたいで腰をかがめる。鳩のウンコだ。ウンコ石の大きさとは一緒にできない。あれは人間。こちらは鳩だ。だが足元のウンコの形は、鳥浜そのまま、瓜二つの形だった。

バナナ状がある。はじめがあり、直状があった。しばらくもあれば、コロ状があり、チビ状もある。そして鳥浜の水が引き伸ばしてしまったとぐろ状が、ここでは主流となつて残っているのだ。

にんげんは、うんこを　します。いぬも、うんこを　します。うまも、うしも、うんこを　します。にんげんも、いぬも、うまも、うしも、どうぶつなのです。

そういうふうに締めくくった文に、鳩こそ書き加えなければならぬ。忠君愛国など気にも留めずウンコで囲む鳩たちは、やはり平和の使者なのだった。（*12）

種のようなウンコの粒をじっと見つめる。これを蒔き、もう一度、自由と平等を育て直すことはできないものか？

「パパ、警察」

低く鋭い妻の声がした。電気を浴びたように体がはねる。鎖の外に飛び出して、像を見上げ取り繕った。

胸の前で組んだ腕に、妻の手が伸びてくる。熱々のアベックを装って、夫を守ろうとする健気な妻である。怪し気な親を見捨てて、息子はとくにその場を離れ、売店の前のドリンクのボタンを押していた。

植え込みの一つ一つを探りながら、機動隊のグループが近づいてくる。さり気なく背を向けて、

手を組んだまま歩き出す。販売機の前で、妻はようやく腕を解いて財布を取り出した。

親二人は紙コップ入りのホットコーヒード。ぬくもりを掌で楽しみながら、コーラを持つ息子と並んでベンチに座る。追いかけるように近づいてきた機動隊は、目の前の植え込みを探りはじめた。

突っ込んだ手が動く。引いた手の先に紙袋がつかまれ、まわりの隊員の動きが止まった。ベンチに座る三人も思わず目を見開いてしまう。

紙袋を開く音がガサガサと響いた。紙袋の中の手が袋の口から上がってくる。手の先にあるものは、ホットドッグが一つだった。紙袋に落とし込むと、機動隊員は御生大事に片手に下げ、次の植え込みに移っていく。ベンチでは笑いが三つ、声を殺して重なっていた。……

マンションは、もう目の前だ。信号が足を止める。朝、横断歩道の真ん中で尻を出してしゃがんでしまった四人目の姿はなく、ウンコもなかった。ホットドッグのように、つまみ出されてしまったのだろうか？

つまみきれない人間の影のように、白線の上に黒い染みがへばりついている。黒い染みと重なって、錆色の染みが飛び散っていた。それは四人目のウンコの跡なのだろうか。それとも血しぶきの跡なのだろうか？

タイヤの跡も重なっている。車道の表面では貝殻のように砂利が光り、あたりは一面の遺跡だった。アスファルトにめり込んだあれらの砂利は、タイヤに潰され、砕かれた亡者たちの成れの果てなのかもしれない。亡者の姿は、もうあたりには見えないのだ。

あたりを見まわす目が止まった。マンションの前に、紫木蓮が立っている。視線が合い、たもとが動いた。マンションを指で差すと、母はピロティの中に消えていった。

ピロティは駐車場になっている。通り抜けるとエレベーターと階段があるが、マンションの玄関は、ピロティよりも遠いのだ。内部の事情を知らなければ、ピロティから入っていくなどということは考えられないことだった。

横断歩道を人が渡っていた。信号は青に変わっている。ならわしに従って足は前に出るが動きは重い。横断歩道を渡りきると、足は一層重くなった。

おそろおそろピロティに近づく目に、道の遠くから振る手が映る。手の下の顔が笑っている。妻だった。

腕時計に目を逸らすと、針は五時二十分だった。いつもの自分の帰宅時間とずれはほとんどなかったが、妻の時間はいつもより一時間も早いのだ。はたしてあれば生身の妻なのだろうか？

嗅ぎ慣れた香水の匂いをただよわせて、目の前五十センチに妻が立つ。だが香水は生身の匂いではない。

「早かったね」

言いながら顔をのぞき込む。

「今日は残業がなかったの」と、顔の中の口が動いた。はがれかかった口紅が唇の上でささくれだち、生身の唇は屍斑のように青かった。

「残業がないなんて、めずらしいな」と、生身を確かめるように言葉を返す。

会社、官庁、大学等に、電話で科学技術書売りつける妻の仕事である。一冊数万円という高価な本を先ず試読本として受け取ってもらい、気に入ったら、それをそのまま買ってもらう。いかなかったら着払いで送り返してもらうのだが、試読本としての受け取りを承諾してもらった相手には、その日、残業で荷造りをする事になっているのだ。日に十五冊のノルマである。

「新刊が出来上がってこないもんだから、今日は一日、名簿を広げて、これから電話をかけるお客さんの名前をチェックしてたの」

唇の上下のたびに歯がのぞく。上はずらりと入れ歯であり、おまけに作りが悪かった。しゃべり出すと、上唇を押し上げて入れ歯が突き出てしまうのだ。生身の顔が変えられてしまったのは五年も前のことである。今更生身にこだわることはなかったのだ。

駐車場に並んでいる息子の50CCに目をくれながら、エレベーターの前に止まる。妻がボタンを押した。その奥の集合ポストの中をのぞき、すぐそばの階段を昇るのがいつもの自分のならわしなのに、妻と一緒にエレベーターに乗ってしまう。ならわしから大きく外れた出来事の数々は、ポストをのぞく小さな一つを忘れさせていた。

妻の指がフロアを示すボタンを押す。3の数字に明かりがついた。

「どうして3なんだよ」

言葉と一緒に2を押すと、妻はけたたましく笑った。八重歯と笑窪が光る笑顔は、今はもう見られない。入れ歯のために八重歯は抜かれ、笑窪は消されてしまったのだ。それでも、そそかしい妻の生身は変わっていない。

「これで三回目よ。わたしったら、どうして何回も間違ってしまうのかしら。会社が三階だもんね。いつも3を押すでしょう。うっかり3を押して、301号室へいっても、201と作りが同じだから気がつかないのよ。鍵が掛かっているもんだからチャイムを鳴らしたら、『どなたですか？』でしょう。『わたし、わたし』って答えたのに、また『どなたですか？』って聞いてくるもんだから、その声が知らない女の人の声なのにまだ気がつかないの。娘のヤツ、作り声をして人をはからかってるって思っ、『ふざけないで早く開けなさい！』って言ったら、ドアが開いたもんね。顔を見たら知らない奥さんでしょう」

そこまで一気にしゃべり続けた時、エレベーターのドアは開いた。

もう五回は聞いた話である。五回が悪いと言うのではない。繰り返しはこの世の常。自由、自由と念じながら、四十年がたってもいる。

「二度目の時は、鍵がかかっていなかったもんね。……」

廊下に足を踏み出しながら、妻のおしゃべりが続く。勿論、粗筋は分かっていることだ。ノブをまわして引く張ったら、奥から聞こえたのは犬の吠える声だったのだ。さすがにそれは作り声とは思われず、あわててドアを閉め、逃げ出したのだという。粗筋はこれだけだが、学生演劇で鍛えた妻の話術にかかると、何度聞いても、ついつい引き込まれてしまうのだ。

引き込まれ、笑って全てを忘れた。だがエレベーターから出た体は、妻の体と離れてしまう。立ち止まり、廊下の左右を見まわして、母の姿を確かめようとするのだった。

201のドアが不意に開いた。おしゃべりをやめた妻の手は、まだドアに届いていない。おで

こ目掛けて開いてくるドアの表を片手で受け止め、妻は後ずさりをした。

三人目の指を挟んだ朝の傷みが、二十三人目の自分の指に響いてくる。一日中うずくまり、とうとう出てきた自分なのか？

出てきたのは、靴を持った息子だった。定時制がそろそろはじまる時間なのだ。

「びっくりしたア！」

妻の声がかけたたましく廊下に響いた。

「おれの方がびっくりしたぞ」

苦笑しながら、息子は怪談へ出るドアを押した。

「いつてらっしゃーい！」と、妻の声は相変わらずのにぎやかさだ。

靴を脱ぐ妻の体を避けて、半開きにしたドアの内側を背中を支える。二人並んで靴を脱ぐ空間がそこにはないのだ。そこに倒れた三人目のせいではない。三人目は影も形も見えなかった。

尿意が込み上げている。バッグをほうり出し、トイレの前にたつてしまったのは妻である。尻を出した二人目は、便器にまたがったままなのだろうか？

「ぼくが入りたかったのに」

あわてて靴を脱ぎながら文句を言う。

「じゃあ、先に入りなさい」と、妻の体は今に戻った。

バッグのわきに靴を置き、おそろおそろトイレを開ける。二人目はいなかった。心の膿をしぼるように力んでみるが、出るのはただの小便である。沈んだ顔でトイレから出ると、妻の陽気な

音が代わって響いた。

響いた音に励まされ、ふすまを開けて寢室に入る。布団はたたまれ、一人目の自分の姿は見えなかった。

お揃いで、ウンコ石でも見にいったのだろうか。鳥浜貝塚は、もう一度、いつて見たい場所なのだ。

訪ねたのは冬だった。おまけに雪が降っていた。頬を思いきりふくらませて無数に空から押し寄せてくる雪のために、視界はさえぎられていた。視界をさえぎる雪の勢いは慣れている。慣れていないのは雪の湿度だった。氷点下の厳しさを降ってくる北海道の雪は、湿度を削がれ六角形に研ぎ澄まされる。踏んで歩けば、雪は音をたてて抵抗し、潰れて融けて靴が濡れるなどということはなかったのだ。

履き慣れた皮のブーツで小浜にやってきた前日、バス停から若狭歴史民俗資料館までのほんの僅かな雪道でブーツはすっかり濡れた雪にやられてしまった。靴下までも濡れてしまい、旅館の暖房で夜通しかけて乾かしたのである。

小浜では積もった雪との出会いだったが、降ってくる雪との出会いは、次の日、汽車に乗ってからだった。窓ガラスに粘りついて風景をふさぐ雪を恨めしく眺めていると、汽車は三方駅に着いた。ワイパーを動かしながらタクシーが一台止まっている。深いわだちが雪をえぐっていた。ウンコ石の時代、雪をえぐったのは獣の足だ。足跡を頼りに獣を追うウンコ石人にとって、雪は天の恵みだった。獣を追えない旅行者にとって、天の恵みはタクシーである。

「鳥浜貝塚までお願いします」

コートコートの雪を払いながら行き先を告げると、「いっても、何もありませんよ」と運転手は御親切だった。

「いいんです。景色を見にきたんですから」

返事の代わりに、タクシーは動き出した。低い家並みをすぐに抜け、雪に埋まった田圃が現われる。遠くには橋が見えた。その下を流れる川の底が、ウンコ石の場所のはずなのだ。

雪の粘る窓に額をすりつけて外をのぞく。車は橋を渡り、川的位置を変えて曲がった。流れに沿った雪の上で、わだちを引いて車は止まる。

「ここですよ」

「一寸、下りていいですか？」

「はい、どうぞ」

エンジンエンジンは音を止めず、無線が次の客をせつかちにつたえてくる。雪の中から突き出た発掘現場の鋼板の枠は、花鳥風月を遮って冷たかった。冷たい冬に訪ねたのは、怪我の功名だったのだろう。

芭蕉翁が奥に行脚のかへるさ越後に入り、新潟にて「海に降る雨や恋しきうき身宿」寺泊にて「荒海や佐渡に横たふ天の川」これ夏秋の遊杖にて越後の雪を見ざる事必せり。されば近來も越後に遊ぶ文人墨客あまたあれど、秋のすゑにいたれば雪をおそれて故郷へ逃歸るゆゑ、越雪の詩歌もなく紀行もなし。稀には他国の人越後に雪中するも文雅なきは筆にのこす事な

し。

江戸時代、越後塩沢で呉服屋を営みながら、雪の実相を書き続けた鈴木牧之の『北越雪譜』には、こんな言葉があるのだ。……

玄関に戻り、置き放した鞆を持つ。豆大福の包みを取り出すと、足はまた寝室に向かった。

布団を敷けば足元になるふすまの前には小さな箆筒が置かれ、箆筒の上には曾祖父手作りの仏壇がある。両開きの扉が外れ、バラバラに壊れたのは、十年以上も前のことだ。木肌をむき出した蝶番の跡に黒いニスを塗ったものの、仏壇本来の黒く沈んだ塗りの中から薄っぺらい光沢を見せてニスは浮き上がっていた。木捻子の穴の跡が三つずつ、浮き上がりを戒めるように残っている。塗って繕った妻の責任ではない。祖母の死後、新しい仏壇を買おう、祖母との約束だったのだと言う妻の言葉にうなずかず、百年の仏壇にこたわった夫が悪いのだ。

真鍮の台の小さな飯の山が干からびていた。償うように明かるいのは、花瓶に差した野草の花である。昨日、勤め先に近い東大の農学部構内に、昼休みの散歩に出かけた妻が摘んできたものののだ。干からびた飯とのチグハグはあるが、祖母の死後、仏壇を守ってきたのは妻である。豆大福の包みを仏壇にのせ、仏壇の横からマッチを取る。そこにマッチを置いたのは妻だった。マッチを擦り、ろうそくに火をつける。そこにろうそくを立てたのは妻だった。

マッチの火を消し、小さな器の穴に軸木を落とす。祖母の納骨のために下北へ旅をした時、その器を恐山で買ったのも妻だった。

線香入れから、線香を二本取る。その線香入れも恐山で妻が買ったものである。勿論、線香も

妻が用意したものだし、二本取ったのは、数年前のクラス会で友人のお坊さんから聞いてきたという妻の言葉によるものだ。日々の祈りでは、先祖一同に線香を一本。誰かの命日に当たる時は、その仏様のためにもう一本と伝授されてきた妻である。

ろうそくの火を移し、線香を灰に立てる。灰の下に隠れてはいるが、線香立てには白い砂が埋められているのだ。それもまた恐山の極楽ヶ浜から妻が持ってきたものである。

故郷の下北を離れた北海道の教員住宅で祖母は死んだ。

「もうじき、お山にいくよ」と、祖母は生前よく言っていたものだ。お山というのは下北の霊山、恐山のことで、そこにいくということはあの世への旅立ちを意味するものだったが、まだ幼かった娘は「おばあちゃん、沙流川、とつてもきれいだよ。沙流川にいくよ」と口をはさんだものである。緑色の川は教員住宅のすぐそばにあったが、寝たきりの祖母は曾孫の誘いに応えられずにお山にいつてしまったのである。妻が恐山の白砂や仏具を用意したのは、そういう祖母への鎮魂であった。

仏壇の奥の過去帳が目に留まる。祖母の命日のページだった。手を伸べてページを変える。

お経の本を開き、般若心経を唱えはじめた。恐山で夫が買った唯一のものだが、唱えるのはほとんど妻の役目だった。

「めずらしいわね、パパ」

妻が背後から過去帳をのぞく。

「あら、お母さんの命日！ 大変だ！ わたし、御飯をお供えしなかった！」

妻の声を般若心経で遠ざける。

「舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識、亦復如是……」

着替えをはじめ妻の衣ずれの音を遠ざける。居間へ出ていく妻の足がカーペットをこすり、テレビが音をたてた。冷蔵庫のドアの音、鍋の音——それら一切の音は消え、般若心経は体の中をめぐっていた。

「羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶、般若心経」

お経の本を静かに閉じ、鐘を叩く。澄んだ音が体の中に滲みていった。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」

目をつぶり、念仏を唱える。せつかくの念仏に逆らって、聞こえてくる声があった。

「いやらしい子だねえ。お世辞が丸見えだよ」

母の声である。

「そんなこと言うもんじゃないよ。せつかくの信心じゃないか」と、たしなめる祖母の声がした。

「何が信心よ。あの子の一日を見て御覧なさい。いやらしいったらありやしないわ。わたし、見るに見かねてあの子の前に出てしまったのよ。おばあちゃんは、あの子を甘やかし過ぎたわ。あの子ばかりじゃない、嫁の教育だつてなつてなかったから、御覧なさい。二日も前の御飯をまだ上げてるじゃない」

「今の人は御飯を毎日たかないんだもの、仕方ないでしょう。その代わり、昨日はお花を上げてくれたでしょう」

「何よ、あんな花。ただの野草じゃない」

「ただの野草じゃない。おれの青春、一高の野草だ」

今度は祖父の声である。母のすすり泣きが聞こえた。

「二人がかりで……わたしを……いじめるのね……」

切れ切れに母の言葉が洩れる。

「いじめるだなんて、何もお前、わたしだって、孫夫婦の肩ばかり持つわけじゃないんだよ。

こんな古ぼけたお仏壇にわたしたちを入れといてさ。不平不満は、わたしにだってあるんだよ」

取り繕うのは祖母の声だ。

「イチさん」と、祖母の名を呼ぶ声は聞いたことがない。

念仏をあきらめ、おそろおそろ目を開けると、仏壇の中はまるで大広間のようだった。左右に分かれてぎつしりと並ぶ御先祖一同の上座は遠く、顔は小さい。

「古い、新しいで価値を判断してはならん。古いというなら、このお仏壇よりはるかに古いのは諸々のお経じゃ。そのお経が今でも人の口で唱えられてしまう。——その意味を考えてみなければと、わたしは思うのだがな」

下座の顔は間近に大きい。その中の一つの顔の白いあご髭が唇の動きと一緒にゆれていた。声を聞くのははじめてだが顔はアルバムで知っている。仏壇を作った曾祖父なのだ。「申し訳ございません。お許しくださいませ」と、祖母は舅に手を突いて謝った。

母の顔がこちらを向く。にらみつける目の下が引きつり、言葉が飛んでくる。

「お前のおかげで、こんな騒動になってしまったんだよ！ 謝りなさい！」

「もういい。責めてはならん。罪を感じ、お経を唱えたではないか。それで充分なのじゃ」

はるか上座のそのまた奥から重々しい声が聞こえてきた。首を突き出し、顔を確かめようとしたが、顔は点のように小さく、遠かった。御先祖様の御威光に、母はもう黙っている。この世もあの世も、権威あつての秩序なのか。

口を尖らせ、ろうそくを吹きつける。

「フーッ！」

炎が吹き飛び、青い煙がゆらめきながら消えていった。ろうの匂いが炎を探して走っていく。大広間は消え、正座の列はもう思えなかった。見えないだけだ。御先祖一同がいることに変わりはない。

暗がりの中で、過去帳の紙の表がまばらに光っていた。一面に塗られていた銀粉のはげ落ちた残りである。過去帳の最後には『文政十一戊子年慥柄伝蔵幸堅謹記』という文字が銀粉にのせて認められてもいたが、はげた銀粉と一緒に墨は欠け落ち、文字は辛うじて読み取れる。

仏壇の引き出しには、和紙をつないだ長い家系図もしまわれている。達筆が書き継ぐ家系図の最後には、稚拙なペン字で、祖父母と、その子三人、たった一人の世継ぎとなつてしまった孫の名前が書いてある。

孫がそれを書いたのは、まだ国民学校の五年生の時だった。祖母と二人で、この世に取り残された年である。

蒲田の町工場の家政婦になって出かけていた祖母の帰りは、いつも遅かった。電燈の真下に、引き抜いた仏壇の引き出しを置き、古文書を広げては空腹と寂しさをまぎらわしたものだ。古文書のくずれた文字は、歳をとった今でも読み取りが難しい。だが家系図だけは、どの筆跡もきつちりとした楷書で書いてあるのだ。

電燈の笠の上からおおった黒い布は真下に向かってたれ下がり、明かりは引き出しの上に小さな縁を落としていた。爆撃機の標的にならないようにと強いられていた燈火管制のためである。文字のつらなる家系図の末尾の余白が光を反射する。祖母は文字を書けなかった。余白を埋める者は孫一人なのだ。見つめる心を吸い込んで、余白は夜ごと輝いていった。

ある夜、電燈の下に机を出し、墨をすった。返してもらったばかりの学校の図画が、裏返しになって硯の隣に並んでいた。モノの乏しいその時代の貴重な画用紙の裏である。

小筆の先に墨を含ませ、練習の穂先を下ろす。力みの入った穂先は折れ、太い線が画を重ねてしまうではないか。

力を抜いて、穂先が折れぬように書いてみる。手がふるえ、筆の跡もふるえてしまった。何度繰り返しても、うまくいつてくれないのだ。

母の残した引き出しのペン軸を思いつく。取り替えたペン先を硯にたまった墨に入れた。紙の上で墨が落ちてしまわないように、ペン先を硯の表で軽く押す。余分な墨をそこに落とし、画用紙の裏にペン先を当てた。ふるえを押さえて力を入れても、文字は毛筆のように太く重なりはしなかった。

「これにしよう！」

そうして書いた子どもの筆蹟が、今も残る家系図なのだ。

その家系図や過去帳をビリビリと破ることはできるのか？ 火をつけて灰にしてしまうことはできるのか？ いや、最早、火をつける空間さえないこの東京である。ビニール袋に叩き込み、ピロティの隅のポリバケツに運ぶまでが精一杯の反抗だ。顔も知らぬ作業員に集められ、場所も知らぬ処理場で焼かれてしまう。自分の手で焼き、自分の顔で炎を感じる生身の反抗の手応えさえ奪われた場所に住んでしまっているのだ。

「パパ、仏サンの御飯持つてきて！」

妻の声が御先祖様の御威光のようにとどろいた。右手が伸び、五本の指が真鍮の台をつかむ。二歩歩いて敷居を踏み、三歩目はもう食卓の前である。

食卓をはさんで、妻は台所に立っている。朝、彼女がセットをしていった自動タイマーの役目は終わり、電気釜のふたはもう開いていた。

プラスチックのしゃもじをにぎり、妻は御飯をほぐしている。湯気と匂いが空腹を刺激し、思わず生唾が出た。ゴクリと飲むと、生唾は即効薬のようにこの世に自分を戻してしまう。

仏サンの干からびた御飯を妻は指ですくい取った。すくった御飯を流しのごみ入れに叩き込む。祖母が生きていたころ、それは罰当たりの最たる仕業だった。指でつまみ、口に入れ、感謝の念を込めるように、いつもゆっくりと祖母は噛んだ。安物の入れ歯が外れ、飛び出そうとする。それはあまりの旨さが入れ歯を押しつけているかのように見えてくるのだった。

「おばあちゃん、ぼくにもちようだい」と、手を突き出してねだったものである。……

「ポーン」

ごみ入れの中から御飯の悲鳴が響いてくる。悲鳴とを感じる心はあるが、なじる言葉は出てこない。

湯気のたつ御飯を妻は装った。妻の体が動き、隣室に消える。般若心経がとどろき、鐘が響いた。紙包みを開く音が止まると、妻は隣室から現われる。

「あの豆大福、パパが買ってきたの？」

「ああ」と、煙草をくわえたままの返事である。

「偉いわ。さすがお母さんの命日は忘れていなかったのね」

言葉の代わりに煙を吐く。ゆらめきに乘せて重い心を遠ざけたいが、どっこい重みは遠ざかってくれなかった。

吸ったばかりの煙草をもみ消し、いつものように電話のわきの椅子の上に背広を脱ぎ捨てた。手紙と夕刊を取りに行く。遅まきながら、駒の狂いは直したい。

サンダルを突っかけて階段を下りた。マンションのミニチュアのようにポストが並んでいる。201のふたの隙間から中をのぞいた。

ある。ある。

ふたを開けて手に取った。印刷の文字が並ぶ葉書がたった一枚だ。葉書の下に隠れていた小さなチラシが現われる。チラシを取って目に近づけると、『殺人について』西条照太郎『という

ハートに囲まれた文字があった。

母の険しい目が火花のように頭に散る。にぎりつぶし、ポストの隅の屑籠に叩き入れた。屑籠の中には、同じチラシが積み重なっている。

葉書に目をやりながら階段を昇った。老眼には難しい細かな文字だが、『云々』は読み取れる。ドアを開け、たたきに入る。ドアの裏側についている新聞受けのふたを開き、夕刊を取った。ごちそうの匂いが、たたきに流れてくる。

「今日のおかず、なあに？」

いつもの言葉で心を繕い、居間に入った。

「鰯の煮つけ」

コンロの前から振り向いて妻は微笑む。夫の好物なのだ。

「ああ、いいなあ」

どうやら日常は戻ってきたようである。天気予防^{*ママ}をテレビはやっていた。

「明日は雨かア」

「エーッ、雨ーッ！」

豆腐を刻む手を止めて、妻はテレビに目をやった。

「本当だ。どうしよう。明日は会社のごみを捨てる日なのよ。清掃車の場所まで結構あるんだから。困ったなあ」

雨は明日だけのものではない。雨の日とごみの日はもう何度も重なり、妻の愚痴は何度も聞か

されてきた。

耳をやらずに、明日の体育を考える・場所の割り当ては校庭なのだが、雨でそこが使えないとなると、さて、どうしたらいいものか。体育館の割り当てになっている隣の組に頼み込み、一緒にドッジボールをさせてもらえば子どもは喜んでくれるだろう。だが体育の研究授業を二週間後に控えている隣の組だ。やることがマツト運動ときているから、その練習に体育館は欠かせない。となると、体育の授業を潰すよりないだろう。潰して何をやる？ 二時間続きの国語。二時間続きの算数——待てよ。図書室の隅っこに紙芝居が積んであった。あれを読んでやろう。よし、それに決まった。――

雨は明日だけのものではない。雨の日と校庭割り当ての体育の日はどう何度も重なり、何度も授業のやりくりを考えてきた。夫はそれを頭の中で処理するが、妻は「どうしよう」と言葉に出してしまうだけだ。ごみや体育の心配のために明日があることに変わりはない。

ソファアの隅に置いたN T Tの葉書を取り、眼鏡を額に押し上げる。

「おい、電話代、二万円を超えてるぞ」

食卓の上に葉書を投げるより早く、妻の声がした。

「エーッ?! 大変だ! 電話代ももらわなきゃ! 一万円値上げしよう!」

娘が親に支払っている六万円の生活費のことだ。この家で最も多く電話を使う娘でもあった。眼鏡を戻して夕刊の見出しを拾う。リクルートと天安門が紙面をまた埋めていた。汚職をなじれる自分ではなく、中国人民を支持できる御立派な自分でもない。つい先週の家庭訪問では、二

軒の家で寸志を押しつけられてしまったのだ。何度も押し戻し、とうとうそれをもらってしまった。断り切れなかったとは言わせない。電車の座席に座るなり、膝にのせた鞆を開き、鞆の中でこっそりと寸志を確かめたあの卑しさは何だ。

「ほんのジュース代ですが……」

そう言って渡された封筒の中が三枚のビール券だった時、なぜ眉をしかめたのか。苦手のアルコールだったからだとは言わせない。

「粗末なものです……」

そう言って渡された小さな包みの中に五百円の商品券が二十枚も入っていた時、笑みを浮かべたお前なのだ。

眼鏡を額に押し上げる。テレビ番組の小さな文字を見るためである。

見たい番組は特になかった。天気予防が終わり、カーレースの番組がはじまりかかっている。

食卓の隅からリモコンのスイッチを取り上げ、チャンネルを変えた。ニュースである。ここでも内はリクルート、外は天安門を奏でていた。

「御飯食べましょう」

妻の言葉にうながされ、食卓の前で膝を折る。子どものころのしつけのためか、あぐらをかくのは今でも苦しい。勿論、しつけには手抜きもありもあった。例えば箸の持ち方である。どの指も拳骨をにぎったように深く折り、見た目には幼児のようにぎこちないのだ。見た目であり、当の本人は豆一粒をはさむのにも苦労はしない。

今日はじめての味噌汁を先ずはすすり、豆腐をつまんで口に入れた。

「今日ねえ、新しくバイトの学生がきたの。それでね、アサカワさんの本磨きを手伝うことになったの」

本磨きというのは、送り返されてきた本の天と地、そして前小口の三面の汚れをサンドペーパーで磨く仕事だ。真新しく変装させて、再び新しい客に送り込む。妻の会社の話から仕入れてしまった知識の一つである。

「そしたらねえ、バイトの学生ったら、イヤホーンをして、ラジカセを聞いているの。本磨きをしなげらよ。それで、アサカワさんが『仕事中はイヤホーンを外したら？』って注意したらね、バイトの子、怒っちゃってね、『空いてる耳をどう使おうって、ぼくの勝手でしょ』っていつて出てっちゃったの。それきり、もう帰ってこないのよ。一時間もしない内に、やめちゃったのよ。アサカワさんたら、しょんぼりしちゃってね」

「しょんぼりすることないじゃないか」と、鰯を箸でほぐしながら言う。妻の手の箸は、タクトのように踊り続けているだけだ。

「しょんぼりするわよ。高い広告料を出して、せっかく見つけたバイトなのよ。社長に悪いじゃない」

「ああ、そういうことか。でも、注意することはなかったな」

「どうして？」

「ぼくのこの正座見てごらん。正座をくずせない人間もいれば、あぐらしかかけない人間もいる

だろう。正座できても、ほら、ぼくのこの不器用な箸のにぎり方だ。バランスのとれた人間なんていないんだ。大体、ぼくはこの箸のにぎりを不器用だなんて思わないことにしてるからね。見かけじゃないんだ。イヤホーンで音楽を聞いて、それで能率が上がるなら、それでいいじゃないか。能率を上げるために、わざわざ音楽を流す会社もあるって、この前、新聞に出ていたぞ」

「フーン、そう。そうかもしれないわね。でも、わたし、あの学生を許せないわ。だってね、出ていく時の捨て台詞がまだあったのよ。『科学技術書の整理って広告にあったから、もう少し品位のある仕事だと思ったたら、これは何ですか？　だまされましたヨ』だって！」

「ハハハハ」

「笑っちゃ駄目！　その先がまだあるの。『中央大学法学部のやることじゃありませんネ』って言うのよ」

「そいつ、中央大学法学部なのか？」

「そうなんだって」

「参ったなア。許せないね。絶対、許せない」

「でしょう」

同意を得た妻の箸がようやく食事をとるための動きをはじめ。動きはすぐに止まり、妻はまたしゃべった。

「今日ねえ」

枕言葉と一緒に、飯粒が一つ、妻の口からこぼれる。今度は昼休みのラジオ体操の話だった。

息子に録音してもらったテープを使って、ビルの屋上で、同僚の女性二人を誘って今日からラジカステーションをはじめたのだ。

今日ねえ——と、夫もまた出来事をしゃべりたいが、さて、どこからどう切って盛りつけければいいのか。出来事は鎖のようにつながって、心をグルグルと縛っているのだ。

「ああおいしかった。ごちそうさま」

鎖を断ち切るように陽気な声を作ってみるが、食べた量は陽気ではない。鰯が一切れに味噌汁一杯、そして一膳の飯である。

箸を置き、ソファーに寝そべった。寝そべったまま煙草を吸う。立ち上がり、クッションを当てがっていた首をまわす。小便に行く。またもや寝そべってチャンネルを変える。煙草を吸い、チャンネルを変え、小便に行く。――

「おい、二人とも遅いな」

テレビはニュースステーションの真最中である。娘が遅いのはめずらしいことではないが、ニュースステーションの前にはいつも帰ってくる息子なのだ。

「遅いわねえ。学校に電話してみようか」

「いいよ、そんなこと」

ドアの音がした。妻と顔を見合わせると、この家一番の身長の子息の顔が寝そべった頭の上に現われた。

「遅かったなア」

「うん」

短く答えて、息子は一人掛けの椅子に座る。テレビに向けた体の方向を妻は座布団の上で移した。

「遅かったじゃない」

「職員室に寄ってきたんだア」と、息子の答えはやや長くなる。

「悪いことしたんじゃないんでしょね」

「するわけないだろう。先生と話し合っただけなんだア」

「何話し合っただのさ」

「うん、自主退学しろって友達が言われたんだア。だから、それ、取り消してくれて先生に頼んできたんだア」

「友達って誰？」

「誰でもいいだろう」

「男？」

「いや」と、息子の顔は赤らんでいる。

「どうして自主退学になっちゃったの？」

「あいつ、うるせえんだア。授業中、おしゃべりばかりで、先生の声が聞こえなくなるんだもん。だから自主退学になっちゃったんだけど、おれ、謝れって言っただア。説教臭いことグダグダと言いたくなかったからさア、おれ、言葉に気をつけたさア。なるべくカッコつけねえように言

ったんだア。謝る気あったら、一緒に職員室にいつてやるって」

「フーン、それで先生は何て言ったの？」

「自主退学取り消し」

「よかったねえ。いいことしたじゃない」

「飯、飯」と、息子は照れるように母との会話を打ち切った。

寝そべった父の体は、いつの間にか起き上がっていた。斜め前に座っている息子の顔がひどく目映い。目をしばたたき逸らした先には、テレビの画像があった。キャスターの饒舌な口の動きがいやらしい。

クッションに頭を当て、また寝そべる。目をつぶると、息子との遠い日々がよみがえってきた。産室からはずんでくる第一声に耳をそばだてながら、壁一つへだてた病室でシーツのしわをゆつくりと伸ばしたこと――窓の外では、山の紅葉が一面に輝いていたものだ。

初節句には、兜と鍾馗を買ってきた。小さな兜はすっぽりと頭に入り、それをいやがって外そうとする小さな手をみんなで押さえて笑ってしまったものだ。笑わなかったのは祖母である。

「かわいそうじゃありませんか。赤ちゃんをおもちゃにしないでください」と、先に立ってふざけている妻に注意をしたものである。

兜と鍾馗を買ったのは、苦小牧に出張した時だ。運動会の遊戯の講習が終わると、足をはずませてデパートにいった。兜だけを買うつもりだった。だが売場を歩いているうちに、鍾馗も欲しくなってしまったのだ。

かつて家にあった二つである。父が送ってくれたと言われていたものだ。鍾馗の手にした小さな刀を抜き取り、頭にのせた小さな兜を片手で押さえ、部屋の中を飛んで跳ねた。百人斬りの豪傑となつて、息をあえがせたものである。

二つの品物を選んでみると、不意に顔も知らない父の姿が自分の中に重なつてきた。父もこうして選んだのだ。こうして時間をかけ、父は買ひ物をしたのだ。……

ドアの音がした。娘である。

「ワーツ、真つ赤な顔！ また飲んできた！」と、妻はすかさず声を入れる。

「世の中、バカばかりなんだもん。酒でも飲まなきゃ生きていられないよ」

娘のやり返す声がソファーに伸ばした足の先で聞こえた。

「おい、豆大福食わないか？」と声をかける。ようやく揃つた家族の数が弱い胃袋を励ましていた。

「群林堂？」と、娘が聞き返す。

「いや」

「なあんだ」と、娘は豆大福にのつてこない。

「今日はパパのお母さんの命日なんだって。お線香上げて、仏サンからいただいてきなさい」と、妻が口を出す。

仏壇の部屋に娘が消えた。鐘の音がする。豆大福の包みを持って現われた娘は、足を横に投げ出して座った。

食卓の上の開いた包みにみんなの手が伸びる。箸を置いて息子が伸べた右手を妻が軽く叩いた。
「駄目、お線香を上げてから」

息子が立ち、鐘の音がまた響く。

「これ、いくら？」

モグモグと口を動かしながら娘がたずねた。

「百円」

「高いなア」

「高くて、まずい」と、息子が追い討ちをかけた。まだ豆大福をつかんだばかりである。

「せっかくパパが買ってきたのに、そんなこと言うもんじゃないよ」

口の中の豆大福を飲み込むと、一拍遅れで妻が言った。

「群林堂にはかなわないよ。あれは芸術品だもん」と、夫は手の中の豆大福を眺めながら言う。

いかにも日本的な、隠し味のような豆の姿だ。群林堂はこうではない。無人の岩礁のアワビのように黒豆が溢れ、汐の味を吸い込んだ豆は甘味をたらした餡の味と口中で交わる。辛と甘、陰と陽——二極のバランスそのものとなって舌の上に広がるのだ。値段は何と、一個八十円という安さである。

はじめて食べたのは、東京に出てきて間もないころだった。娘が買ってきたのだ。専門学校に通っていたころの間借り先の近くに店があり、たまたま買ったのが最初だという。

一年前の夏休み、護国寺のあたりを散歩していると、十人ほどの人間が列を作っていた。マン

シヨンの一階に店が並び、一番左側の店の中から列は伸びている。看板の文字は『無茶峠』だった。

ああ、ここかと、早速列に並んでしまふ。

列が進むにつれ、店の中が見えてくる。店頭にいるのは、オニイチャン一人だった。木箱に並ぶ豆大福がなくなると、オニイチャンは後ろの仕事場に引っ込んでいく。空の箱と引き替えに、できたての豆大福が並んだ箱を両手で抱えて戻ってくると、シヨーカーズの上に置き、客の注文に応えるのだ。

包装をする前に、オニイチャンは必ずシヨーカーズのガラス戸を開け、豆大福の木箱をしまつてガラス戸を閉めた。シヨーカーズには諸々の和菓子が出番を待っているのだが、お呼びはほとんどないようだった。

包装が終わり、銭をもらうと、次の客のために再びガラス戸が開き、木箱が取り出される。豆大福が主流ならば、出しっ放しにしておく方がはるかに能率的なはずだった。だが、オニイチャンは、そうしない。豆大福の柔らかさを守るために、包装の短い時間、少しでも空気にふれないようにシヨーカーズへの出し入れを繰り返していくのだった。……

手の先の粉を払い、娘が立った。プッシュホンを持って、娘は自分の部屋のふすまを開ける。「アッ、忘れてた。お姉ちゃん！」と、妻が呼び止める。

「何さ」

「電話代、二万円も取られたんだよ。今月から、下宿代値上げするからね。一万円の値上げだよ」

「何言つてんのさ！ 六万円も払つてんだよ！ みんなから公平にお金取つてよ！ 働かない人が一人いるでしょう！ 働かせてよ！」

息子が立ち上がる。ベルトの金具に手がいった。腰から抜いたベルトを振り上げ、姉に向かって飛びかかっていく。

姉の手からプッシュホンが落ち、けたたましい音をたてた。部屋に逃げ込む姉を追いかけて、弟の体が飛び込んでいく。

親二人が後を追った。部屋の隅に追いつめられ、姉は膝を突いて弟を見上げていた。振り上げられたベルトに備え、姉の片手は頭をかばい、もう一つの手はベルトに向かって突き出ている。

「何さ！ 何すんのさ！」

声はふるえ、目はおびえていた。

振り上げたベルトは、襲いかかるのをためらっている。仲裁の手を待つように、ベルトは宙でゆれていた。

「やめろ！」

息子を羽交い締めになると、息子の体が腕の中でゆれた。力を抜いたゆれである。

「離せよオ！」と、声だけは張り上げている。

手をほどくと、息子はベルトを引きずりながらふすまの外に出ていった。落ちたプッシュホンを蹴飛ばして息子の足は玄関へ向かう。妻は息子を追いかけた。

「こんな時間に、どこにいくの？」

「どこでもいいだろう」

「よくないわよ。ママもパパも心配するでしょう」

「勝手に心配しろ」

二人の体は見えないが、二人のやりとりは聞こえてくる。

カーペットの上の受話器に手をやる。伸びた線がバネのように元に戻った。数字の並ぶボタンのわきに受話器を置くと、赤いランプが消えた。両手でプッシュホンを取り上げ、電話台に戻す。モノにはたちまち平常がよみがえるが、心の中の赤いランプはすぐには消えてくれなかった。息子の美談で締め括ろうとしていた一日、不意に訪れたカタストロフィーである。

ドアの閉まる音がした。戸棚の陰から現われたのは、眉間に皺を寄せた妻の顔である。

「破局だ。慥柄家の破局だよ」

妻の眉間に迫い討ちをかけると、妻はたちまち皺を伸ばし、笑いながら言い返す。

「大げさ、大げさ。パパは一人っ子だから、すぐ深刻になるのよ。わたしなんか、兄弟姉妹五人もいたんだもん、喧嘩なんか日常茶飯事だったのよ。ワーツ、十一時過ぎたア！寝なくちゃア！」
今日のニュースを文字で並べたボードの前で、キャスターがまとめをしている。今日ねえ、天安門でねえ——今日ねえ、リクルートがねえ——そんなふうにはしゃべらないが、まあ似たようなものである。この世の表相をボキボキと外し、骨踊りを見せているのだ。

へバラバラバラバラ

囃子唄のようなキャスターの饒舌に50 C Cの音が重なる。

へバラバラバラバラ

外れながら遠ざかっていく50℃の唄に耳を傾けながら唇を動かした。

「どこにいったんだろう？」

「じきに帰ってくるわよ」

事もなげに言つてのける妻の声が寝室から聞こえる。プッシュホンには遅れを取った平常だが、妻は天晴なモノだった。モノである体一つがマットを抱え、マットを敷く。敷布団をのせ、シーツをかぶせる。枕を置き、タオルケットを広げ、掛布団を掛ける。たちまち寝室を仕上げていく体の動きを妻の心は追いかけているようだ。ともかく、まずは動くことだ。

胃潰瘍の薬を二粒、口に含む。流しに立ち、コップを持った。水を注ぐ。蛇口を止め、コップの水で薬を喉へ通してやる。

洗面所のノブをひねり、今度は歯ブラシ。チューブを押し、口に入れた歯ブラシを上下に動かす。

薬にしろ、歯ブラシにしろ、自分一人の口の中の小さな動きである。布団の上げ下げ、食事の準備、洗濯機もまわせば、風呂水も入れ、月収三十万の仕事もこなしてしまう妻の動きにはかわない。

食卓の上に小さな鏡台を置き、妻はクリームを顔に塗りつけていた。白いガーゼで皮膚をこする。明るい肌色をガーゼは吸いこみ、皮膚はくすんでいた。

目を逸らし、煙草に火をつける。療養所に入っていたころ、消灯前的一本をくわえながら、ま

だ残っている煙草の数を数えるのが楽しみだった。ああ、明日もこの煙草を吸えるんだなあと思
いながら、ゆっくりと一本を味わったものである。病人とはいえ、二十歳を越えたばかりの若さ
だった。明日は煙草の形を借りてまぎれもなく存在していたのだ。

結婚し、子どもが生まれ、祖母が死んだ。葬儀も終わり、人々が引きあげていった夜、明かり
を消した寝室でいつものように寝煙草を飲んでみると、ああ、今日も煙草を飲めたなあという思
いが湧き上がってきた。次の夜も、そしてまた次の夜も、同じ感慨が襲ってくるのである。長い
間の習慣だった寝煙草は一週間目にやめてしまった。……

二本目を口にくわえ、短くなつた一本目の火を移す。二本どころか、もう一本を吸わなければ、
寢床にいくことができなくなつたこのごろの自分である。闇の中の寝煙草はやめ、心の中の暗
い感慨は追い払ったが、感慨は体の隅々にまつわりついているのである。ああ、今日も煙草を飲
めたなあ。明日はもう、この世の人でないかもしれない。ならば飲め、末期の煙草をたっぷりと
飲め。――言葉でそうは思わぬが、体がそう思っている。

テレビのスイッチを妻が消した。静けさが闇のように立ち込め、煙草の先から言葉がゆらゆら
と上りはじめる。

二本目をあわててもみ消し、トイレに立った。一日の毒を流すように小便をするが、どっこい
毒は流れてくれない。細い小便が便器の水を力なく叩き、小さな泡をたてた。水の色を黄色く染
める威力はなく、陰茎は毒を溜めてうずいていた。

うずきを流そうと力を入れる。したたるだけの小便は、水の上で泡もたてない。

残尿感のつたわる陰茎をしまい、ハンドルを押した。渦を巻いて落ちていく水の勢いが憎らしい。

トイレを出る。目の先の電話台からプッシュホンの姿が消え、娘の部屋の閉じたふすまに電話線がはさまれていた。

戻ってくる少しの日常がうずきをやわらげる。電話台のかたわらの椅子の上に、いつものようにシャツとズボン、そして靴下を脱ぎ捨てると、下になったパジャマを引っ張った。

パジャマを着て、いつものように居間の電気のスイッチを消し、寝室に入る。いつものようにふすまを閉めると、いつものように妻もパジャマに着替えるところだ。枕元の電気スタンドがいつものように妻を下から照らしていた。シミーズの上から、いつもは妻の尻に掌を当てる。「だめ」と妻の手に払われるのが、日曜から金曜までの六日間のならわしだ。

ゝバラバラバラバラ

消えていった50℃の音が耳の奥によみがえってくる。仏壇の視線が背中をつかみ、一日の出来事が髪をつかむ。尻に向かって、いつものように手は出なかった。

逃げ込むように布団に入り、眼鏡を外した。一日をたたむように、眼鏡のつるをたたむ。目をつぶり、胸の上で合掌した。

受話器に向かった笑い声が娘の部屋から聞こえてくる。笑い声は踊っていた。

ゝバラバラバラバラ

勝手に笑え！ 娘は娘、息子は息子、妻は妻だ。

電気スタンドのスイッチを消す音がした。つぶった目の中の闇が深まる。

「カタッ」

妻が外す入れ歯の音だった。

ほろ見る。化粧や入れ歯、自分にまつわる異物を除き、妻もやっぱり、妻自身に戻っていくのだ。

戻ろう。戻ってこい。外れていった二十二人の自分たちよ。踊って踊って踊り続けた骨踊りの一日は終わったのだ。

へバラバラバラバラ

宙を舞い、二十二人が戻ってくる。自分がゆったりと広がっていく。このまま永遠に眠りたいものだ。……

(了)

※入力者注記

東條慎生

おおむね、「骨踊り」から回想的な部分を削除し、結末部分を書き直したものが「BARABARA」となる。赤字は単行本版「BARABARA」で削除された部分。

おもに段落単位での異同を赤でチェックした。細かな表現の違い、内容の入れ替え等で実質同等の内容になっている場合は必ずしもチェックはしていない。異同表記はおおよそのもので、厳密なチェックにはなっていないことを注意。本稿のチェックは、あくまでも入力時の副産物として作成されたものとなる。

全体に関するもの

※文章を九十度転倒させた部分では句読点の適切な割付ができていません。

※分裂する場面で、「外れる」が「割れる」に表記変更されている。

※曾良、曾祖父等、「曾」がすべて「曽」になっているのは原文通りとした。

※「鱒」は原文では右側上部がハの字型になっている正字。

※「瘦」も原文は正字。

※「うんこいし」のくだりはUFO小学校第七章と同一文章。

※単行本版ラストページほどは新規原稿。

個別注について

*1

単行本で追記。

「聞こえるのは、茶をすすする音だけだ。みんなにならって、目の前に置かれた茶碗を口に近づける。」

*2

「歟ト疑敷奉候」

これは単行本では「歟ト歎敷奉存候」となっている。引用元が不明なためどちらが正しいか未確認

*3

単行本版では、書き出しの追加や、「だってか」が「だってが」に変更されるなど、いくらか加筆修正されている。単行本では以下の追記がある。

「済まねえってば、話コ聞いて呉けさまえ。」

このもの
個物（木綿だの打綿だの^{うちわた}つて箱^{はこ}さ入^いった商^{あきな}いの物コ）四十文、米三十文の新税^{しんぜい}だつてが？！

*4

単行本では以下のように整理されている。

「崩れた鬚の筭と簪がゆれていた。亡者になった飯盛女だ。文学散歩の案内者が教えてくれたように、コツ通りはかつての千住下宿——飯盛女が現われるのに不思議はなかった。飯盛女に自由はあったのだろうか？

あった。

よがり声の自由である。」

以下ほぼ同文。

*5

単行本で追記

「通り過ぎる壁の電燈の光の数を、まるで暗号を読み取るかのように数えたものなのだ。

あれが自分だったとするならば、今、目の前の窓に映る分別臭い自分の顔は、二十一人目どころではない。二千百人目は、二万千目か——いや、それを何千倍、何万倍にしたほどの分裂によって生き継いできた自分なのかもしれないなかった。」

*6

単行本で追記

「焼け焦げてチリチリと縮まった髪の毛は微動もしない。焦げて残った衣服の繊維は、赤くただれた肌に炭のようにこびりついていた。東京大空襲の夜、このあたりは焼夷弾を激しく浴びただ。」

*7

原稿では莫蔭の「莫」の草冠が省かれた字で書かれている。

*8

単行本では地の文を台詞に変え、

「ア、十個にしてください」と、母の二個をつけたしてもらい、包みを受け取った。」
という追記がされている。

*9

単行本で追記

「一月七日のイの一番の受験料納付は、親バカからのプレゼントと言っていていいだろう。」

*10

単行本で追記

「夫の小学校は冬休みである。息子はルンペン——」

*11

単行本で追記

「プロの業である。前々から、この日を予想して買い求められていたものと思われなかった。」

*12

この周辺で黒字になっている、

「見上げながら像に近づく。鳩が数羽止まっていた。オシッコの跡が数本、像を汚している。（中略）忠君愛国など気にも留めずウンコで囲む鳩たちは、やはり平和の使者なのだった。」

という部分は『BARABARA』単行本で以下のように細かく修正されて残っている

「像に近づき見上げると、正成の両頬に流れているものがあつた。涙ではない。鳩のオシッコの跡である。忠君愛国など気にも留めない、鳩は平和の使者なのだった。」